599-174
1200800042890
599
174

社會主義の發展

—新譯・增補・註釋—

エンゲルス著
堺　利彦譯

44

内務省
5.1.-6
正本

40

白揚社

社會主義の發展

—空想から科學へ—

(釋註・補增・譯新)

エンゲルス著
堺利彥譯

一九三〇年版

昭和五・一・一・東京

599-174

譯者の序

私が初めて社會主義の思想に接觸したのは明治三十四年(一九〇一年)の頃であつた。それから三年の後、明治三十七年、私は初めてマルクス・エンゲルスの『共産黨宣言』を讀んだ。そしてそれを、幸德秋水と共に反譯して、週刊『平民新聞』に載せた。それから又二年の後、明治三十九年(一九〇六年)七月、私は初めてこの『社會主義の發展』を反譯して、雜誌『社會主義研究』に載せた。その時の表題は『科學的社會主義』であつた。私はこの二大名著を初めて日本に紹介し得た事を以て聊か自ら誇りとしていた。然しその譯文が甚だマズくもあり、又少なからぬ誤謬をも含んで居たことは、勿論である。

その後、私は幾度もこの二書の改譯に勉めた。そして『宣言』の方は寫本として處々に存在し、或は誰人かの無屆出版の禁止本として多少殘存して居るだけで、今だに公刊の自由を得ないが、『發展』の方は幾度も幾度も刊行の機會を得た。即ちその初は大正七年(一九一八年)三月および四月の雜誌『新社會』に於いてであり、次は大正十年、大鐙閣からの單行本、更にその次は大正十三年、白揚社からの單行本であつた。そしてそれらの單行本の表題は、『空想的及科學的社會主義』

『空想から科學へ』『空想的社會主義と科學的社會主義』など色々であり、そして又附錄として、原書の英譯の序論が、『唯物論と宗教思想』といふ表題で加へられて居たりした。

然しそれまでの私の譯文は、總て英譯からの重譯であつたので、昭和二年一月、更に原文からの直接譯を、同じく白揚社から發行した。その表題は『社會主義の發展』であつた。その時、序論だけは別冊のパンフレットとして發行したが、後の版には又それを本書の附錄にした。

然るに昭和三年八月、改造社のマルクス・エンゲルス全集第十二卷の中で、この書が私の受持とされた時、私は更に前譯に少なからぬ訂正を加へ、今度は『空想的社會主義と科學學的社會主義』といふ表題を附した。

次に昭和四年二月、『改造文庫』が初めて發行された時、それの第一部第十篇として、私のこの譯書が『社會主義の發展』といふ表題で收錄され、白揚社とも諒解の上、今現に世上に行はれている。

然るに今回又、白揚社から（改造社とも諒解の上）この『新譯・增補・註釋』版が發行される。これは定價も稍や高くなつて居るが、新らしい附錄等も加へられてあるので、改造文庫の廉價版と相俟つて、兩々共に、大なる便宜を讀書界に提供するものと考へる。

本譯書の新らしい附錄は、土地共有村の研究『マルク』と、原著の序文四篇と、ラデックの『科學から實行へ』の梗概との三種である。これら諸篇の內容は、目次の小見出しにチラリと目を通して下されば、誰にでも直ぐ分るとほり、いづれも甚だ重要な、無くてならぬものである。

扨これで兎にかく、社會主義の初學者と研究者とが、何はおいても、一度は必ず、是非々々讀まねばならぬ二書の中、一つだけは先づほゞ完全なものになつたわけである。あとは只、『宣言』の出るのが待ちどほいだけである。

『社會主義の發展、空想から科學へ』といふ表題は、ドイツ本の "Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft" を直譯したものであるが、それが英譯では "Socialism : Utopian and Scientific"（社會主義、空想的と科學的）となつて居り、フランス譯では、"Socialisme utopique et socialisme Scientifique"（空想的社會主義と科學的社會主義）となつて居る。

本文各章の見出し、各章內の段の分け方と其の見出し、附錄の段の分け方と其の見出し等は、總て譯者が諸書を參照して適宜に拵へたもので、原文にそうなつて居るのではない。『原註』とことわつてない註釋は、總て譯者が附けたものである。中には他書の註釋をそのまゝ借用したのもある。猶、譯文中の、括孤內の小文字は、譯者が便宜の爲に挿入した、說明的の補足である。猶

又、文字の右側に、、、、を附した部分は、原文がゲシュペルト（間隔組）になつて居る個所である。

本書著作の由來、意義、內容等については、『附錄三』の『序文四種』（一六九頁以下）を熟讀せられたし。序文の位置等につき、便宜上、譯者が多少の變更を加へた事については、それぞれの部分にて御承知を願ひます。

一九三〇年一月

堺　利　彥

總目次

譯者の序 …… 1
總目次 …… V
社會主義の發展 —空想から科學へ— …… 1
第一章　空想的社會主義 …… 3
一　フランス革命の意義 …… 3
二　ブルジョアと、プロレタリアの先驅 …… 6
三　三大空想家の出現 …… 8
四　革命後に於ける新社會の失望 …… 10
五　未熟な事實と未熟な思想 …… 13
六　サン・シモン …… 15
七　フーリエ …… 18
八　オーエン …… 21

九　折衷的社會主義の混成酒……28
第二章　マルクスの二大發見……31
一　辯證法と形而上學……31
二　形而上學の考へ方……32
三　辯證法の考へ方……34
四　唯物史觀……40
五　剩餘價値說……47
第三章　科學的社會主義……51
一　唯物史觀の前提……51
二　近世社會主義……52
三　社會的生産と資本家的領有……54
四　プロレタリアートとブルジョアジー……59
五　生産界の無政府狀態……60
六　産業豫備軍……64

七　恐慌……68
八　資本の集中、生産力の國有……71
九　勞働階級の政權掌握……75
十　自由の國……80
十一　歷史的進化の概括……84
唯物史觀について（附錄一）……89
一　唯物論は英國の土着兒……91
二　英國の不可知論……97
三　新カント派の不可知論……101
四　封建制度とブルジョアジー……105
五　ルーテル及カルヴインの宗教改革……107
六　英國貴族とブルジョアジーとの妥協……111
七　英佛の唯物論とブルジョアジー……114

八　ブルジョアジーと宗教的信條……117
九　ブルジョアジーの無教育と偏見……120
十　道德的手段に依つて人民を御すべき時……125
十一　大陸ブルジョアジーの自由思想放棄……127
十二　勞働階級の勝利の希望……129

マルク（附錄二）

一　ドイツの大昔の土地制度……133
二　民族の血緣的編成と土地の共有……135
三　マルク組合、割地、抽籤地……136
四　交替所有から私有財產……139
五　地形に强制された私有制……141
六　ローマの征服、無制限私有……143
七　共有制度の種々なる殘存……144
八　共有マルクの遺物遺法……145
九　マルク制度、都市制度、同業組合制度……147
十　マルク組織の順應力、農奴の發生……149
十一　マルクの存續、農奴制の確立まで……152
十二　資本時代、大農時代、農民の墮落……155
十三　自由農民の再建、社會的農業、農民と勞働者……159

序文四種（附錄三）

原書第一版の序（エンゲルス）……162
原書第四版の序（エンゲルス）……167
英譯の序（エンゲルス）……169
一　この書の由來……175
二　經濟學的用語の說明……177
三　唯物史觀について……177
……180
……181

原書第五版の序（カウツキー）……182
一　今日なほ潑溂たる生氣……182
二　附錄「マルク」中の、豫言の間違ひ……183
三　豫言のはづれた理由……184
四　工業の大勃興、農業への影響……186
五　小農經營と大農經營の關係……189
六　工業國と農業國の關係、慢性不景氣時代……191
七　世界工業化の進捗、社會革命の思想……193
八　農業の一新形勢、豫言の別形體での實現……195

科學から實行へ（ラデック、梗概）（附錄四）……199
編者のはしがき……201
一　空想から科學への發展……203
二　共產主義の僞造……204
三　改良主義的幻想の沒落……205
四　權力への道の追求……206
五　世界戰爭の教訓……207
六　ロシヤ革命の教訓……207
七　プロレタリアートの獨裁……（以下略）
八　革命と反革命……
九　民主々義か、勞働階級支配か……
十　ソヴイエット、國際プロレタリアート勝利の象徵……

——總目次終——

社會主義の發展

——空想から科學へ——

第一章　空想的社會主義

一　フランス革命の意義

近世社會主義は、先づその内容から云へば、一面には今日の社會に行はれている、有産者と無産者、資本家と賃金勞働者の階級對立の認識、一面には生産界に行はれている無政府狀態の認識から生じた産物である。けれども、その理論的形式から云へば、近世社會主義は、元來、十八世紀に於ける、フランスの大啓蒙學者達の主張した諸原則を、一層前進させた所の、外見上それを一層徹底させたの所の、繼續として現はれている。だから近世社會主義は、その根本が如何に深く物質的經濟的の事實の上に置かれてあらうとも、他の總ての新學說と同じく、兎にかく先づありあはせの思想的材料と結びつかねばならなかつた。

フランスに於いて、來るべき革命に對し人心を開發した所の諸大人物は、皆な自ら極端なる革命家として立つていた。彼等は、如何なる種類の者であらうとも、あらゆる外來の權威を認めなかつた。宗教、宇宙觀、社會、國家制度、一切の者が最も假借なき批判に附せられた。一切の者

が道理の裁判席の前に自己の存在理由を立證するか、さもなくば、存在を斷念せねばならなかつた。理智が一切の者に對する唯一の尺度となつた。實にそれは、ヘーゲルの云つたように、世界が頭で立たされている時代であつた。(1) その意味は、先づ第一、人間の頭と、その頭の思惟に依つて發見された原則とが、あらゆる人間の行爲と社會的結合との基礎たる事を要求したと云ふのである。然し、その意味は後に又擴大されて、右の原則と矛盾する現實は、正にその上下を顚倒せねばならぬと云ふ事にもなつた。あらゆる從來の社會形體および國家形體、あらゆる傳來の舊思想、それらは總て不合理の者として塵溜に投げ棄てられた。世界は從來たゞ偏見に依つてのみ導かれて來た。過去一切の者は只だ憐憫と侮蔑にのみ値していた。今や初めて、日の光、道理の王國が現はれた。迷信、不義、特權、及び抑壓は、今日以後、永劫の眞理、永劫の正義、自然に基づく平等、及び人間不可分の權利に依つて驅逐されると云ふのであつた。

(1) フランス革命に對するヘーゲルの評語は次の通り。『正義の思想、正義の觀念が忽ちにして勢力を占め、不正義の舊足場はそれに對して何らの抵抗をも爲し得なかつた。かくて此の正義の觀念の上に今や一つの憲法が設立され、そして今後は、一切の者がその基礎の上に立たればならぬのであつた。太陽が天空に懸り、諸遊星がそのまわりをまわつてから以後、未だ曾て人間が頭で立ち、卽ち思想で立ち、そして

それに從つて現實を作りあげるといふ話を聞いた事がない。昔しアナクサゴラスが初めて云つた。道理が、理性が、世界を支配すると。然るに人間は今や初めて、思想が精神界の現實を支配せねばならぬといふ事を承認するに至つた。これは實に燦然たる日の出であつた。總ての思索する生存物が相共に此の日を祝賀した。莊嚴なる情緒が當代を風靡した。人心の熱情が世界に漲り渡つた。今こそ神意と世界との調和が來たかのように。』(ヘーゲル、歷史哲學、一八四〇年、五三三頁。)——故ヘーゲル教授の斯くの如き、危險な破壞的な學說に對し、今や正に社會主義鎭壓法を適用すべき好時期ではないか。——(原註)

譯者云。このヘーゲルの評語について、一つの疑問がある。原文の Der Gedanke, der Begriff des Rechts を、私は『正義の思想、正義の觀念』と譯したが、英譯には、それが Thought, the conception of Law となつて居り、そして次の『この正義の觀念の上に』が、In this conception of Law となつている。そうすると、英譯は、『思想——卽ち法則の觀念——は』といふ意味に原文を讀んで居るのである。卽ち Der Gedanke,——der Begriff des Rechts と見たのである、然るに譯者はそれを、Der Gedanke des Rechts,——der Begriff des Rechts と讀んだわけである。この英譯はエンゲルス自身も必ず見て居ると思はれるので、そこに疑問が起るのです。

然し我々は今知つている。この道理の王國(2)はブルジョアジーの王國を理想化したものに過ぎな

かつた。この永劫の正義はブルジョア的正義として實現された。この平等は法律の前に於けるブルジョア的平等に歸着した。ブルジョア的所有權は、最も根本的なる人權の一つとして宣言された。そして道理の國家、ルソーの社會契約說が實現されたが、それは只ブルジョア的民主共和制としてのみ實現され得た。斯くて十八世紀の大思想家等も其の總ての先行者と同じく、それぞれの時代から荷はせられた制限を超越する事は出來なかつたのである。

（2）『王國』の原語は Reich で、『王國』でもあり、『帝國』でもあり、只『國』でもある。自然界に應用した場合には、生物界、植物界、鑛物界などの『界』に當る。英語の Kingdom には King（王）といふ言葉が現はれて居るが、植物界を植物王國と云つて平氣で居る事を思へば、王のないフランス國を、道理の王國、ブルジョアジーの王國と言つた所で、別に不思議はない筈である。

二　ブルジョアと、プロレタリヤの先驅

然るに當時、封建貴族と、それ以外の一般社會の代表者を以て任ずる商工市民[1]（即ち元來のブルジョア階級）との對立と相並んで、別に搾取者と被搾取者、富裕な遊惰者と貧困な勞働者の、一般的對立があつた。この事情のあつたが爲にこそ、ブルジョアジー[1]（bourgeoisie）の代表者等は、特

殊な一階級を代表するのでなく、疾苦に惱む人間全體を代表するものとして、自ら標榜する事が出來たのである。然るに又、ブルジョアジー（bourgeoisie）は其の發生以來、既に自分の對立物を負はされていた。資本家は賃金勞働者なしには存立する事が出來ない。だから中世の同業組合[2]の商工市民が近世のブルジョア（即ち資本家）に發達したのと同じ比例を以て、その組合の弟子職人と、組合外の日傭稼が、プロレタリヤ[3]（即ち近世勞働者）に發達した。それで大體上、ブルジョアジーは貴族との戰ひに於いて、それと同時にその時代の諸種の勞働階級の利益をも代表すると稱する事が出來たのであるが、それでも猶ほ總てのブルジョアの大運動には、いつでも必ず、近世プロレタリヤの先驅として、大なり小なりの發達を遂げた所の、その階級の獨立的爆發が伴なつていた。例へば、ドイツの宗教改革および農民戰爭時代に於ける再洗禮派[4]およびトマス・ミュンツェル（Thomas Münzer）、イギリスの大革命に於ける平均黨[5]、フランスの大革命に於けるバブーフ[6]（Babouf）の如き。

（1）商工市民は即ち元來のブルジョア階級である。原語は Bürger 或は Bürgertum, 英語では Burgher, Burghers である。それが後のブルジョア（bourgois）で、それを階級として見た時、ブルジョアジー（bourgeoisie）となる。

（2）同業組合はドイツ語のツンフト（Zunft）、英語のギルド（guild）で、中世の商工市民は皆この組合組織で働いて居たのである。然し近世のブルジョア（即ち資本家）に發達したのは、主として彼等の中の大商人であつた。小さな手工業の職人は大抵みな亡びてしまつた。

（3）プロレタリア（Proletarier, Proletarian）、國語に依つて語尾が少しづゝ違つている。それを階級として見た時、プロレタリアート（Proletariat）となる。

（4）再洗禮派はキリスト教の一派で、その豫言者ミュンツェルが、ルーテルの宗教改革の不徹底に反抗して、原始キリスト教の共産主義を理想とする、農民運動を起したのであつた。

（5）「平均黨」は一四七〇年に於ける、アイルランドの農民一揆レヴェラアス（Levellers）の事。

（6）バブーフは、絶對平等の共産主義を唱道して、一七九七年、ギロチンに上された人。

三　三大空想家の出現

右の如き、未發達な階級の革命的叛亂に對して、亦それに相應する理論的發現があつた。即ち十六七世紀には理想的社會狀態の空想的描寫[1]があり、十八世紀には、既に直接の共産主義的學說（モレリー及びマブリー）[2]があつた。平等の要求は、こゝではもう政治上の權利に限られて居ら

ず、個人の社會的地位にまでも擴大されていた。癈絶さるべきものは階級的特權ばかりでなく、階級差別その者であつた。かくて、禁慾的な、一切人生の快樂を否認する、スパルタ流の共産主義が、この新學說の最初の發現形態であつた。[3]

（1）有名なモアの「ユトピヤ」や、カンパネラの「太陽の都」などを指したものと考へられる。

（2）モレリー（Morelly）も、マブリー（Mably）も、事跡は餘り傳はつて居ないが、共に十八世紀の有名な著述家で、殊に後者はバブーフに影響を與へた人である。

（3）當時はまだ生産力の程度が低く、總ての人を裕福に生活させる事は不可能と考へられたので、自然、禁慾的な主張が生じたのである。

次に三大空想家が現はれた。サン・シモン。この人に取つては、プロレタリヤ運動と並んで、ブルジョア運動が猶幾分の力を有していた。[1] フーリエー。及びオーエン。この人は資本家的生産の最も發達した國（イギリス）に於いて、そしてそれから生じた反目對立の影響の下に於いて、フランスの唯物論と直接の關係を持ちつゝ、階級差別癈止の提唱を組織的に發展させた。[1]

（1）こゝの意味は後の第六節「サン・シモン」と、第八節「オーエン」を讀めば自然にわかる。

この三人に共通する點が一つある。彼等は皆、丁度その頃、歷史的に産出された所の、勞働階

級の利益の代表者として現はれなかつた。彼等は、かの啓蒙學者と同じく、先づ特殊な一階級を解放しようとするのでなく、一擧にして全人類を解放しようとした。彼等は又同じく、道理の王國と永劫の正義を實現させようとした。但し彼等の王國は、啓蒙學者のそれと比べて、天地隔絶のものであつた。彼等に取つては、啓蒙學者の學理に依つて立てられたブルジョア社會も、全く不合理、不正義のものであり、從つて封建制度および一切前代の社會狀態と同じく、直ちに塵溜に放りこまるべきものであつた。今日まで純理と正義が此の世界に行はれなかつたのは、只その二者が正しく認識されなかつたからの事である。從來只だ不足したものは天才ある個人であつたのだが、それが今正に出現して眞理を認識したのである。そしてその天才の今ま出現した事も、その眞理の今ま正に認識された事も、歷史發展の連鎖として必然的に起る不可避の事件ではなく、全く只だ一個の幸運である。故に彼が今から五百年前に生れて、迷妄、鬪爭、苦悶の五百年を此の人類から救ふといふ事も、全く無いとは限らなかつたのである。

四　革命後に於ける新社會の失望

我々は、革命の先驅者たる十八世紀のフランス哲學者達が、一切萬事に對する唯一の審判者として如何に道理に訴へたかを見た。合理的の國家、合理的の社會が建設さるべきであり、その永劫の道理と矛盾する一切の事物は假借なく排除さるべきであつた。然るに我々は又、この永劫の道理が、現實に於いては、當時ブルジョアジーに發達しつゝあつた所の、中流市民の心意を理想化したものに過ぎない事を見た。そこでフランス革命がこの合理的社會、この合理的國家を實現させた時、勿論その新制度は以前の社會狀態に比べては合理的であつたに相違ないが、決して絶對に合理的の者とはならなかつた。

合理的國家は全く崩壞した。ルソオの社會契約說は恐怖時代の中にその實現を見た。そこで自分の政治的能力に信賴を失つたブルジョアジーは、先づ執政官政治の腐敗の中に逃れ、遂にはナポレオンの專制政治の保護の下に隱れた。斯くて期待された永劫の平和は、際限なき征服戰爭に轉化した。合理的社會は少しもうまく行かなかつた。貧富の對立は、社會の一般的繁榮の中に解け去るどころでなく、却つて兩者間の橋渡しをしていた所の、同業組合その他の特許制度が廢止された爲、又兩者の對立を緩和していた所の、教會の慈善事業が廢止された爲、それが一層激化された。『財產所有の自由』は封建制度の桎梏を免かれて今や正に眞實となつたが、それは小市民および小農民に取つては、大資本家および大地主の壓倒的競爭の下に押しつぶされて、その小財產

を直ちにそれらの大旦那連に賣り渡す事の自由であり、從つてそれは小市民および小農民に取つては『財産から離れる自由』となつていた。斯くて資本家的基礎の上に立つ産業の繁榮は、勞働大衆の貧困と悲慘を以て社會存立の條件たらしめるに至つた。カーライルの云つた樣に、段々と現金勘定が社會を結びつける唯一の鎖の環となつた。犯罪の數が年と共に增加した。先に白晝公然として行はれた封建的罪惡は、絶滅しないまでも、今は兎にかく後ろの方に押しやられたが、その代り、從來祕密の中に行はれていたブルジョア的罪惡が、今度は盛んな勢ひで茂りだした。商業は段々烈しく詐欺の術となり、革命的合言葉の『博愛』は、競爭の戰場に於ける奸策や嫉妬として實現された。暴力的壓伏が去つて不義惡德がそれに代り、社會的勢力の第一たる劍が隱れて、黃金がそれに代つた。初夜の權[1]は封建の領主からブルジョアの製造家に移された。賣淫は前代末期の增加率を示した。そして婚姻そのものは、從來と同じく、賣淫の法律上に承認された形式、—即ちそれの正式の外裝—として存續し、加ふるに豐富なる姦通を以て補足された。

（1）中世の領主は、領內の農奴が結婚する時、その『初夜』を試みる權利を持つていた。その起原は、太古に於いて一夫一婦制が初めて行はれかけた時、婦人が一男子の私有となる以前、先づ全社會を代表する會長や神官の前に、謝罪的の、或はお初穗的の意味を以て、其の初夜を捧げるといふ習慣にあるのだらうと思はれるが、後世の實際的意義としては、單に領主の絶對支配權を明示する一つの儀式だつたに相違ない。

之を要するに、『道理の勝利』から生れた所の社會上および政治上の諸制度は、かの啓蒙學者達の燦爛たる期待と約束に比べて、苦い失望のボンチ畫であつた。この時、只だ望ましきは、この失望を明言する人物であつた。そしてそれが世紀の回轉と共に現はれた。即ち一八〇二年には、サン・シモンの『ジエネバ書簡』が現はれ、一八〇八年にはフーリエの第一の著述が現はれ（但し彼の學說の基礎は旣に一七九九年から起つて居るのだつたが）、一八〇〇年一月一日には、ロバート・オーエンがニュー・ラナークの工場經營に着手した。

五　未熟な事實と未熟な思想

然しながら當時、資本的生產方法、及びそれに伴ふブルジョアジーとプロレタリアートの對立は、まだ頗る發達不足であつた。大工業は、この頃はじめてイギリスに起つたのだが、フランスにはまだ全く知られて居なかつた。けれども此の大工業が、一方には、その生產方法の變革、即ちその資本家的性質の除去を絶對の必然と爲す所の矛盾、—その大工業から生じた階級と階級との

間の矛盾ばかりでなく、又それから作りだされた生産力と交換形式との矛盾―を發展せしめ、そして又一方には、その巨大な生産力の中に、正にその矛盾を解決すべき手段方法をも發展させるのである。だから若し一八〇〇年の頃を以て、新らしい社會制度から生ずる其の矛盾が初めて現はれかけた時だとするならば、その矛盾を解決する手段方法についても又、遙かに善く其の事があてはまるのである。パリの無産大衆は、恐怖時代の間、一時支配權を掌握して、それが爲、ブルジョアジーの意に反してすらも、ブルジョア革命を勝利に導き得たのであるが、然し彼等は只それに依つて、彼等の支配權を維持する事が、當時の狀態の下に於いて如何に不可能であるかを立證したのであつた。プロレタリアートはこの時はじめて無産大衆の間から分離して、新階級の幹となりかけたのだが、彼等はまだ全く獨立した政治運動の能力を缺き、壓迫の下に苦惱するといふ身分であつて、自ら助ける能力を缺くが爲に、どうしても外部から、或は上方から、助を與へられるより外は無いのであつた。

この歷史的情勢が、又かの社會主義創設者を支配した。即ち未熟な資本家的生産狀態と、未熟な階級狀態とに相應する、未熟な學說が生じた。社會問題の解決法は、當時まだ未發達な經濟關係の中に潛んで居たのだが、彼等はそれを頭の中から作りだそうとした。社會は惡事ばかりを現

出している。之を除去するのが道理心の任務である。故に問題は、完全な新社會制度を發明して、宣傳の方法に依り、出來る場合には模範的實例に依り、外部からそれを社會に課する事であつた。然るに其の新社會制度は固より空想に墮したものであるから、その細目が完備すればするほど、いよ〳〵ます〳〵純粹な幻想に陷ることを免かれ得なかつた。

これだけの事さへ確定すれば、我々はもう一刻も、この既に全く過去に屬した方面の問題を論議する必要はない。我々はそれを世間の群小文士に委して、今日では只だ我々を微笑せしめるに過ぎない所の其の幻想に對して、彼等が勿體らしくそれを詮索するに任せ、又斯くの如き『狂的思想』に比べて、彼等自身の平明なる考へ方の優越を誇らせて置けばいゝ。我々としては寧ろ只、この幻想の殼を破つて到る處に迸り出てる所の、そしてかの俗物者流が全く認め得ないでいる所の、あの天才的の大思想と其の萠芽とを喜ぶものである。

六　サン・シモン（Saint Simon）

サン・シモンはフランス大革命の子で、大革命の爆發の時、まだ三十歲になつて居なかつた。この革命は、その當時まで特權を與へられていた怠惰階級、即ち貴族と僧侶に對する、第三階級

—即ち生産と商業に從事する國民の大群—の勝利であつた。然しこの第三階級の勝利が、實はその階級中の一小部分の獨占的勝利であり、その階級中の特權ある社會層、即ち有産ブルジョアジーの政權獲得である事が、間もなく暴露された。實際、ブルジョアジーは、まだ革命の進行中、貴族僧侶から土地を沒收して後、それを民間に賣出した投機事業の爲にも、又軍事請負に依つて國民に對して行つた詐欺手段の爲にも、誠に急激な發達を遂げた。そしてこの詐欺師等の支配こそ、即ち執政官時代に於いてフランス國と革命とを滅亡に瀕せしめ、從つて又ナポレオンにクーデターの口實を與へたものであつた。

だからサン・シモンの頭の中では、第三階級と特權階級との對立が、『勞働者』と『怠惰者』との對立といふ形を取つていた。その怠惰者とは、昔の特權者ばかりでなく、亦總ての、生産と商業に參加しないで、金利ばかりで生活する者であり、又その勞働者とは、賃金勞働者ばかりでなく、亦た製造業者、商人、銀行家などの事であつた。これらの怠惰者が智力的指導者、政治的支配者たる資格を失つた事は疾くにから明白で、それが革命に依つて最終の決定を與へられた。又無産者がその資格を持たない事は、恐怖時代の經驗に依つて證明されたものと、サン・シモンに見えた。然らば誰が指導し支配すべきであるか。サン・シモンに依れば、科學と産業、その二つが

新らしい宗教的の紐に依つて結合されて、それが宗教改革以後、久しく破壞されていた宗教思想の統一を回復すべきものであつて、それは必然に神祕的な、そして嚴密に宗教政治的な『新キリスト教』であつた。然るにその科學とは學者を意味し、その産業とは主として活動的なブルジョア、製造業者、商人、銀行家などを意味していた。そこでこのブルジョアは即ち一種の官公吏、一種の社會的信任者に變形すべきものであるが、それで矢張り勞働者と對立して、命令權あり、且つ經濟的にも特權ある地位に置かるべきであつた。殊に銀行家は、信用の調節に依つて社會的生産の總體を管理するの任務に當るべきであつた。この考へは全く、フランスに於いて大産業が、—從つて又ブルジョアジーとプロレタリアートの對立が、—初めて發生しかけた時代に適合するものであつた。然しサン・シモンが特に重きを置いたのは次の一事である。即ち彼が到る處に於いて、何物にも增して心を引かれるのは、『最も多數で最も貧困な階級』の運命である。

サン・シモンは既にその最初の著述なる『ゼネバ書簡』に於いて、『總ての人間は勞働すべし』と提言している。彼は又既に同書の中に於いて、恐怖時代が無産大衆の支配であつた事を知つている。そして彼はその大衆に向つて、『見よ、諸君の同志がフランスを支配した時、そこに何事が生じたか。彼等は饑餓をもたらしたではないか』と云つている。然し彼がフランス革命を階級戰

爭と解し、而もそれが、單に貴族と商工民の間だけでなく、貴族と商工民と無產者の間に於ける階級戰爭だと解した事は、一八〇二年の當時として、最も天才的な發見であつた。一八一六年には、彼は政治を生產の科學と解釋し、政治が全く經濟の中に吸收さるべき事を豫言している。經濟事情が政治組織の基礎だといふ思想は、こゝではまだ、ほんの萠芽として現はれて居るとしても、人に對する政治的支配が、物に對する管理、及び生產過程の經營に變ずるといふ思想、從つて又、近來に至つて議論のやかましい『國家の廢止』といふ思想が、既にここで明かに表白されている。

彼は又、一八一四年、聯合軍がパリに侵入した直ぐ後、及び更に一八一五年、百日戰爭の間に於いて、ヨーロッパの繁榮および平和の唯一の保證として、フランスとイギリスの同盟、及び其次には此の二國とドイツとの同盟を提唱して、同時代の人々に對する卓越を示した。一八一五年の當時、フランス人に對してウォータルーの戰勝者たるイギリスとの同盟を說くのは、歷史的先見と共に、實に亦た多大なる勇氣を要する事であつた。

七　フーリエ (Charles Fourier)

我々はサン・シモンに於いて、その博大な天才的眼界の中に、後の社會主義者等が唱へた所の、嚴密に經濟的でない、殆んど總ての思想が、萠芽として含有されて居る事を發見するが、フーリエに於いては又、純フランス式の奇拔さを持つた、而かもそれが爲に深酷味を失はない、社會現狀の批評を發見する。フーリエはブルジョアジーに對し、又革命前の熱狂的なブルジョア豫言者、及び革命後の偏頗なブルジョア頌德者に對し、その言質を捕へる。彼はブルジョア世界に於ける物質的および道德的の醜態を假借なく摘發する。彼はそれと並べて、前代の啓蒙學者達の燦爛たる約束、—道理ばかりが行はれる筈の社會、幸福の充ちあふれる文明、人間の限りなき完成などいふ約束—を擧げ、更に彼と同時代の、ブルジョア思想家連の美辭麗句を擧げる。そして彼は、如何にその最も花々しい言葉が到る處に於いて最も哀れな現實と對應して居るかを示し、痛烈な皮肉を以て、この救ふに道なき文飾的大失敗を罵倒している。

フーリエは單なる批評家でない。彼れのいつも快活な性質は彼を諷刺家と爲し、而も古今を通じての最大諷刺家の一人と爲した。彼は力もあり艶もある筆致を以て、革命の沒落と共に榮えだした詐欺的投機、及び當時のフランス商業界に於ける一般の商賣氣質を描寫している。猶それよりも見事なのは、兩性關係のブルジョア的形態、ブルジョア社會に於ける婦人の地位に對する彼

れの批評である。或る一つの社會に於いて、その婦人解放の程度は即ちその一般的解放の自然的尺度であるとは、實に彼が初めて喝破した所である。

然しフーリエの最大な點は、社會の歴史に關する彼れの解釋である。彼は今日までの社會の全過程を四つの發展段階に分つている。即ち蒙昧時代、野蠻時代、家長時代、文明時代。この最後の者は今日の謂ゆるブルジョア社會、即ち十六世紀以後、行はれている所の社會制度に相當するものである。そして彼は論證する。、文明社會は、野蠻時代に於いて單純に行はれていた各種の惡德を、複雜な、曖昧な、意義の不明な、僞善な存在體に作りあげる。』又文明は常に『惡循環』[1]を以て、即ち矛盾を以て進行し、絶えず新たに矛盾を作りだしては、それを解決する事が出來ないで、つまりいつでも、自分がそれに到達しようと思ひ、或はそれを獲得しようすると稱する所のもの、、正反對に到達する。例へば『文明の下に在つては、豐饒過多その者の間から貧困が發生する。』

（1）原語 fehlerhaft Kreislauf は Zirkelschluss 即ち循環の意味である。英語の vicious circle を考へ合せて、『惡循環』といふ譯語を作つて見た。

斯くてフーリエは、同時代のヘーゲルと同じく、最も巧妙に辯證法[1]を使用している。彼はその

同じ辯證法を用いて、人間が無限に向上するといふ世論に反對し、總ての歴史的段階がその向上期を有すると共に、又その向下期を有することを論じ、且つその考へ方を全人類の將來にも適用した。カントが地球の究極的破滅といふ考へを自然科學の中に入れたと同じく、フーリエは人類の究極的破滅といふ考へを歴史觀の中に入れた。

（1）辯證法の事については、第二章に委しい説明がある。

八　オーエン（Robert Owen）

フランスに於いて革命の暴風が全土に吹きすさんでいる間、イギリスに於いては、それよりも平靜な、だからと云つてそれより力の弱くはない、大變革が行はれていた。蒸汽と新らしい製造機械が手工的製造業[1]を近世的の大工業に變化させ、それに依つてブルジョア社會の全地盤を革命しつゝあつた。手工的製造業時代の遲々たる發達の歩みは、今や生産界に於ける本當の革命的爆進時代[2]と化した。社會は不斷增大する急速力を以て、大資本家と無産勞働者とに分裂した。その中間には、昔の安固な中流階級の代りに、今は不安固な職人と小商人の大群が、全國中の最も動搖しやすい部分として、覺束ない存在を續けていた。

（1）原語マヌフアクツール（Manufaktur）。これは普通に製造と譯され、手工的製造も機械的製造もその中に含まれているが、元來は機械的製造以前の手工的製造を意味したもので、マヌは即ち手の事である。然し中世の純粹な手工業が個人的であるのに反し、マヌフアクツールは多數の職工が大規模の工場で分業的に勞働するのだから、それと區別する意味に於いて『工場的手工業』と譯する場合もある。第一八二頁『英譯の序』の中、『二、經濟的用語の説明』を見よ。

（2）原語 Sturm=und Drangperiode は、十八世紀（一七七〇—八〇年）に猛烈を極めたドイツ文學革命運動時代の事。

この新生産方法は、まだその興隆期のホンの初に屬していた。それはまだ、當時の狀態の下に唯一可能なる、正規正常の生産方法であつた。けれども當時既に、それが爲、目にあまる社會的害惡が生じつゝあつた。即ち大都市の貧民窟に於ける放浪者の群集。あらゆる風俗習慣の拘束力、上下主從の關係、家族關係等の弛緩、勞働過度、殊に恐るべき程度に於ける婦人小兒のそれ。勞働階級が田舍から都會へ、農業から工業へ、安固な生活から日々變化する不安な生活へ、つまり急激に全く新たな事情の中へ投げこまれた結果としての一般的墮落。

この時に當つて、廿九歳の青年製造家が改革者として出現した。この人は小兒の樣な、崇高

とも云ふべき、單純な性質を有し、そして同時に、人間の指導者たる稀有の天禀を有していた。彼、即ちロバート・オーエンは、唯物論的啓蒙學者の學説を取り、人間の性格が一方には遺傳の産物であり、他方には其の生存中に於ける、但し殊にその發育期に於ける、境遇の産物である事を信じた。(1)

（1）マルクスの『フオイエルバハ論要項』（エンゲルス著『フオイエルバハ論』の附錄）の第三項は、こゝの參照になる。「人間は境遇と教育との産物であり、從つて變化した人間は、別の境遇と、違つた教育との産物であるとする唯物論は、その境遇こそ人間から變化されねばならぬものである事、又その教育者自身が教育されねばならぬものである事を忘れている。從つてこの唯物論は、必然的に、社會を二つの部分に分ち、その中の一方を社會の上に超越させる事になる。（例へばロバート・オーエンの場合。）境遇の變化と、人間の活動、即ち自己變化との一致は、革命的實踐としてのみ、我々に把握され、合理的に理解され得るものである。」

この譯文は佐野文夫氏のものに依つた點が多く、又終りの部分は、後にリヤザノフ氏がマルクスの手帳から見つけだしたといふ原文の形に依つた。エンゲルスは右の原文に對し、多少の説明的變更を加へておいたものと考へられる。いづれにしても、この原文は、マルクスの覺え書に過ぎないので、極めて難解な字句になつている。

彼れの同階級者は大てい皆、かの産業革命の中に只だ紛亂と混沌を見て、その間に火事場泥棒を働らき、俄分限になる事ばかり考へていた。然るに彼は其中に於いて、得意の理論を實行して、それに依つて混沌の中に秩序を立てるべき機會を見た。彼は初めマンチエスタで、五百人の勞働者を使用する或る工場の支配人として、早くからそれを試みて好成績を得て居たが、一八〇〇年から一八二九年までの間、彼は更にスコットランドのニューラナークで、合資會社の業務擔當社員として大紡績會社を經營し、前同樣の遣口ではあるが、前よりは一層大なる活動の自由を持ち、遂にその成功に依つて名聲を全ヨーロッパに博した。元來、彼れの勞働者は種々雜多の分子から成り、且つその大部分は甚だしく墮落した者で、それが漸次に增加して二千五百人といふ多數になつたが、彼はそれを一個の模範的植民地と化し、そこには泥醉者も、警察官も、裁判官も、訴訟沙汰も、救貧法も、慈善も、全くその跡を絕つに至つた。そしてそれが全く、人間を人間らしい境遇に置き、殊に注意して發育中の兒童を教育した結果であつた。彼は幼稚園の案出者で、初めてそれをニューラナークに開設した。小兒は二歲から幼稚園に來るのであつたが、彼等は皆な家に歸ることが厭がるほど、樂しくそこで遊ばされていた。又彼の競爭者等は、一日十三四時間その職工を働かせて居たのに、ニューラナークでは僅かに十時間半の勞働であつた。綿花貿易に

恐慌が起つて、四個月間休業した時でも、休業中の勞働者はその期間を通じて賃金の全額を支拂はれた。そしてそれだけの事をしながら、會社はその價値に於いて二倍以上となり、最後までその株主達に多大の利益を配當した。

それでもオーエンはまだ滿足しなかつた。彼が勞働者の爲に作りだした其の生活も、彼れの眼中に於いては、まだ迚も人間らしいものではなかつた。『あの人達は私の奴隸であつた。』彼が彼等に與へた比較的良好な生活狀態も、まだ迚も彼等の性格と智力とを、各方面に亘つて合理的に發達させる事が出來ず、況んや各自の生活力を自由に發揮させる事など思ひも寄らなかつた。『然るに此の二千五百人分の勞働が、半世紀足らずの昔なら、恐らく六十萬の人數を要したであらうと思はれるほど、それほど大きな現實の富を社會の爲に產出しつゝあつた。そこで私は自分に問うた。二千五百人の消費した富と、六十萬人の消費した筈の富との差は、どうなつたかと。』[1] その答は明白であつた。その差は即ち、この會社の拂込資本に對する五步の利子として、更にそれ以外、三十萬ポンド以上の純益として、持主達に支拂はれたのであつた。そしてニューラナークに於ける此の事實は、イギリスのあらゆる工場に於ける、ヨリ大なる程度の事實であつた。『若しこの、機械に依つて產出された新らしい財產が無かつたならば、かのナポレオンを仆して貴族主義

を擁護したヨーロッパ戰爭は、到底遂行され得なかつたであらう。そしてその新らしい力が即ち勞働階級の創作物であつた。[2]』だからその新らしい力の成果も亦た勞働階級に屬するものである。この新らしい强大な生産力は、從來只だ個人を富まし、民衆を奴隷化する爲に役立つていたが、オーエンに取つては、それが社會的新建設の基礎となつた。即ちこの生産力は實に總人の共同財産として、總人の共同福利の爲に運用さるべき筈のものであつた。

(1)(2)『心と行ひとの革命』から。これは『ヨーロッパの赤色共和主義者、共産主義者、社會主義者』の全部に宛てた覺書で、一八四八年フランス假政府に送られ、又イギリスのヴイクトリヤ女王とその責任顧問等に送られたものである。——(原註)

斯樣に、オーエンの共産主義は、純然たる事務的方法により、云はゞ商業的打算の結果として成立したのである。それは飽くまで實際的特質を以て一貫していた。從つて彼は一八二三年、アイルランドに於ける困窮の救濟策として共産植民地を提案した時、その建築費、年々の支出、及び見積りの收入について、完全な豫算を編成した。斯くて彼れの將來に對する明確な設計には、その細目の技術的考案が、平面圖から前面圖、側面圖、鳥瞰圖に至るまで、悉く專門的智識に依つて作られて居たので、そのオーエン式社會改良案が一たび採用された以上、專門家の見地から

さへも、其の細目の個條に反對すべき點が殆んど無かつたと云ふ。

オーエンが共産主義へ進出したのは、彼れの生涯の旋回點であつた。彼が單に一個の博愛家であつた間は、彼は只だ財富、稱贊、名聲、榮譽を得るばかりであつた。彼はヨーロッパに於ける最も人氣のある人物であつた。彼と同階級の人ばかりでなく、政治家も王侯も皆な贊意を以て彼れの言に傾聽した。然るに、彼が共産主義を標榜するや、形勢は忽ち一變した。彼に取つて、特に社會改良の道を塞ぐべき三大障礙は、私有財産と、宗教と、現行の結婚制度とであつた。それらを攻擊する時、彼の遭遇すべきものは、公社會からの破門、全社會的地位の喪失である事は、善く分つていた。然るに彼は少しもそれらの事に頓着せず、無遠慮な攻擊を續けたので、遂に豫期した事が起つて來た。彼は公社會からは追放され、新聞紙からは默殺され、その全財産を犧牲にした所の、アメリカに於ける共産的實驗には失敗して、それから直接に勞働階級に向ひ、其後なほ三十年、彼等の間に活動した。斯くてイギリスに於ける、勞働者の利益の爲の、あらゆる社會運動、あらゆる實質的進歩は、皆オーエンの名に結びつけられている。彼はそれから五年間の努力の後、一八一九年、遂に工場に於ける婦人小兒の勞働を制限する最初の法律を制定させた。彼は又、イギリスの總ての勞働組合が一個の大同盟に團結した時の、最初の大會の議長であつ

た。彼は又、完全な共産主義的社會制度に達する過渡的方策として、一面に共同組合（消費組合および生産組合）を起した。この事業は、その時以後、少なくとも商人も製造家も不用なものだといふ、實際上の證據を提供した。彼は又一面に勞働賣店、即ち勞働時間を單位とする勞働紙幣に依つて勞働生産物を交換する設備を作つた。この仕組は必然的に失敗の運命を有するものではあつたが、然しそれからズット後年に於ける、ブルードンの交換銀行をスツカリ豫見したわけであつて、只明かにそれと違ふ所は、あらゆる社會的害惡の萬能藥として立つたのでなく、モット、モット根本的な社會改革への第一歩を意味していた點である。

九　折衷的社會主義の混合物

これら空想家の考へ方は、その後永く十九世紀の社會主義思想を支配し、今なほ其の一部を支配している。極近來に至るまで、フランス及びイギリスの社會主義者は皆な之を奉戴していた。初期のドイツ共産主義も、―ワイトリング[1]をもこめて―同じく之に屬していた。彼等すべての者に取つては、社會主義は絶對の眞理と、道理と、正義の表現であつて、彼等は只それを發見して、それ自身の力に依つて、全世界を征服しようとしたのである。又絶對の眞理は、時間、空間、及

び人間の歴史的發展から獨立して居るのだから、何時何處でそれが發見されるかは、單なる偶然だと考へられた。然るにそれほどの、絶對の眞理と道理と正義が、各派の創立者に依つて、それぞれに異なつている。所が、この各人各樣の、絶對の眞理と、道理と、正義が、更に又その人々身の主觀的の判斷や、生活の條件や、智識と修養の程度やに依つて制約されるのだから、この絶對諸眞理の衝突に於いては、只だお互ひに疲れ弱るより外に解決の道は無いのである。從つてその衝突から生ずるものは、一種の折衷的平均的社會主義より外はなく、それが實際上、今日まで、フランス及びイギリスの、大抵の社會主義的勞働者の頭を支配して居たのである。そこでこの社會主義は、各派創立者の、成るべく反對論の少ない、現代批評、經濟論、及び將來社會の描寫から成る所の、多種多樣を極めた諸傾向の混合物であり、又その各組成分子が、谷川の丸い小石の樣に、論戰の流に摩擦されて、その固有の鋭い圭角を失ふにつれて、段々容易に作成される所の混合物であつた。故に社會主義を科學とする爲には、先づそれを現實的な基礎の上に置く必要があつた。

（1）ワイトリングは、マルクス等とほゞ同時代までドイツに活動していた共産主義者。

第二章　マルクスの二大發見

一　辯證法と形而上學

斯かる處に、十八世紀のフランス哲學と相並んで、及びそれに續いて、ドイツの新哲學が勃興して、ヘーゲルに至つて其の頂點に達した。ヘーゲル哲學の最大の功績は、思惟の最高形式として再び辯證法[1]（ヂヤレクチーク Dialektik）を採用した事であつた。ギリシヤの古哲學者は皆な生れながらの、生えぬきの辯證家で、その中、最も該博の智識を有していたアリストテレスは、既に當時に於いて、辯證法的思惟の最も根本的な諸形式を考究していた。然るに其後の新哲學は之に反し、辯證法の顯著な代表者（例へばデカルト及びスピノザの如き）もあるにはあつたが、特にイギリスの影響に依つて、段々と謂ゆる形而上學（タメフイジーク Metaphisik）の考へ方に固定してしまひ、從つて十八世紀のフランス人も、少なくとも特に哲學的な著述に於いては、殆んど全くその勢力の下に在つた。但し狹義に云ふ哲學の範圍外に於いては、フランス人は矢張り辯證法の名著を出して居る。かのヂドロオの『ラモウの子孫』及びルソーの『人間不平等起原論』

の如き、其の實例として想起するに足る。我々は今茲に、簡單に此の二個の思索法の本質を說明する。

（1）辯證法は昔のギリシヤ語のヂヤレクチクから來たもので、元來は會話術、辯論術などの意味であつた。然るにそれが次第に哲學上の推理方法として、六かしい意味を持つ事になり、或は修辭學と目され、或は論理學と同義になり、或は又詭辯術として用いられた。それで中世から近世にわたり、大體上、ヂヤレクチクは即ち論理を意味し、殊に巧妙なる討論辯駁の術を意味し、一面には詭辯的の胡麻化し論法を意味していた。然るにそれがヘーゲルに至り、初めて『推理の最高形式』として完成されたわけである。

二　形而上學の考へ方

我々が一般自然に對し、人間の歷史に對し、我々自身の智的活動に對して考察する時、我々は先づ、何物も同形を保たず、同處に止まらず、同質を存せず、常に運動し、變化し、出現し、消滅して、諸種の關係と諸種の相互作用とが、無限に混亂している所の畫面を見る。故に我々は先づ此の總畫面を見るので、其の個々の部分は多少ともまだ其の後方に引込んで居るのである。我々は運動し、推移し、相關する所の事物を見るよりは、寧ろ多く其の運動と推移と關係とを見る

のである。この原始的な、素朴な、而も實際に正確な世界觀は、即ち古代ギリシャ哲學の世界觀であつて、ヘラクリートが初めて明白に論述した所である。曰く、萬物は在り又在らず。何となれば萬物は流動して、常に變化し、常に生滅しつゝあるが故に。

然し此の世界觀は、現象の總畫面の全般的性質を正しく示すには足るけれども、其の總畫面を組み立てゝいる所の細目を說明するには不充分である。そして其の細目を說明し得ない間は、我々は其の總畫面に對して矢張り明瞭な觀念を有し得ないのである。そこで我々は此の細目を理解する爲に、事物を其の自然の、若しくば歷史的の關係から分離させて、個々別々に其の性情、其の特殊の原因結果等について、考察しなければならない。之が先づ第一に、自然科學と歷史研究との任務である。そして是等の諸學科は、古代ギリシャに於いては、何よりも先づ其の研究に對する材料を蒐集するのであつたから、其の地位はまだ當然、甚だ低い者であつた。凡そ何等かの批判なり、比較なり、種別、等級、部門の排列なりが行はれる前には、必ず或る程度の、自然的および歷史的材料が集められなくてはならない。故に確實な自然研究の端初は、先づアレキサンドリヤ時代のギリシャ人に依つて開かれ、後ち中世時代に於いて更にアラビヤ人に依つて發展させられたが、而も本當の自然科學は十五世紀の後半に始まり、それから後、不斷增加の速力を以

て進歩した。『自然』を其の個々の部分に分解する事、種々の自然過程と自然物とを明確な種別に分類する事、生物體內部の種々なる形態を解剖的に研究する事、これらが自然界の認識に於いて最近四百年が我々にもたらした所の、大進歩の基礎條件であつた。然るに此の研究法は、矢張り其の遺產として、自然物及び自然過程を、其の全部の總關係から分離させて、個別的に觀察する習慣を我々に殘した。即ち自然を觀察するに、其の運動に於いてせずして其の靜止に於いてし、根本的に變化する者とせずして常住不變の者とし、其の生に於いてせずして其の死に於いてするのであつた。そして此の見方がベーコンとロックとに依つて、自然科學から哲學に移された時、前世紀(十八世紀)に特殊なる偏狹思想、即ち形而上學的の考へ方が生れたのである。

形而上學者に取つては、事物とそれの思想的模寫たる觀念とは離れ離れのもので、一ツづゝ別々に考察さるべきものであり、一定不變の、固定した研究の目的物なのである。彼は絕對に相容れざる對立に於いて事物を考へる。彼の言葉は只『然り、然り、否、否』[1]である。『是より過ぐるは惡より出づる』[1]ものである。彼に取つては、一物は存在するか、然らざれば存在しない。一物が同時に、一物であり又他物である事は出來ない。肯定と否定とは絕對に相反撥し、原因と結果とは同じく固定的に對立する。

（1）新約聖書馬太傳第五章三十七節に、「爾曹（なんぢら）たゞ是（しかり）〳〵否（いな）〳〵といへ、これより過ぐるは惡より出づるなり。」とある。

チョット見ると、此の考へ方は我々に取つて甚だ分明である。これが即ち謂ゆる健全な常識である。然るに此の健全な常識なる者が、自家の四壁内の平凡な領域に於いてこそは、至極尊敬すべき先生であるが、一たび學問研究の大海に乘り出すや否や、實に驚くべき冒險をやる事になる。故に形而上學の考へ方は、其の研究題目の性質に從ひ、相當の範圍までは是認すべきものであり、又必要のものであるけれども、早晩その限界に到達して、それから以外に出る時には、忽ち偏見となり、短見となり、抽象となり、そして解くべからざる矛盾に陷つてしまふ。即ちそれは、個々の事物を考へて其の相互關係を忘れ、事物の存在を考へて其の成長と消滅を忘れ、其の靜止を考へて其の運動を忘れ、單に木ばかりを見て森を見ないからである。

三　辯證法の考へ方

日常の事柄としては、例へば、我々は一動物が活きて居るか否かを知り、又それを斷言する事が出來る。然しながら少し嚴密に研究して見ると、法律學者などの善く知つている樣に、それが

極めて複雜な問題になる場合が多い。母の胎内に在る子を殺す場合に、どこから以上を殺人と云ふべきかに就いて、法律家は徒らに其の頭を惱ましたが、とうとう其の合理的限界を見出す事が出來なかつた。それと同じく、死の瞬間を絶對に定める事も亦た不可能である。生理學に依れば、死は瞬間的即時的の現象でなく、寧ろ頻る長引いた過程である。

されば總ての生物體は、時々刻々に於いて、同一物であり、又同一體でない。生物體は時々刻々に外部から供給される物質を同化し、そして他の物質を分離させている。時々刻々、其の體内の或る細胞は死に、他の細胞は新に生じている。從つて早晩、其の體内の物質は全く一新され、悉く他の物質分子に依つて補充される。故に各生物體は、常に同一物でもあり、又違つた物でもある。

更に嚴密に研究を進めると、對立物の兩端、―例へば積極消極の如きもの―は、對立すると同時に、又相離れる事の出來ないもので、其のあらゆる反撥にも係はらず、亦た互ひに交錯して居るものである。それと同じく、原因結果といふ考へも、只だ個々の場合に適用した時にのみ正當となるので、其の個々の場合を宇宙全體との總關係に於いて考へる時になると、此の二者は忽ち入亂れとなつて、普遍的の相互作用といふ考へに變じ、原因と結果は間斷なく入れ代りを爲しつ

ゝ、今こゝに結果である者が、すぐ又そこに原因となり、更に又その逆を現ずる事になる。

總てこれらの思惟の過程と方式とは、形而上學の推理の埒内には、曾て入りこんで居ないものである。之に反し辯證法は、事物と其の觀念的模寫とを、兩者の關聯、連鎖、運動、生成、及び消滅に於いて、本質的に理解するものであるから、前記の如き自然界の諸過程は、即ち皆な辯證法獨自の運動方法を確證するものである。自然界は辯證法の證明である。そして近世科學は此の證明の爲に極めて豐富な、日々增加する所の材料を供給し、それに依つて、結局、自然は形而上學的でなく、辯證法的に働くものだと云ふ事を立證してくれたのである。即ち自然はとこしへに同一の循環運動を爲して居るものではなく、現實の歷史を作りあげて居るものである。此に於いて、我々は先づ何人よりも、ダーヰンを推さなければならない。彼は、現時の一切の生物體、即ち植物、動物、及び人類すらもが、幾百萬年間の進化過程の產物である事を證明して、形而上學の自然觀に致命的の打擊を與へた。然るに辯證法的の考へ方を學んだ自然科學者がまだ甚だ少ないので、此の新發見の結果と先入の思索法との矛盾を來し、それが爲に、今日の自然科學の理論的方面には、際限なき大混亂が起り、敎師も生徒も、著者も讀者も、皆な一樣の絕望に陷つて居るのである。

(1)マルクスがエンゲルスに送つた一八六〇年十二月十九日付の手紙（マルクス、エンゲルス往復書簡集第二卷四二六頁）に。「イギリス流の粗野な說き方ではあるけれども、此の書——（即ちダアヰン著、種の起原）——は我々の說に對する博物學的の基礎を持つものである。」

故に、全宇宙と、其の進化と、人間の進化と、及びそれらの進化の人心に於ける反映とに對する嚴密なる描寫は、只だ辯證的方法に依つて、成長と消滅と、進步的變化と退步的變化との普遍的相互作用に對し、不斷の考慮を拂ふ事に依つてのみ成就される。新ドイツ哲學は即ち此の精神を以て起つた者である。カントは先づその事業として、ニュートンの太陽系固定不變說および、かのニートン說に有名な第一刺激から以後に於ける、太陽系永久存續說を破つて、それを一個の歷史的過程と爲し、廻轉する星雲塊の中から、太陽及び總ての遊星の發生する事を說いた。同時に彼は又、太陽系の起原が之である以上、其の將來の死滅はどうしても必然だといふ結論に達した。爾來半世紀を經て、この說はラプラースに依つて數學的に立證され、更に半世紀を經て、種々なる濃度を有する、前記の如き灼熱の瓦斯塊が、空間に存在する事を、分光器が證明した。

この新ドイツ哲學はヘーゲル哲學に至つて其の頂點に達した。自然界、歷史界、精神界の全部が、このヘーゲル哲學に於いて、—こゝがヘーゲル哲學の大功績であるのだが、—初めて一個の

過程として、即ち絶えず運動するもの、變化するもの、變形するもの、發達するものとして考へられた。從つて此の運動と發達とに於ける、內的關係を論證しようとする企てが起つて來た。この見地からすると、人間歷史はもはや決して、今日成熟している哲理の裁斷に依つて悉く一樣に有罪を宣告される樣な、そして人は出來るだけ早くそれを忘れてしまふが善いと云ふ樣な、そんな無意味な暴動の荒れ狂ひではなく、實に人類その者の進化の過程と見るべきである。そこで思惟の任務はこの過程の段々の進行を、そのあらゆる迷路の間に追究し、外見上、偶然と見える一切の現象の中に、內的法則を立證するに在ることになつた。

ヘーゲル哲學が自已の提出した問題を解決しなかつたといふことは、今こゝでは、どうでも宜しい。ヘーゲル哲學の畫期的の大功績は、只その問題を提出した所にある。この問題は到底、單一の個人の解決し得る所でない。ヘーゲルはサン・シモンと共に、當時に於ける最も博學の人であつたけれども、それでも彼は猶、一つには、必然的に局限されて居る所の、彼自身の智識範圍に依つて制限され、二つには、彼れの時代の局限された智識と見解との、其の範圍と深度とに依つて、同じく制限されていた。之に加ふるに、更に又第三の制限があつた。ヘーゲルは唯心論者であつた。即ち彼に取つては、彼れの頭腦中の思想は、現實の事物および過程を大なり小なり抽

象した所の影像ではなく、却つて其の逆に、彼に取つては、事物とその發展とは、世界以前から既に何處かに存在している所の、理性（イデエ idee）の實體化された影像に過ぎないのである。この考へ方は一切の事物を顚倒させ、世界の眞實の關係を全く逆にしてしまつた。だからヘーゲルは、正しく且つ巧みに多くの事物關係を理解したには相違ないけれども、前記の理由の爲に、その細目に於いて、多くのツギハギ、コジツケ、コシラエ、要するにマチガイが生せざるを得なかつた。[1] ヘーゲル哲學は實際、救ふことの出來ない內的の矛盾に惱んでいた。即ち一方には、それは、人間歷史を進化の過程と見る所の歷史觀を根本提案として居るので、その性質上、謂ゆる絕對眞理の發展に依つて智識の絕頂に到達する事は出來ない筈であるのに、然るに又一方には、ヘーゲル哲學は即ちこの絕對眞理の精髓を以て任じているのである。自然と歷史との認識の一切を包括した、永遠に搖ぎなき智識體系といふ事は、辯證的思惟の根本法則と矛盾している。辯證法は固より決して、全外界に對する認識の體系が、時代から時代に亘つて、長足の進步を爲し得るといふ思想を排斥するものでなく、却つて反對に、それを容認するものである。

（1）マルクスは資本論第一卷の再版の序文に、次の如く書いている。「私の辯證的研究方法は、その根本

がヘーゲルのと違つているばかりでなく、實にその正反對である。ヘーゲルに取つては、人間の思惟過程——彼はそれをイデエ(理性)と呼んで一個の獨立した主觀體にまでも變化させて居るが——その思惟過程が現實界の造物主であり、現實界は單にそれの外面的現象に過ぎない。之に反し、私に取つては、觀念界とは、人間の頭腦の内で變形され反譯された物質界より外の何者でもない。……辯證法はヘーゲルに依つて神祕化されたとは云へ、それが爲め決して、ヘーゲルが、辯證法の一般的作用形態を包括的および意識的に證明した所の、最初の學者たる事を妨げるものではない。辯證法はヘーゲルに於いて逆立している。我々はその神祕の外殼の内に合理の核心を見出すべく、再びそれを逆樣に引くり返さねばならぬ。」

四　唯物史觀

かくて從來のドイツ唯心論の全然間違ひである事が知れると共に、必然的に再び唯物論が起つて來た。[1] 然し注意すべき事には、それは決して形而上學的の、全然機械的の、十八世紀の唯物論に返つたのでは無かつた。舊派唯物論は、素朴な革命的態度を以て、單純に過去一切の歷史を排斥したが、近世唯物論は歷史の中に人類進化の過程を見て、その運動法則を發見することを自己の任務としている。十八世紀のフランス學者、及びヘーゲルさへもが、自然界を以て、窮屈な循

環運動を爲す所の、永久不變の全一體あでると爲し、ニュートンが敎へた如く天體は永劫であり、リンネが敎へた如く生物種屬は不變であるといふ考へに支配されて居たが、近世唯物論は之に反し、近來進歩した自然科學の智識を取り入れ、自然界も矢張り時間の中に歷史を持つ事、諸天體が、自分の上に好都合の狀態の下に生ずる所の、生物の諸種屬と同じく、生れては死ぬるものである事を知り、循環運動については、それが一般に許され得る限り、無限に大規模なものになる事を知つている。右二つの場合とも、近世唯物論は根本から辯證法的であつて、もはや他の諸科學の上に君臨する所の、何等の哲學をも必要としない。各種の專門科學が、世界の事物と、事物に對する我々の認識との、全體的關連の間に於いて、それぞれの他位を明瞭にする事になれば、その全體的關連を取扱ふ所の特殊の科學は忽ち不用となる。從つて從來の總哲學の中、猶ほ獨立して殘存するものは、只だ思惟と其の法則の學問、即ち形式論理[2]と辯證法[1]のみとなる。その他は總て自然と歷史との實證科學に屬する。

(1)エンゲルスはこゝで『從來の』哲學、即ち形而上哲學を排斥している。辯證法、從つて又、辯證的唯物論は、エンゲルスの考へに依れば、猶ほ哲學として殘存する。フイロソフイ(哲學)といふ言葉をドイツ語のウエルト、アンシャウウング(世界觀)と反譯して見れば、それを唯物史觀の核心と呼び、又マル

クス哲學とも呼び得ることが當然となる。

(2)廣義の論理學は、思惟の形式と內容との關係、即ち經驗成立の原理を論究する認識論をも含むが、狹義の論理學は、思惟の形式と法則とのみを研究する。それが即ち形式論理學である、

然るに自然觀に於ける此の變轉は、諸種の研究の結果、それぞれ確實な認識材料が提供された其の程度に從つて行はれたのであるが、歷史上に於いては、それよりもズツト早く、歷史觀に決定的變化を生ぜしめた所の、歷史的事實が起つていた。一八三一年には、勞働者の最初の一揆がリヨンに起つた。一八三八—四二年には、最初の全國的勞働運動、即ちイギリスのチャーチスト運動[1]が、その頂點に達した。ヨーロッパの先進諸國に於いては、一方には大產業の、一方には新たに獲得されたブルジョア政權の發達した程度に應じて、プロレタリアートとブルジョアジーとの間の階級闘爭が、歷史の前面に現出した。資本と勞働の利益が一致すると云ひ、自由競爭の結果が全般的調和と全般的繁榮を來すと云ふ、ブルジョア經濟學の僞りが、段々と事實に依つて明白に證明された。總てこれらの事物はもはや無視するわけに行かなくなつた。從つて又それの、甚だ不完全ながらも、學理的表現である所の、フランスおよびイギリスの社會主義も、同じく無視するわけに行かなくなつた。然るにまだ殘存している舊式の唯心史觀は、物質的利害の上に生

じている階級闘爭についても、又一般の物質的利害といふ事についても、何等の知る所がなかつた。その考へ方としては、生產も、一切の經濟關係も、只だ偶然に、『文明史』の附隨的要素として現はれたのであつた。

(1) Chartist movement 政治改革の條項を列記して、それを『平民憲章』(People's charter)として政府に要求した所からチャーチスト(憲章黨)といふ名稱が生じていた。(附錄二、一二一頁以下參照)

然るに右の新事實は、從來の全歷史を新研究に附する事を强制した。その結果、過去一切の歷史は、原始時代を除いて、階級闘爭の歷史である事が[1]分つた。そしてその互ひに闘爭する社會階級が、いつでも生產關係および交換關係——一言にすれば、その時代の經濟關係——の產物である事。從つていつでも、社會の經濟的構造が其の實體上の基礎であつて、我々は只その基礎に依つてのみ、歷史上の各時代に於ける、法律上および政治上の諸制度から、宗教上、哲學上、及びその他の諸思想に至るまでの、上部[2]建築の全部に對する、究極の說明を爲し得る事が分つて來[3]た。ヘーゲルは歷史觀から形而上學を取除いて、それを辯證法的にしたけれども、彼の歷史觀はまだ根本に於いて唯心的であつた。然るに今や唯心論はその最後の隱れ家なる歷史觀から追はれて、新たに唯物的歷史觀[4](唯物史觀)が生れ、從來の如く、人の意識に依つて人の存在を說明す

るのでなく、人の存在に供つて人の意識を說明する方法が發見された。

（1）『過去一切の歷史は……階級鬪爭の歷史である』は、『共產黨宣言』の言葉。

（2）原語は Uberbau (superstructure) で、地下の基礎的構造に對する、地上の建築を意味している。

（3）こゝは、マルクス著『經濟學批判』の序文中の數節、—唯物史觀の要約的叙述として有名な、よくあちこちに引用されて居る部分—を參照すれば、意味が一層明らかになる。即ち左の如し。少し長いけれども重要な文書だから全文を掲載しておく。

『人間は、その生活の爲に社會的生產を行ふ時、一定の、必然的な、自分の意志から獨立した關係、即ち其の社會に於ける物質的生產力の、一定の發達階段に相應する所の、生產關係を結ぶ。この生產關係の總和が社會の經濟的構造を組成するもので、それが實體の基礎となつて、その上に法律的および政治的の上部構造が建設され、又その基礎に相應した一定の社會的意識形態が生ずる。この物質生活に於ける生產方法が、社會的、政治的、及び精神的の、一般生活過程を條件づける。人の意識が人の存在（生活）を決定するのでなく、却つて其の反對に、人の存在が人の意識を決定するのである。

『然るに社會の物質的生產力は、その發達の或る階段に於いて、自分が今までその內部で働いて來た所の、その現存の生產關係—或はそれを法律的に表示したに過ぎない所の所有關係（財產關係）—と矛盾する事になる。即ちその關係が生產力の發達形式たる事から一變して、その制御物となる。ここに於いて社會

革命の時代が始まる。經濟的基礎が變化すると共に、その巨大な上部構造の全部も亦、徐々にか急激にか變革される。

『これらの變革を考慮するについて、經濟的生產條件の上に起る所の、自然科學に確證する事の出來る物質的の變革と、人がこの矛盾撞着を意識して、その擊破に努める所から生ずる、法律的、政治的、宗教的、藝術的、哲學的、之を一言にすれば、思想的の諸形體とを、常に善く區別する事が必要である。我々が或る個人を批判する時、滅多に、その人の自分で考へている所に依らないのと同じ樣に、右の如き變革時代を批判する時、滅多にその時代の意識に依る事は出來ない。我々は寧ろその意識を、物質生活の矛盾の中から、即ち社會的生產力と生產關係（生產方法）との間に現存する撞着の中から說明せねばならぬ。

『一の社會形體は、その內部に餘地を與へられて居る所の、總ての生產力が發展した後でなければ、決して滅亡するものでなく、又新しい一層高級の生產關係は、それに對する物質的生存條件が、舊社會その者の胎內に孕まれた後でなければ、決して發現するものではない。故に人間は常に解決し得べき問題のみを提起するものである。なぜと云ふに、少し精密に觀察すれば、凡そ問題なるものは、その解決の爲の物質的條件が、既に存在しているか、或は少なくとも、成長の過程にある場合にのみ、發生するものだといふ事が、直ぐわかるのである。

『我々は極く大づかみに、アジヤ諸國、古代諸國、封建時代、及び近世ブルジョア時代の生產方法を以て

經濟的社會形體の進行的階段と目する事が出來る。このブルジョア的生產關係は、社會的生產過程に於ける最後の軋轢形式であつて、その軋轢は個人的軋轢の意味でなく、個人の社會的生活條件から發生する軋轢である。然るにこのブルジョア社會の胎內に發達する生產力が、同時に、又この軋轢を解決すべき物質的條件を作りだす。故に、この社會形體と共に、人間社會の歷史前記が終りを告げる。

（3） エンゲルスは又、マルクスの死んだ時、その吊辭の中に、唯物史觀について、次の如く云つている。「ダアヰンが有機的自然の發展法則を發見したのと同じく、マルクスは、人間歷史の發展法則を發見した。即ち從來、理想論（唯心論）の蔽扈の爲に隱されていた單純な事實、――人間は政治、科學、宗教等の事を行ひ得る以前、何よりも先づ、食ひ、飲み、家に住み、衣服を着なければならないといふ事。故に直接の物質的生活資料の生產が、從つて一民族又は一時代の、それぞれの經濟的發展段階が、土臺となつて、その土臺からして、それ〴〵の人間の政治組織、法律觀念、藝術、及び宗教思想までもが發展して來た事。從つて又、それらの事が、―從來全くアベコベであつたのとは違ひ、―矢張り右の土臺に依つて說明されねばならぬといふ事。（それをマルクスが發見した。）

（4） Die materialistische Geschichtsauffassung; Der historischen Materialismus. (The materialistic conception of history; historical materialism.)

五 剩餘價値說

この時から以後、社會主義はもはや某々の天才的頭腦の中から偶然に發見されたものでなく、歷史的に發生した二階級、プロレタリアートとブルジョアジーの鬪爭の必然的結果と認められた。故に社會主義の任務は、もはや出來るだけ完全な社會組織を拵へあげる事でなく、その二階級と、その對立とを必然的に發生させた所の、その歷史的經濟的の經過を研究して、そこに現出している經濟狀態の間にその矛盾を解決する手段を發見する事である。然るに從來の社會主義は此の唯物觀と相容れなかつた。それは丁度、フランス唯物論の自然觀が辯證法および近世自然科學と相容れなかつたのと同じである。從來の社會主義も、現存の資本家的生產方法と其の結果とを批難したには相違ないが、それを說明する事が出來なかつたので、從つてそれを片づけてしまふ事が出來なかつた。彼等は單にそれを惡い者として批難するだけであつた。故に彼等は、資本制度と不可分なる、勞働階級の搾取に對して、猛烈に憤怒するほど、その搾取が何から成り立ち、どうして發生したかを明瞭に說明する事が出來ないのであつた。所が、それを說明するには一面には資本家的生產方法の歷史的關係を示し、即ち一定の歷史的時期に於けるそれの必

然、從つて又、それの滅亡の必然を示し、そして一面には、まだ隱蔽されて居た所の、それの內的特質をあばく事が必要であつた。そしてそれを成し遂げたのが即ち『剩餘價値』の發見であつた。剩餘價値說の證明する所に依れば、不拂勞働の領有が資本的生產方法、及びその下に行はれる所の勞働者搾取の根本形態である。又資本家は、勞働者の勞働力を商品として、それが市場で有する全價値を以て買取るのだけれども、彼は猶ほ其の仕拂つたより以上の價値を勞働者から搾取するのである。そして結局、この剩餘價値が、有產階級の手の中に不斷增加する大資本を積みあげる所の、その價値總額の出處である。資本家的生產の、及び資本の生產の道行は、共にこれで說明された。(1)

(1) 原語 Mehrwert (surplus value)。

(2) マルクス著『價値と、價格と、利潤』の中から、こゝに相當する部分を少しばかり抄錄する。

『紡績工が每日六時間の勞働で三シリングの價値（即ち自分の賃金に相當する價値）を棉花に附加するとすれば、十二時間の勞働では六シリングの價値を附加し、從つてそれだけ剩餘の綿糸を產出する。然るに彼は自分の勞働力を資本家に賣つて居るのだから、彼が作りだした全價値（若しくは全產物）は資本家の手に屬する。だから資本家は三シリングを前拂しては六シリングの價値を得るのである。そして其の半分

は更に賃金として拂ひだされるが、殘る半分は全くの「剩餘價値」となる。』

『商品の價値は、それに含まれた勞働の總量に依つて決定される。けれども、その勞働の總量の一部分は、賃金の形で代償を支拂つた價値の中に實現され、他の一部分は何等の代償をも支拂はない價値の中に實現される。故に商品に含まれた勞働の一部分は支拂勞働であり、他の一部分は不拂勞働である。そこで商品を、それに費された勞働總量の結晶物として價値どほりに賣れば、資本家は必然的に利潤を得る事になる。彼は代償を支拂つた物を賣るばかりでなく、少しも元の掛らない物をも賣るのである。』

『勞働者の一日の勞働の一部分だけが報酬を支拂はれ、他の部分は支拂はれて居ないのに、そして又その不拂勞働、若しくは剩餘勞働が、即ち資本家の取る剩餘價値（即ち利潤）の源であるのに、全體の勞働が支拂勞働であるかの樣に見える。この虛僞の外觀が、賃金勞働を他の勞働形態（奴隷や農奴）から區別する。賃金制度の基礎の上に於ては、不拂勞働も支拂勞働の樣に見える。然るに奴隷制に在つては、その勞働の支拂はれた部分すら不拂である樣に見える。次に農奴が、例へば三日間、自分の農地で働き、次の三日間、領主の土地で無代勞働をやるとせよ。その場合、勞働の支拂はれる部分と支拂はれない部分とが、目に立つて區別される。然し實際から見て、人が一週間の中で三日間、自分の爲に働き、殘る三日間、領主の爲に只で働くのと、工場又は職場で、每日六時間だけ自分の爲に働き、次の六時間だけ雇主の爲に働くのと、同じ事ではないか。只だ後の場合には、支拂勞働と不拂勞働とが不可分に交りあつて居り、取引

の性質が全く蔽ひ隱されて居るだけの事である。』

右の二大發見、即ち唯物史觀と、剩餘價値に依る資本家的生産の祕密の暴露とは、實に我々がマルクスに負ふ所である。社會主義は之に依つて一個の科學となつた。あとは只主として、その細目と諸關係とを完成するだけの事であつた。

第三章　科學的社會主義

一　唯物史觀の前提

唯物史觀は次の命題から出發する。即ち、生産、及びそれに次いでは其の生産物の交換が、一切の社會制度の基礎である事。歴史上に現はれた所の各社會に於ける、生産物の分配、及びそれと共に、階級もしくば身分の社會的編成は、何が如何に生産され、そして如何にその生産物が交換されるかに依つて定まる事。この故に、あらゆる社會的變化および政治的革命の究竟原因は、人間の頭腦の中に求むべきでなく、即ち永劫の眞理および正義に對する人間の智見の增進に求むべきでなく、實に生産方法および交換方法の變化に求むべきである。即ち之をその當時の哲學に求むべきでなく、實に經濟に求むべきである。現存の社會制度が漸く不合理に見え、不正と見え、道理が不道理となり、善が惡となつたといふ考への起るのは、實に、只、生産方法および交換形體が暗默の間に變化を遂げた爲、以前の經濟條件に適合しなくなつた證據なのである。同時に又、この發見された弊害を除去する手段方法が、矢張り其の變化した新らしい生産關係その者

の中に、必ず多少とも發達して存在せねばならぬ筈である。そしてその手段は、決して頭の中から發明さるべきものではなく、只だ頭に依つて、生産といふ現存の物質的事實の中に發見さるべきである。[1]

(1) マルクス著「經濟學批判」の(前記の)序文中の他の一節を、左に再錄する。「一の社會形態は、その內部に餘地を與へられて居る所の、總ての生産力が發展した後でなければ、決して滅亡するものでなく、又新らしい一層高級の生産關係は、それに對する物質的生存條件が、舊社會その者の胎內に孕まれた後でなければ、決して發現するものではない。故に人間は常に解決し得べき問題のみを提供するものである。なぜと云ふに、少し精密に觀察すれば、凡そ問題なる者は、それの解決の爲の物質的條件が、既に存して居るか、或は少なくとも成長の過程にある場合にのみ、發生するものだといふ事が、直ぐわかるのである。」

然らば近世社會主義は之と如何なる關係を持つか。

二　近世社會主義

現存の社會制度は、近來やゝ一般に認められている通り、今日の支配階級たるブルジョアジーに依つて作られたものである。ブルジョアジーに特有なる、—マルクス以後、資本家的生産方法と呼ばれている所の—生産方法は、封建制度の地方的および身分的の特權と適合せず、又その個人相互間の束縛とも適合しなかつた。[1] そこでブルジョアジーは封建制度を叩きこわして、その壞れ跡の上に、ブルジョア的の社會制度、—即ち自由競爭、自由移轉、商品所有者の權利平等、その他あらゆるブルジョア的光榮の王國—を建設した。それから以後、資本家的生産方法は自由に發展する事が出來た。ブルジョアジーの指導の下に作り出だされた生産關係は、蒸汽と新機械とが舊式の手工的製造業を大工業に變化させてから以後、前代未聞の速度と程度とを以て發達した。然るに其の以前、手工的製造業[2]と、それの影響の下に大いに發達した(純粹の)手工業[2]とが、同業組合[3]の封建的束縛と矛盾するに至つたと同じ樣に、今や大工業がほゞ充分な發育を遂げるに及んで、資本家的生産方法が押しこめられて居る所の、その範圍と衝突する事になつた。新らしい生産力は既に、その利用法のブルジョア的形態を越えて成長したのである。そして此の生産力と生産方法との矛盾は、例へばかの、人間の原罪と神の正義との矛盾のように、人間の頭の中に發生するものではなく、全く客觀的の、我々の外にある、それを作りだした人々の意志行動からさへも獨立した、事實の中に存するものである。近世社會主義はこの事實的矛盾の思想的反映に

外ならぬものであり、而も先づ、直接にその矛盾の下に苦しむ所の階級—勞働階級—の頭の中に生じた所の、精神的反映である。

（1）イギリス譯に依つた私の前譯では、こゝが次の如くなつている。「資本家的生産法は封建制度と適合せず、封建制度が個人に與へた特權と適合せず、又その全社會の階級別および地方團結と適合せず、更に又その社會組織の骨格を爲している所の世襲的主從關係と適合せぬ事になつた。」これに依ると、原文の意味が一層明瞭になる。

（2）手工的製造業は、前にも註した通り、マヌファクツールであり、工場的手工業である。只の手工業はそれよりもつと舊式の、小仕掛のハンドウエルクである。故にその意味を明かにする爲、「純粹の」といふ言葉を括弧内に添えておいた。

（3）同業組合はドイツ語のツンフト、イギリス語のギルド。第六二頁末行と、その註とを見よ。

然らば此の矛盾は何から成立つているか。

三　社會的生産と資本家的領有

資本家的生産以前、即ち中世に於いては、勞働者の生産機關[1]私有を基礎とする所の小規模經營

が一般に行はれていた。即ち地方に於いては小農（自由民、或は農奴）の農業、都會に於いては手工業。勞働要具[2]—土地、農具、職場、工具—は總て個々人の勞働要具であつて、只一人の使用に適するものであるから、必然的に短小狹隘であつた。然し短小狹隘であるが爲に、それは普通生産者自身に屬していた。この散在した、狹小な生産機關を集中し擴大して、それを今日の强大な生産のテコに變ぜしめる事こそ、即ち實に資本家的生産方法と、その支持者たるブルジョアジーの、歷史的任務であつた。十五世紀以後、單純な協力作業、手工的製造業、大工業の三段階を以て、如何にこの役割が歷史的に遂行されたかは、マルクスが資本論の第四章に詳說している。然るにブルジョアジーは（同じく資本論に說いてある通り）この狹小な生産機關を强大な生産力に變ずる爲には、是非とも個人的の生産機關を、多人數の全體に依つてのみ使用される所の、社會的の生産機關に變ずる必要があつた。そこで糸挽車、手織機（バタ）、金槌などの代りに、紡績機械、機械機（バタ）、蒸汽槌が現はれ、個人的の職場の代りに、數百人、數千人の協力を要する大工場が現はれた。そして生産機關と共に、生産その者が矢張り個人的作業の一列から社會的行爲の一列に變じ、生産物も亦た個人的生産物から社會的生産物に變じた。綿糸、綿布、金屬品など、今ま工場から作りだされる物は、皆な多數の勞働者の共同生産物であつて、それが出來上るまでには、順

々に皆の手を經て來なければならなかつたのである。從つて如何なる個人も、『これは俺が作つた』『これは俺の生産物だ』と云ふ事は出來なくなつた。

（1）こゝの「生産機關」の「機關」と、「勞働要具」の「要具」とは、共に原語 Mittel (means) の譯語である。これを「手段」「資料」などと譯する場合もある。「手段」といふ譯語には、方法手段などといふ抽象的な言葉の感じがあつて、充分適切でないが、既に可なり廣く行はれても居るし、他に充分適切な言葉も見つからないので、後の方にはそれを使つた個所もある。同一の原語に對して、常に同一の譯語を使用するわけに行かない場合が、しば〳〵ある。

然るに、社會の內部に於ける、自然生の（自然發生的の）、無計畫の、漸次に發生した分業が、生産の根本形態である處に於いては、その生産物が商品の形を取り、それの相互の交換、即ち賣買が、個々の生産者にそれぞれ種々の慾求を充足させる事になる。中世の有樣は即ちそれであつた。例へば、農夫はその農産物を職人に賣り、その代りに職人からその手工品を買つた。この個人的生産者、商品生産者の社會に、今は、新らしい生産方法がはいりこんで來た。自然生的の、無計畫の分業が全社會に行はれている所に、計畫的の分業が個々の工場內を組織だてた。個人的生産と相並んで社會的生産が現はれた。兩方の生産物が同一の市場に賣りだされた。從つて其の

價格は少なくとも殆んど同一であつた。然るに計畫的の組織は自然生的の分業より有力であつた。社會的に勞働する工場は個別的の小生産者よりも、ヨリ安價にその商品を産出した。個人的生産は一部門から一部門へ續々として衰滅し、社會的生産が總ての舊生産方法を革命した。然し社會的生産の革命的特質は幾許も認識されないで、只だ却つてそれが商品生産を奬勵し促進する手段として採用された。元來社會的生産は、當時すでに出來あがつていた所の、商品生産および商品交換の特殊の仕掛、即ち商業資本、手工業、賃金勞働と、密接の聯絡を持つて發生したのである。斯くて社會的生産は、自ら商品生産の一新形式として出現すると同時に、當然、商品生産の領有形式をも充分に保有していた。

中世紀に行はれたような商品生産に於いては、勞働の産物が誰の所有に屬すべきかについて、何らの疑問も起り得なかつた。即ち當時は通例、個々の生産者が、自分の所有する、多くは自分の作つた原料を用い、自分の勞働用具を以て、自分の手の、或は自分の家族の手の勞働で、商品を産出したのである。彼はその商品を改めて領有する必要がない。それは當然、初から全く彼に屬していた。生産物に對する所有權は、斯くて自己の勞働を基礎としていた。よし又、他の助力を借る場合があつても、それは通例、大した事でなく、大抵賃金以外、何かで埋合せをするので

あつた。同業組合の徒弟や下職人も、食費や賃金の爲に働くのでなく、一人前の職人としての自分の教育の爲に働くのであつた。

そこに大工場、大製造所に於ける、生産機關の集中、從つて實際上、社會的生産機關への變形が起つて來た。然るに、その社會的生産機關と生産物は、矢張り以前の通り、個人の生産機關および生産物として取扱はれた。從來、勞働要具の持主は、その生産物が通例、自分の生産した物であつて、他人の助力を借るのは例外であつたから、それでその生産物を領有したのである。然るに今は、勞働要具の持主が、その産物がもはや自分の生産した物でなく、全く他人の勞働の産物であるのに、矢張り依然としてそれを領有する。そこで、今ではもう社會的に作りだされている所の生産物が、實際に生産機關を動かし、そして實際にその生産物を作りだした所の人々の手に領有されないで、資本家に領有される事になつた。生産機關および生産は、既に本質上、社會的になつている。然るにそれが、個人の私的生産を前提とする所の、從つて個人が銘々の生産物を所有して市場に運びだすといふ、その領有形式の下に置かれている。生産方法はこの領有形式の前提を廢絶したけれども、猶その形式の下に置かれているのである。[1] この矛盾が即ち新生産方法に資本的性質を附與するものであるが、現今に於ける有らゆる反目衝突の萠芽は、既に其中に

含まれている。そしてこの新生産方法が、總ての重要なる生産部門に對し、又總ての經濟的に重要なる諸國に於いて、益々多く支配權を持ち、それと共に個人生産が驅逐されて、微力な殘存物となるに連れ、社會的生産と資本家的領有との不調和が、いよ〳〵明瞭に現はれざるを得なくなつた。

（1）態と云ふまでもない事だが、この場合、領有の形式は元のまゝでも、領有の性質は、前記の諸變化に依つて、生産と同じ樣に革命されている。自分の生産物を領有するのと、他人の生産物を領有するのとは、固より大いに相違した二種の領有法である。ついでに、資本家的生産方法の全部を既に萠芽として特つて居る所の賃金勞働は、甚だ古いものである。それは偶發的、散在的の形に於いて、奴隷勞働と相並んで、數百年の間存在していた。けれども、その萠芽は、必要なる歷史的豫備條件が備つた時、初めて資本家的生産方法に發達する事が出來たのである。——（原註）

四　プロレタリアートとブルジョアジー

最初の資本家は、前記の通り、賃金勞働の形式が既に存在して居るのを發見した。然しそれは例外として、副業として、補助として、一時的のものとしての賃金勞働であつた。農村の勞働者

が折々日傭稼をする事はあつても、彼等は自分の土地を幾モルゲンか持つていて、兎にかくそれでカツ〳〵の生活だけは出來るのであつた。又同業組合の制度としては、今日の下職人は明日の本職人になり得べき仕組であつた。然るに生産機關が社會化されて、資本家の手に集中されるや否や、右の事情が一變した。個人的小生産者の生産機關および生産物は、次第々々に無價値となつた。彼等は資本家の下に賃金勞働者となるより外はなかつた。昔は例外であり補充であつた賃金勞働が、今は全生産界の通例となり基本形態となつた。昔は副業であつたものが、今は勞働者の專一の活動となつた。一時的の賃金勞働者が終身の賃金勞働者になつた。又この終身賃金勞働者の數が、右と同時に起つた封建制度の崩壞、諸侯伯の家來の解體、農民をその耕地から追出す事等に依つて、更に恐ろしく增加した。そこで一方には資本家の手に集中された生産機關、一方には自分の勞働力の外、一物をも所有せざる生産者、その二つの間が全く分離してしまつた。社會的生産と資本家的領有との矛盾が、プロレタリアートとブルジョアジーの對立として現出した。

五　生産界の無政府狀態

前記の通り、資本家生産方法は、商品生産者、個人的生産者の社會にはいりこんで來た。そし

て其の社會では、生産物の交換が即ち社會的結合の媒介になつて居るのである。然るに商品生産を基礎とする總ての社會には、生産者がその社會内に於いて自分の社會的諸關係を支配する力を失つているといふ、一つの特徴がある。即ち各人はその偶然所有する生産機關を以て、それ〴〵特殊の交換的慾望を充すべく、銘々に生産を行ふが、何人も、自分の製造する品種が何ほど市場に現はれるか、又それが一般に何ほど需要されているかを知らない。又何人も、その個々の生産物が實際の要求に應じて居るか否か、その生産費を償ふに足るか否か、兎にかく少しでも賣れるか否かをさへ知らない。社會化された生産界に無政府狀態が漲つているのである。然し商品生産には、他のあらゆる生産形態の場合と同じく、それと離るべからざる、一種特別の、固有的法則がある。そしてその法則が、その無政府狀態にも係はらず、却つてそれの中に、それに依つて、行はれている。即ちこの法則は、社會結合の唯一の永續形式である所の、商品交換の間に發現され、そして個々の生産者に對し、强制的の競爭法則として、その力を振ふのである。生産者は初めこの法則を知らないで居るが、永い經驗の後、漸々にそれを發見する。故にこの法則は、生産者から獨立して、そして生産者と對立して、盲目的に作用する生産形態の自然法則として、實現するのである。即ち生産物が生産者を支配するのである。

中世紀の社會、殊にその初期の年代に在つては、生産はその本質上、自家用を目的としていた。即ち主として生産者および其の家族の要求のみを充すのであつた。個人的從屬關係の存在する農村の如きに在つては、それは又、領主の要求充足に貢献した。故にこの場合には、交換といふものが全く無く、從つて生産物は商品の性質を帶びなかつた。農家の人々は、自分達の要する殆んど總ての物、即ち食料品から家具衣服までを生産した。只だ自分達の要求以上、及び領主に差出す年貢以上の餘分を生産する事になつた時、初めて彼等は商品をも生産した。この餘分が社會的交換に附せられ、賣品として提供された時、それが即ち商品となつた。尤も、都市の手工業者は最初から交換の爲に生産せねばならなかつた。然しそれにしても、彼等は自分の要求の大部分を自分の手で充たしていた。彼等は菜園を持ち、又少しの耕地を持つていた。彼等は都市の共有林に自分の家畜を放つていた。彼等は又その共有林から材木と薪炭をも得た。婦人達は麻を紡ぎ、毛糸をよりなどした、交換を目的とする生産、即ち商品生産は、まだほんの初まりであつた。故に交換は小規模で、市場は狹小で、生産方法は變化なしで、そして外部には地方的の封鎖があり、内部には地方的の團結、即ち農村にはマルク(1)、都市にはツンフト(1)があつた。

(1) マルクはドイツその他に於ける土地共有村（或は村落共産體）の後身で、耕地は次第に個人の私

有となつても、山林原野は猶ほ共有として存し、一個の自治的團結を成していたもの。本譯書附錄（二）の『マルク』（第一三七頁）は即ちそれに關するエンゲルスの研究論文である。ツンフトは同業組合。第一章第二節の註(2)を見よ。

然るに商品生産の擴大、殊に、資本家的生産方法の出現と共に、從來潛伏していた商品生産の法則が、ヨリ公然と、ヨリ有力に、作用しだした。諸種の舊束縛は緩み、封鎖的の舊制限は破れ、生産者は皆な段々に、個々獨立の商品生産者に變じた。社會的生産の無政府狀態は明瞭となり、而もそれが段々激烈になつて來た。然るに資本家的生産方法がこの社會的生産の無政府狀態を增大した所の、その主なる手段は、却つて無政府狀態の正反對であつた。即ちそれは、各生産場に於いて、益々多くの生産を社會的に組織化する事であつた。舊事物の平和な安定狀態は、之が爲に全く其の終りを告げた。何處ででも、或種の産業部門に此の生産方法が輸入される以上、同産業は決して其の傍らに許容されない。何處ででも、それが手工業を奪へば、必ずその舊手工業を亡ぼしてしまふ。勞働界は全く戰場と化した。地理的の大發見、及びそれに伴ふ植民事業は、更に商品の販路を數倍して、手工業の製造業化(1)を促進した。この戰爭は個々の地方的生産者の間に起つたばかりでなく、地方的戰爭が更に國家的戰爭に成長した。十七八世紀の商業戰爭は

即ちそれ。

(3)「手工業の製造業化」は、「純粋手工業の、手工的製造業への變化」を意味する。

最後に、大工業と世界市場の開拓とが、この戰爭を世界的と爲し、それと同時に、前代未聞の猛烈さをそれに附與した。個々の資本家の間にせよ、産業と産業の間、國家と國家の間にせよ、自然的もしくは人工的生産條件の便宜が、それぞれの存在を決定する事になつた。一たび仆れる者は、用捨なく排斥される。それが即ちダアヰン式の個體的生存競爭を、自然界から人間社會に移して、更にそれを激甚化したものである。動物の自然狀態が、人間發達の絕頂の如く見える。社會的生産と資本家的領有との矛盾が、今や個々の工場に於ける生産組織と、全社會に於ける生産の無政府狀態との對立として、現はれて來たのである。

六　産業豫備軍

資本家的生産方法は、その起原の時から內在している矛盾對立の、右二つの現象形態に於いて運動している。從つてそれは、フーリエが既に發見していた所の、かの『惡循環』から脫出する事が出來ない。但しフーリエがその當時に於いてまだ認め得なかつたのは、その循環の環が次第

に縮小しつゝある事であつた。即ち彼は、その運動がむしろ螺旋狀を爲し、遊星の運動の樣に、遂にその中心と衝突して終滅に歸すべき事を認め得なかつたのである。所が、この社會的の生産無政府狀態の有する强壓力が、即ち人間の大多數を驅つて段々にプロレタリアに變ぜしめるものであり、そしてそのプロレタリア大衆が、結局の所、又その無政府的生産を終結させるものである。又この社會的無政府生産の有する强壓力が、大工業に於ける諸機械の無限の完成を各工業資本家に對して强制命令と爲すものであり、そして各工業資本家は、その命令に從つて、自己の滅亡を免れるべく、段々にその機械を完成する事になるのである。

然るに機械の完成は即ち人間の勞働を過剩にする。そも〳〵機械の出現と增加が、少數の機械勞働者に依つて幾百萬の手工勞働者を驅逐する事を意味するのであるならば、機械の改良進步は即ち更に、段々多くの機械勞働者自身をも驅逐する事を意味する。そしてそれが結局、資本の雇入要求の平均數に超過する所の、待命賃金勞働者の大群、即ち完全なる産業豫備軍を作りだすのである。この産業豫備軍(Reservearmee)といふ言葉は、私が既に一八四五年に命名(1)して置いたのであるが、それは産業界の好景氣の時に徵發され、次いで必然的に生ずる恐慌の際には、忽ち街頭に投げだされるものである。即ちそれは、勞働階級が資本と對抗する生存競爭に於いて、常に

其の身に負はされている所の重荷であり、又勞働者の賃金を、資本の要求に適合する低水準に引きさげる爲の調節機である。かくて機械が、マルクスの云つた通り、勞働階級を壓伏する爲の、資本制度の最も有力な武器となり、勞働要具が絶えず勞働者の手から其の衣食を奪ひ、勞働者自身の生産物が勞働者を屈服させる道具になる。かくて又、勞働要具の經濟的使用が、初から當然に、亂暴極まる勞力の浪費となり、勞働機能の當然な必要條件に對する掠奪となる。かくて又、勞働時間短縮の爲に最も有力の手段たる機械が、勞働者と、その家族との有らゆる生活時間を變じて、資本の利殖的運用の爲に、勝手に使用され得る勞働時間と爲す所の、最も確實の手段となる。かくて又、或者の勞働過度が他の者の手を遊ばせる豫備條件となり、そして全世界に亙つて新らしい消費者を探し求めている大工業が、國内に於いては民衆の消費を最低の飢餓點にまで限定し、それが爲め自分の内國市場を破壞している。『最後に、この相對的過剩人口、即ち産業豫備軍を、常に資本蓄積の程度と力度とに平均させる所の法則は、(鍛冶の神)ヘフエストスが(天火の盜人)プロメテウスを岩の上にクサビどめにしたよりも、一層堅く勞働者を資本に縛りつけている、この法則は、資本の蓄積に相應する、貧困の蓄積を作るものである。だから一極に於ける富の蓄積は、同時に又、その對極に於ける、即ち自分の生産物を(他人の)資本として産出する階

級の側に於ける、貧困、苦惱、屈從、無智、兇暴、墮落の蓄積である。[2] かくて、この資本家的生産法の中から、生産物の他の分配方法を期待する事は、恰かも電池内の電極が、電池と連結している時、その水を分解させず、その陽極が酸素を遊離させず、その陰極が水素を遊離させぬ樣に期待するのと同じである。

(1) エンゲルス著『英國勞働者階級の狀態』一〇九頁を見よ。

(2) マルクス資本論第一卷六七一頁を見よ。(高畠譯八五八頁に當る。)

前述の通り、近代的大機械の最高の進歩性は、社會に於ける生産の無政府狀態の爲に、個々の工業資本家に對し、絶えずその機械を改善させ、絶えずその生産力を增大さすべき强制命令となる。然るに生産の領域を擴大する事の、單なる實際上の可能性が、矢張り資本家に對して同樣の强制命令となる。大工業の膨脹力は驚くべきもので、それに比べると、ガスの膨脹力など全く兒戯に等しいもので、今やそれは實に、あらゆる障礙を一笑に附し去る所の、質的および量的の膨脹慾として、我々の眼前に現はれている。所で、その障礙とは、大工業の生産物に對する消費であり、販路であり、市場であるのだが、然しその市場の擴大性は、外延的にも内包的にも、主として全く別の、遙かに力の弱い法則に依つて支配されている。市場の擴大は生産の擴大と歩調を

共にする事が出來ない。衝突は不可避である。そしてその衝突は、それが遂に資本家的生産方法その者を爆破しない限り、決して眞の解決に達し得ないものであるから、それが必ず週期的となる。資本家的生産法は新たに又一つの『惡循環』を作りだす。

七　恐　慌

實際の所、一八二五年に第一回の一般恐慌が起つてから以來、工業界および商業界の全體、即ち總ての文明諸國、及び多少ともまだ未開の從屬諸國に於ける生産と交換が、約十年に一回、滅茶々々になる。商業は停止し、市場は充溢し、生産物は堆積して全く賣れ行かず、硬貨は潛伏し、信用は消滅し、工場は閉鎖し、勞働大衆は生活資料を餘り多く生産した爲に生活資料を失ひ、破産は破産に次ぎ、競賣は競賣に次ぐ。この不景氣は數年間繼續し、その間に生産力と生産物が大量的に濫費され破壞されて、結局、堆積された商品が大なり小なり、減價してハケロがつき、それで漸く生産と交換が再び動きはじめる。この歩みは漸々に速度を早めて小走りとなり、その産業的小走りが一轉して駈け足となり、その駈け足が更に又手綱なしの盲走りとなつて、工業上、商業上、信用上、及ひ投機上に於ける、完全なる障礙物競爭を現出し、結局、幾回かの冒

險的大飛躍の後、再び元の恐慌の濠に落ちこむ。そして幾度もそれを繰返す。一八二五年以來、我々は既に五回の恐慌を經驗し、現に又（一八七七年）その第六回を經驗しつゝある。この恐慌の性質は誠に明白で、フーリエが初めてそれを、多血症の恐慌—過剩から生じた恐慌—と呼んだ時、それが正に總ての恐慌に適中していた。

この恐慌の中に、かの社會的生産と資本家的領有との矛盾が大爆發となつて現はれる。商品の流通が暫くは全く停止され、流通手段たる貨幣が流通の妨礙となり、商品生産と商品流通との法則が總て顚倒し、經濟的衝突がその頂點に到達する。即ち生産方法が交換方法に對して叛逆するのである。

所でこの、工場内に於ける生産の社會的組織が、—それと並んで、そしてそれの上に成立して居る所の、—一般社會の無政府狀態に對して、もはやどうしても、折合のつかない所まで發展したといふ事實、—その事實が、—右の恐慌の間に於いて、多數の大資本家が仆れ、更に一層多數の小資本家が仆れ、それが爲に生ずる所の、資本の猛烈な集中に依つて、資本家にも善く分つて來た。資本家的生産方法の全機構（全裝置、總カラクリ）が、自分の作りだした生産力の壓力の下にへたばつてしまふ。それは（資本的生産方法は）もはや此の生産機關の大群を悉く資本に化するだ

けの力がない。彼等は（生産機關の大群は）只だ空しく横はつている。そして實に又それが爲に、産業豫備軍も亦た手を空しくして居なければならない。生産機關、生活資料、待命の勞働者、あらゆる生産の要素と、一般財富の要素とが、豐饒過多に存在している。然るに『その豐饒過多が痛苦と缺乏の原因となる（フーリエ）。』何となれば、豐饒過多こそが即ち生産機關と生活資料を資本に化する事を妨げる者なのである。凡そ資本家社會に在つては、生産機關は、先づ資本に—即ち人間の勞働力を搾取する道具に—化せられた後でなくては、決して其の職能を果し得るものでない。この生産機關と生活資料の資本化の必要が、それらの物品と勞働者との間に怪物の如く現出するのである。只この怪物の爲に、生産に對する物的動力と人的動力との結合が妨げられるのである。只これが爲に、生産機關がその識能を果すことが出來ず、勞働者が勞働し生活することが出來ないのである。故にこれは、一方には、資本家的生産方法が、現在より以上に此の生産力を留置して行く能力の無い事を自認して居るのであり、又一方には、この生産力自身が更に其の力を增大しつゝ、矛盾の除去を迫り、自己の資本たる性質から解放を迫り、自己の社會的生産力たる性質の實際的承認を迫つて居るのである。

八　資本の集中、生産力の國有

この猛烈に增大する生産力が、自己の資本性に對して反撥する事、即ち自己の社會的本性の承認をいよ〳〵盛んに要求する事、それが遂に段々と、資本家階級自身をして、—一般資本家制度の下に於いて可能である限り、—是非ともそれを社會的生産力として取扱はせる事になる。そこで、信用の無制限な膨脹を來す所の、産業の好景氣時代にも、又大資本の企業の崩壞から生ずる恐慌その者の場合にも、生産機關の大群が更に社會化の形式を取らせられる事になる。諸種の株式會社が即ちそれである。これら生産交換の諸機關の中には、例へば鐵道の如く、最初から資本家的搾取の他のあらゆる形式を排斥するほど、巨大なものも少なくなかつた。然るに或る發達階段に達すると、この形式も亦た不充分になる。そこで生産統制の目的を以て、一國内に於ける同一産業部門の諸大生産者が、トラストと稱する、生産の統制の目的とする、一團體に結合する事となる。彼等は先づ生産物の總額を定め、それを各自の間に割りつけ、そして豫め確定した賣價でそれを押しつける。但し斯かるトラストは、一朝不景氣の生じた場合、最も分裂しやすいものであるから、その爲に又、一層大なる集中的社會化が促進される。斯くて、遂に一産業の全體が

巨大なる一個の株式會社となり、國内的競爭が變じて、その一會社による、國内的獨占となる。現に一八九〇年、イギリスのアルカリ産業に此の事が起り、四十八個の大工場が合同して一會社となり、六百萬ポンドの大資本を以て、統一的に經營されている。

このトラストに於いて、自由競爭は獨占に變じ、資本家社會の無計畫生産は、來るべき社會主義社會の計畫的生産に降伏したのである。但しそれはまだ主として、資本家の利益の爲、便宜の爲であつた。然るに、こゝまで來ると、搾取の跡があまりに露骨で、もうどうしても破裂しなければならない。如何なる國民と雖も、このトラストに指導される生産、即ち僅かの一小群の利潤配當者の、社會全體に對するそれほど露骨な搾取を、我慢しては居られない筈である。

そこで結局、トラストの在ると否とに係はらず、資本社會の正式の代表たる國家が、生産の指導に當らないでは居られない事になる。(1) そして此の國有化の必要が、先づ郵便、電信、鐵道などの大交通機關の上に現はれる。

(1) こゝに「當らないでは居られない」と云ふ理由はこうである。生産機關、或は交通機關が、實際、もはや株式會社の經營に適しないほど成長した時、從つて又、それの國有化が經濟的に不可避となつた時、只その時にのみ、この國有化が、よしそれを實行する者が今日の國家であらうとも、經濟上の一進歩

を意味し、一切の生産力を社會自身の手に握る爲の、新らしい第一歩の獲得を意味するのである。然るに近來、ビスマルクが國營事業に熱中しだしてから以後、一種の似せ社會主義が起つて、屢々阿諛追從の醜態に墮落しながら、無雜作に、如何なる國營事業も、ビスマルク流の者ですらも、社會主義的だと稱している。所が、若し煙草の國營が社會主義的あるならば、ナポレオンもメテルニヒも、社會主義建設者の中に數へればならぬ事になるではないか。又ベルギー國が日常平凡の、政治的および財政的の理由からして、主要の鐵道線路を自分で建設したとて、或は又ビスマークが、何ら經濟的の必要もないのに、只だ戰爭の場合、便宜にそれを利用し得んが爲に、また鐵道從業員を政府の投票家畜として教育せんが爲に、別して又、議會の協贊を要しない新財源を作らんが爲に、プロシヤの主要鐵道線路を國有にしたとて、それは決して、直接にも間接にも、意識的にも無意識的にも、社會主義的政策ではない。若しそれが違ふと云ふなら、王室海事協會も王室陶器製造所も、陸軍裁縫隊すらも、皆な社會主義的制度だといふ事になる。更に甚だしきは、一九三〇年代、フリードリヒ・キルヘルム三世の下に於いて、或る狡猾者が大まじめで提案した、あの遊廓の國有すらも、亦然りである。——(原註)

若し、恐慌なる者が近代生産力のこれ以上の處理に對するブルジョアジーの無能を暴露するものであるならば、生産交通の大企業が株式會社となり、トラストとなり、國有となる事は、即ち

それらの目的に對するブルジョアジーの無用を證明するものである。資本家の社會的職能は、今や悉く給料取の使用人に依つて果されている。資本家は只だ配當を取り込む事と、利札を切り取る事と、株式相場を試みて相互の間に資本を奪ひ合ふ事との外、もはや何らの社會的活動を爲して居ない。資本家的生産方法は、初め勞働者を驅逐したが、今は資本家を驅逐して、丸で勞働者と同じように、過剰人口の列に下した。只だ勞働者の場合と違ひ、まだ産業豫備軍としないだけの事である。

然るに株式會社にせよ、トラストにせよ、國有にせよ、その變化はまだ生産力の資本性を除去して居ない。株式會社とトラストとに於いては、固よりそれが明瞭である。そして近代××は又、ブルジョア社會が、勞働者並びに個々の資本家の侵害に對して、一般資本家的生産法の外的諸條件を維持する爲に設けた所の組織に過ぎない。故に近代××は、その形體の如何に係はらず、本質上、資本家的機械であり、資本家の××であり、理想化された總資本家である。從つてそれが益々多く生産力を握れば握るほど、益々多く眞實の總資本家となり、益々多く人民を搾取する事になる。然るに勞働者はいつまでも賃金勞働者であり、プロレタリヤである。資本關係はそれが爲に除去されず、むしろ却つて其の絶頂に押しやられる。所が、絶頂でそれがヒックリかへる。

生産力の國有は矛盾の解決法ではないが、その解決法のハンドル（持手）、即ちその外形的手段を伏在させている。

九　勞働階級の政權掌握

そこで此の解決法は、近代生産力の社會的本性を實際上に承認する事に在り、從つて、生産、領有、及び交換の方法を、生産機關の社會的特質と合致させる事に在る。そしてそれは、社會が公然直接に、—社會以外の何者の管理にも適合しないほど成長して居る所の、—生産力を所有する事に依つてのみ實現される。そういふ事になれば、生産機關および生産物の社會的特質は、—今でこそそれが生産者自身に食つてかゝり、週期的に生産交換の方法を破壞し、單なる盲目的の自然法として、强制的、破壞的に作用して居るけれども、—それが今度は、充分の意識を以て生産者の手に利用せられ、從來の、混亂や週期的破壞の原因から一變して、生産その者の爲の、最も有力な槓杆（テコ）となる。

大なる社會力は全く自然力の如く作用するものである。我々がそれを認識せず、考慮に入れぬ間は、盲目的、强制的、破壞的であるが、我々が一たびそれを認識し、その作用、その方向、そ

の影響を理解する時には、それを段々と我々の意志に服從させ、それに依つて我々の目的を達する事が容易である。今日の强大なる生産力の如き、最も然りである。然るに我々が頑强に、この生産力の本性と特質を理解することを拒否する間は、—實際、資本家的生産方法とそれの擁護者とは、この理解に反抗して居るのだが、—その間は、此の力が我々の意に反して、我々に逆らつて作用し、その間は、前に詳述した通り、此の力が我々を支配するのである。

然し一たび其の性質が理解された以上、此の力は、協力せる生産者の手の中に於いて、惡魔の大王から從順な奴僕に變じてしまふ。それは即ち雷雨の稻妻に現はれる電氣の破壞力と、電信機のアーク燈に於ける飼ひならしの電氣との差異であり、又火事の火と日用の火との差異である。斯くて、今日の生産力が、遂に漸く認識された所の其の本性に從つて處理される時、初めて生産界の無政府狀態が無くなり、そして社會全體および各個人の慾求に從つて、一定計畫に基づく所の、生産の社會的經營が行はれる。そうすると、資本家的領有方法—即ち生産物が先づ生産者を壓伏し、次いで又領有者をも壓伏する領有方法—がすたれて、近代的生産機關その者の本性に基づく所の、生産物領有法が行はれる。即ち一方には、生産を維持し擴大する手段としての、直接の社會的領有、一方には生活と享樂の手段としての、直接の個人的領有。

資本家的生産方法は、段々に人民の大多數をプロレタリヤに化すると同時に、そこにこの變革を完成する爲、—さもなければ自分が滅亡するので、—是非とも必要とされて居る所の、其の力を作りだしている。それは又段々に、既に社會化された大生産機關を驅つて、國有とすると同時に、そこにそれ自ら此の變革を完成すべき道を指ざし示している。即ち勞働階級が國家權力を掌握して、生産機關を先づ國有財産に移す事となる。

然しながら勞働階級は、それに依つて自らプロレタリヤたる事を止め、又それに依つて一切の階級差別および階級對立を絶滅し、更に國家としての國家をも廢止する。從來の、階級對立に依つて運轉した社會は、國家を必要とした。即ち當時の搾取階級が其の生産の外的條件を維持する爲の組織、從つて又、被搾取階級を、それら現存の生産方法から生ずる所の壓伏條件（即ち奴隷制、農奴制、賃金勞働制）に依つて、强制的に服從せしめる爲の組織を必要とした。この國家は社會全體の公けの代表であり、社會を明白な體制として結成したものであつたが、然しそれは、國家が、當時全社會を代表する所の、その階級の國家であつたといふだけの意味である。即ち古代に於いては奴隷所有者の國家、中世に在つては封建貴族の國家、現代に在つてはブルジョアジーの國家。然るに、その國家が遂に全社會の本當の代表となる時には、それ自ら無用の長物とな

る。既に壓伏すべき社會階級が無くなつた以上、又既に階級支配が無くなり、從來の生産無政府狀態に基づいた個人的の生存競爭が無くなり、それから生ずる衝突も暴行も無くなつた以上、もはや鎭壓されるものが一つも無いのだから、特殊の鎭壓力、即ち國家の必要が無くなる。國家が眞に全社會の代表として出現する、その第一行爲、—即ち社會の名に於いて生産機關を占有する事、—それが同時に、國家としての最後の獨立行爲である。社會の諸關係に對する國家權力の干渉は各方面に對して段々と無用になり、遂におのづから消滅する。人に對する支配が、只だ事物の世話と、生産過程の處理とに變る。國家は『廢止』されるのでなく、死滅するのである。かの『自由國家』といふ言葉の如き、—宣傳的用語として假りにそれの許容される理由についても、或はそれの究極に於ける科學的不充分さについても、—總て右の意味に依つて判斷すべきである。かの謂ゆる無政府主義者の、今明日中に國家を廢止すべしといふ要求も、亦た同樣である。

一切の生産機關を社會の手に占有するといふ事は、資本家的生産法が歷史上に出現してから以後、或る人々に依り、又は或る學派に依り、將來の理想として、多少とも漠然ながら、屢々夢想されたものである。けれども、それの實現の實際的條件が具備した時、初めてそれが可能となり、歷史的必然となり得たのである。そしてそれが實現されるのは、他の總ての社會的進步と同

じく、決して只、階級の存在が正義、平等、その他に反するといふ智見の爲でなく、又その階級を廢止するといふ單なる意志の爲でもなく、實に或る新らしい經濟的條件の爲である。社會が搾取階級と被搾取階級、支配階級と服從階級に別れたのは、前代に於ける生産の貧弱なる發達から生じた必然の結果であつた。社會の總勞働が總人の生活に必須な衣食以外、極僅かの餘剩しか産出しない間は、從つて社會全員の大多數が、終日、若しくば殆んど終日、勞働に從事せねばならぬ間は、その社會は必然的に數階級に區分される。即ち專ら勞役に服する大多數の人民の外、直接の生産勞働から免除されて、社會の共同事務—勞働の指揮、國家の事務、裁判、學問、藝術等—に從事する一階級が生じて來る。故に階級別の根柢を爲すものは即ち分業の法則である。けれども、何もそれが爲に、此の階級別が暴行、盜奪、詐欺、瞞着に依つて行はれて居るのに、妨げはない。又支配階級が一たび鞍の上に乘つた以上、いつでも必ず勞働階級を犧牲にして自己の支配權を强固にし、その社會的指導を民衆搾取の增大に變じて居るのに、妨げはない。

然しながら、階級の區分が斯の如く歷史的に或る理由を持つとしても、それは只だ或る期間內に於いての事であり、或る社會條件の下に於いての事である。それは元來、生産の貧弱に基づいたものである。從つてそれは、近代生産力の充分なる發展と共に一掃されるであらう。そこで實

際上、社會階級の廢止といふ事は、歴史進化の程度が、或る特殊の支配階級の存在（を必要とせぬ）ばかりでなく、何らの支配階級の存在をも必要とせぬ事になり、從つて階級別その者が既に時代錯誤となり、廢物となるに至つた事を前提とするものである。故にそれは又、或る特殊の社會階級が生産機關および生産物を領有し、從つてそれと共に政權を掌握し、文化を獨占し、智識的指導の地位に立つ事が、單に無用であるばかりでなく、經濟的、政治的、及び智識的に、進歩の妨礙であるといふ程度の、生産の發達を前提とするものである。

十　自由の國

斯くの如き時は今正に到來している。ブルジョアジーの政治的および智識的破産は、彼等自身に取つても、もはや殆んど秘密ではない。彼等の經濟的破産（恐慌）は既に十年目毎に規則正しく繰返されている。社會は、その恐慌の來る度毎に、自分で使用する事の出來ない生産力と生産物とに壓せられて窒息し、そして—生産者が消費すべき何物をも持たぬ、それは消費者が無いからだ—といふ、馬鹿げた矛盾に當面して、茫然と自失する。そこで生産機關の膨脹力が資本家的生産方法の束縛の綱を切り棄てる。この束縛から脱する事は、將來に於ける永續的な、不斷に急速

に前進する、生産の發達、從つて又、生産その者の、實際上無制限な增大に對する、唯一の前提條件である。まだそれだけではない。生産機關の社會的領有は、現在行はれている生産上の人爲的制限を除去するばかりでなく、又實に、現在に於いて生産の不可避的隨伴物であり、殊に恐慌の際、その頂點に達する所の、生産力および生産物の、積極的の浪費と破壞を防ぐ事となる。猶又、(1) その場合、今の支配階級および其の政治的代表者等の、馬鹿々々しい奢侈贅澤をやめさせる事に依つて、生産機關および生産物の多量を、社會全體の爲に殘す事になる。此に於いて社會の全員が社會的生産に依つて生活を保證される事の可能性、—而もその生活が、物質的に充分豐富であり、更にその豐富が日々に增大するばかりでなく、猶ほ全員の肉體的および精神的能力に對し、その完全に自由なる發育と活動を保證する事の可能性—が、今や初めて生じている。現にこゝに生じているのである。(2)

（1）マルクスは資本論（第一卷、第二十四章、七）に於いて、次の有名な言葉を以て社會革命の豫想を叙している。「この資本の集中、即ち少數資本家に依る多數資本家の剝奪と相並んで、次の諸事が發達する。勞働行程に於ける、絶えず其の規模を擴大しつゝある所の協業的形式。技術上に於ける科學の意識的應用。組織的なる土地の利用。勞働要具の、共同的にのみ使用さるべき勞働要具への轉形。あらゆる生産

機關を、組合的、社會的勞働の生産機關として使用する事から生ずる節約。あらゆる國民の、世界市場の網の目へのからみつき。及びそれと共に資本制度の國際的性質。斯くてこの轉形行程から生ずる一切の利益を横領し獨占する大資本家の數が絶えず減少すると同時に、窮乏、壓迫、隷屬、墮落、搾取の量が益々增大する。然し同時に又、資本主義生産行程その者のカラクリに依つて訓練され、結合され、組織される所の、そして絶えず膨大しつゝある所の、勞働階級の反抗が生ずる。資本の獨占は、自己と共に、又自己の下に、繁榮した生産方法に對して、束縛となる。生産機關の集中と勞働の社會化とが、遂に其の資本主義的外殼と適合する事の出來ない點に達する。その外殼が破裂する。資本主義的私有財産の寂滅の鐘が鳴る。剝奪者が剝奪される。』（高畠譯、一〇二四ページに當る。）

（2）近代の生産機關が、資本家的壓迫の下に於いてすら、驚くべき膨脹力を持つて居る事の、大よその概念を與へる爲に、こゝに少しばかりの數字を示す。ギツフエン氏の計算に依れば、イギリス（大ブリテン及びアイルランド）の富の總額は、大づかみにして左の如くである。

一八一四年……二、二〇〇、〇〇〇、〇〇〇ポンド——（約二百二十億圓）
一八六五年……六、一〇〇、〇〇〇、〇〇〇ポンド——（約六百六十億圓）
一八七五年……八、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇ポンド——（約八百五十億圓）

次に恐慌中に於ける、生産機關と生産物破壞の一例を擧げる。最近の恐慌（一八七三—七八年）の時、ド

イツの鐵工業だけの損失總額が、第二回ドイツ工業者大會（ベルリン一八七八年二月廿一日）に報告された所に依れば、實に四五五、〇〇〇、〇〇〇マルク（約二億二千萬圓）ある。——（原註）

生産機關が社會の手に所有されれば、それと共に商品の生産が無くなり、從つて生産物が生産者を支配する事も無くなる。社會的生産の內部に於ける無政府狀態が變じて、計畫的意識的の組織となる。個人的の生存競爭が消滅する。此に於いて人間が、或る意味に於いて、初めて遂に他の動物界から區別され、動物的の生存條件から脫出して、初めて眞の人間的生活に入る。今日まで人間を支配した所の、人間生活條件の外圍（自然界と人間自身の社會）が、今や人間の支配と統制の下に來り、人間は初めてこゝに、眞の、意識的の、自然界の主人となり、同時に又、自己の社會組織の主人となる。從來、人間を支配する、外來の自然法として、人間と對立した所の、人間自身の社會的行爲の法則が、今や充分の實際的理解を以て人間に使役され、從つて人間に支配される。從來、自然と歷史に强制されて、人間と對立した所の、人間自身の社會的結成（社會組織）が、今や人間の自由行爲となる。從來、歷史を支配した所の、客觀的の、外界の諸力が、今や人間自身の統制の下に來る。只その時から以後、人間が初めて充分意識的に自己の歷史を作るであらう。只その時から以後、人間に依つて發動させられた所の、（人間が仕掛をした所の）社會的の諸

原因が主力となつて、そしてそれが絶えず增大する程度に於いて、人間の豫期した結果をもたらす事になるであらう。それが即ち必然の國[1]から自由の國[1]への、人間の飛躍である。

（1）こゝの「國」の原語はライヒ Reich であり、英語にすればキングドム kingdom である。本書第六頁の註（2）を參照せよ。

十一　歷史的進化の概括

以下、結論として簡單に、前記の歷史的進化を概括する。

（一）中世の社會。小規模の個人生產。機關は個人的使用に適應したもので、從つて原始的無力物であり、効果に於いて貧弱である。生產者自身か、或はその領主の、直接消費の爲の生產で、その消費以上、生產の餘剩があつた場合にのみ、その餘剩が賣りに出されて、交換に附せられる。故に商品生產はまだ極めて幼稚である。けれども既に其の間に於いて、社會的生產の無政府狀態を萠芽として含んでいる。

（二）資本家的革命。先づ單純なる協力作業と、工場的手工業とに依る、產業の變化。次に從來散在していた生產機關の、大工場への集中。從つて個人的生產機關の、生會的生產機關への變

化。但しその變化は大體に於いて交換の形式に影響を及ぼさない。領有の舊形式は依然として存している。資本家が出現する。資本家は生產機關の所有者たる資格に於いて、その生產物をも領有し、そしてそれを商品とする。生產は既に社會的行爲となつている。交換及びそれと同時に領有は、矢張り、個人的行爲、個々人の行爲として續いている。社會的生產物が個々の資本家に依つて領有されている。この根本の矛盾からして、今日の社會を動かして居る所の一切の矛盾が起つて來る。大工業はその一切の矛盾を暴露している。

（A）生產者が生產機關から離れる。勞働者が終身賃金勞働を宣告される。プロレタリアートとブルジョアジーの對立。

（B）商品生產を支配する法則が、段々優勢となり、段々有効となる。無制限の競爭。個々の工場內に於ける社會的組織と、全生產界に於ける社會的無政府狀態との矛盾。

（C）一方には、競爭の結果として、總ての製造家に强制される機械の完成。それは即ち段々多くの勞働者を休職にする事を意味する。即ち產業豫備軍。そして一方には、矢張り總ての製造家の競爭の爲に强制されて、生產が無制限に擴大される。この兩方面からして、生產力の發達は前代未聞となり、供給は需要に超過し、生產の過剩となり、市場の充塞となり、十年每の

恐慌となり、惡循環となる。即ち、こちらには生産物と生産機關の過多、あちらには仕事のなく、衣食の道のない勞働者の過多。然るに此の二つの、生産の原動力、社會安寧の原動力が、一緒に結びついて働らく事が出來ない。なぜと云ふに、資本家的生産方法に在つては、生産力が先づ自ら資本に化しないでは、それを運轉させる事も、その生産物を流通させる事も出來ない。所が、その生産力が多過ぎる爲、資本に化する事が出來ないのである。この矛盾は如何にも馬鹿々々しい點にまで達している。生産の方法が交換の形式に對して反逆する。ブルジョアジーは、自分の所有する社會的生産力を、これ以上に經營する能力のない事を自認する。

(D) 資本家自身も餘儀なく、生産力の社會的性質を部分的に承認する。生産および交通の大設備を、初は株式會社と爲し、次にトラストと爲し、終りには國有と爲す。ブルジョアジーが無用の階級たる事が明示される。彼等の社會的職分は總て給料取の役員に依つて果されている。

(三) プロレタリヤ革命。矛盾の解決。プロレタリヤ階級が公けの權力を握る。そして其の權力に依つて、ブルジョアジーの手から離れつゝある社會的生産機關が、公共財産に變形される。この行爲に依つて、プロレタリア階級は、生産機關を、それの從來の資本性から解放する。そしてそれの社會的性質を徹底させるべく、それに完全の自由を與へる。豫定計畫に依る社會的生産

が、それから以後、可能となる。生産の發達が、諸階級のそれ以上の存在を時代錯誤にする。社會的生産の無政府狀態が消失するに連れて、××の政治的權威が死滅する。人間が遂に初めて自分の作る社會組織の主人となり、同時に又、自然界の主人、自分自身の主人となり、—ツマリ自由となる。

この世界解放の事業を成就するのが、近世プロレタリヤ階級の歷史的使命である。即ちこの事業の歷史的諸條件、從つて又この事業の性質その者を探究し盡し、それに依つて、この使命を負はされて居る所の、今は壓伏されて居る所の階級に對し、自己の行動の條件と性質を自覺させる事が、即ちプロレタリヤ運動の理論的表現たる、科學的社會主義の任務である。

——『社會主義の發展』終——

唯物史觀について（附錄一）

唯物史觀について（附錄一）

本篇は、著者が『發展』の英譯につけた序論（イントロダクション）である。猶これについては、本譯書附錄三『序文四種』の中、『英譯の序』の終りの『譯者云』を見よ。章わけと、その見だしとは、譯者がした。

一　唯物史觀は英國の土着兒

私は此の書[1]の內容が英國の公衆の可なり多くの部分から反對される事を善く承知して居る。然しながら若し我々大陸の者が、英國『お上品社會[2]』の偏見に對して、少しでも遠慮して居たならば、我々は現在の有樣よりも、モット〳〵ひどい目に會つて居るだらう。此の書は我々の謂ゆる『唯物史觀』を擁護するものである。そして唯物論といふ言葉は、英國の讀者の大々多數の耳に逆らふものである。『不可知論（フダンスチシズム）[3]』は寬容されもするだろうが、唯物論（マテリアリズム）は全く許し難いものである。

（1）『此の書』は即ち『社會主義の發展』或は『空想的社會主義と科學的社會主義』の事。

（2）原語レスペクタビリチー。元來は名望、品位、品格などいふ意味の言葉だが、こゝではそうした身分の人々の意味に使はれて居り、そして又、少し冷かし氣味に使はれて居るのだから、『お上品社會』と

して置いた。ドイツ譯には philisterium（俗學主義、顚冥者流）としてある。

（3）不可知論とは、物の本質は認識することの出來ない（即ち知る可らざる）ものとする立場。從つて經驗を超越する總ての問題を消極的に拒否する立場。故に、後段に於いて、『遠慮した唯物論』といふ言葉も出ている。

然し十七世紀以來、總ての近世唯物論の本地は英國である。

『唯物論は英國の土着兒である。英國のスコラ哲學者ダンス・スコータスは、[1] 旣に疑問を發して居る。物質は思惟する事が出來ないであろうかと。』（マルクス、エンゲルス共著『神聖家族』。以下六節同じ。）

『彼はこの奇蹟を實現せしめんが爲に、神の全能に隱れ家を求めた。即ち彼は神學をして唯物論を說敎させた。彼は又唯名論[2]者であつた。唯物論は唯物論の最初の發現であつて、主として英國のスコラ哲學者の中に現はれている。』

（1）（2）スコラ哲學は中世の神學的哲學で、後にそれが實在論と唯名論との對立になつた。實在論は『普遍』なる者の存在を主張し、唯名論は、普遍を以て個々體に共通する名稱に過ぎないと主張した。前者はキリスト敎義の擁護であり、後者は漸くそれに反抗する者となつた。

『英國唯物論の眞の創設者はベーコンである。彼に取つては、自然科學が唯一眞正の科學である。そして感覺的の物理學が自然科學の最高部分である。アナクスゴラスと其の分子同質說、デモクリトスと其の原子論、この二つが屢々ベーコンのオーソリチーであつた。彼れの說に依れば、感覺は絕對確實であつて、一切智識の源泉である。科學は即ち經驗科學であつて、感覺的の所與材料に對し合理的研究法を施す所に成立する。歸納、分析、比較、觀察、實驗、これらが即ち合理的研究法の主要條件である。物質に固有な諸性質の中で、運動が第一主要の者である。それは單に機械的および數學的の運動としてのみならず、更にそれよりも、衝動、活力、膨脹力として、—若しくば、ヤコブ・ベーメの用語を借れば、物質の苦惱（クワール）[1]として、—第一主要の者である。運動の原始的形態は、生命ある、個性化しつゝある、本來固有の、特異の差別點を產出する所の、本質力である。[2]』

（1）クワール Qual とは、言語上に於ける哲學的遊戲である。クワールの字義は苦惱である。即ち或る種の活動を起させる苦痛である。同時に神秘的なベーメは、クワリタス（性質）といふラテン語の意味をこのドイツ語の上に匂はせている。そこでベーメの云ふクワールとは、外部から與へられた苦痛と對立するものであつて、それの支配を受ける、事物なり人間なりの自然的發達の間から生じ、そして更に其の發

達を助長する所の、能動的原理である。—(原註)

(2) この最後の、『運動の原始的形態』云々の一節は、イギリス本には缺けている。エンゲルスがわざとそれを省略したのかどうかは不明であるが、今はドイツ本に從つて書きそえて置く。

『唯物論の創設者たるベーコンに在つては、唯物論はまだ素撲な恰好で、自己の中に多方面的な發展の萠芽を閉ぢこめている。即ち一方には、物質が詩的な感覺的な魅力を以て全人類に笑ひかけて居るが、それに對し一方では又、その格言的な學說自身か、まだ多くの神學的矛盾を孕んでいる。』

『それからモツト進化すると、唯物論が一面的になる。即ちホツブスはベーコン式唯物論の組織者である。感覺が詩的の華やかさを失つて、數學者の抽象的感覺となる。即ち幾何學が最高科學として宣言される。唯物論は憎世主義に陷る。唯物論がその敵たる、憎世的、排肉的の精神主義に對し、而も其の敵の立場に立つて其の敵に勝たうとするには、矢張り自分の肉を懲罰して禁慾的になるより外はない。斯くて唯物論は感覺的な存在から智識的存在となるが、同時に又、智識の特性たる一貫性を無遠慮に展開する。』

『ホツブスはベーコンの繼續者として斯う論じている。人間の總ての智識が、感覺に依つて與

へられるのである以上、我々の思想と云ひ觀念と云ふものは、總て皆、この現實世界から、大なり小なり其の感覺的の形態を剝ぎ去つた所の、幻影に過ぎない。科學はそれらの幻影に名稱を付し得るに過ぎない。一つの名稱が一つ以上の幻影に適用される事もあり得る。名稱に名稱を付する事もあり得る。けれども、一方に於いて、總ての觀念が感覺世界に其の起源を持つと爲し、そして他方に於いて、一語が一語以上であると爲す事、即ち又、我々に覺知されている存在物、即ちあらゆる個々體の存在の外、別に普遍的の存在があると爲す事は矛盾となるわけである。非物體的の實體と云ふのは、非物體的の物體と云ふのと同じ矛盾である。物體、存在、實體、みな同一の實在觀念である。思惟する物質から思惟を切り離すことは不可能である。この物質が、世界に行はれている一切の變化の主體である。若し無限といふ言葉が、限りなく加算を行ひ得るといふ、我々の精神の能力を意味しないならば、それは無意味である。物質的のもののみが我々に感知され得るのだから、神の存在といふ事については、我々は何も知り得ない。我自身の存在のみが確實である。總ての人間的慾情は、始あり終ある機械的運動である。衝動の對象が即ち善である。人間は自然界と同一の法則に支配されている。力と自由とは同一である。』

『ホツブスはベーコンを組織だてたけれども、ベーコンの根本原理、即ち一切の智識の起源が感

覺世界にあるといふ原理に對して、深い證明を與へなかつた。そこでロックが、その著「人間の悟性に關する論文」に於いて、その證明を供給した。』

『ホッブスはベーコンの唯物論の有神論的偏見を破碎したが、それと同樣に、コリンス、ドドウエル、コワード、ハートレー、プリーストレー等は、ロックの感覺論にまだ織り込まれていた所の、最後の神學的障礙物を破碎した。兎にかく、唯物論者に取つては、有神論は宗教を片づける爲の悠長な一方法に過ぎない。』

近世唯物論の英國的起源について、斯樣にマルクスは書いた。若し英國人が今日、自分の先祖に對してマルクスの捧げた此の讃辭を喜ばないとするならば、それは誠にお氣の毒な事である。然しそれに係はらず、ベーコン、ホッブス、及びロックが、佛國唯物論者の、あの光輝ある一派の父祖である事は爭はれない。そして佛國が、海陸の戰爭に於いて、獨人および英人から凹まされたに係はらず、十八世紀を特にフランスの世紀としたのは、實にあの唯物論一派の力である。そして其の唯物論の絕頂が後のあの大革命となつて、其の結果を我々局外者は、英國でも獨逸でも、今猶ほ自國風に化する事に努めてゐる次第である。

此の事實は動かす事が出來ない。當世紀（十九世紀）の中頃、英國に住居を定めた教養ある外國

人は誰でも先づ、英國のお上品な中流階級の宗教的頑冥（と云はざるを得ないもの）を痛感した。我々は當時みな唯物論者であつた。少くとも頗る進歩した自由思想家であつた。それで我々に取つては、英國の殆んど總ての教養ある人々が有らゆる不可能な奇跡を信じ、バックランドやマンテルのような地質學者すら、其の學問上の事實を曲げて創生記の神話と餘り衝突せぬように努めたといふ事は、實に不思議の感を生ずるのであつた。そして我々は、宗教的の事柄に關して、自分の智力を用いるだけの勇氣のある人々に會はうとするには、教育のない、謂ゆる下等社會、即ち勞働者、殊にオーエン派の社會主義者の間に行くより外はなかつたのである。

二　英國の不可知論

然し英國は其後『開化』した。一八五一年の博覽會は、英國の島國的排外主義を葬つた。英國は食物に於いて、風俗に於いて、思想に於いて、次第に國際化して來た。私は今、大陸の風習が英國に侵入したと同じように、英國の或種の風習が大陸に侵入すればよいと思つている程である。それは兎もあれ、（一八五一年以前には貴族階級にのみ知られてゐた）サラダ油の輸入と傳播とは、宗教上の事柄に關する大陸的の懷疑思想を必然的に隨伴した。從つて不可知論（アグノスチシズム）は、まだ英

國教會と全く同じほどの者とまでは行かないが、それでも先づ上品さの程度に於いて、浸禮教とは略ぼ同格の者と認められ、確かに救世軍以上に置かれることになつた。斯ういふ場合、此の不信心の進みを心から歎き責める人々に取つては、此の『新らしがりの思想』が外國産でなく、他の多くの日用品のやうに獨逸製でなく、實は疑ひもなく英國の舊製であつて、其の英國の製造元は二百年以前に於いて、今の後繼者がやつて居るよりも、遙かに進んで居たのだと云ふ事を知るのは、せめてもの心遣りになる事と信する。

然らば不可知論とは實際何であるか。ランカシヤア[1]の面白い言葉の『遠慮した唯物論』でなくて何であるか。不可知論者の自然觀は全然唯物論的である。自然界の全部は法則に依つて支配され、絶對に外部作用の干渉を排斥すると云ふ。然し(彼はそれに附け加へて)我々は此の知られた宇宙以外に於ける、或る絶對者の存在を確證する手段もなければ、否認する手段もないと云ふ。曾てナポレオンがラプラースに向つて、何故に大天文學者の天體的機械論は造物者の事に一語も言及しないのかと問うた時、ラプラースは傲然として、「そんな假說の必要がない」と答へた。其の當時に在つては、そんな保留(遠慮)にも意味があつたらう。然し今日に在つては、宇宙の進化的解釋の上から、絶對に造物者もしくば宇宙統御者を容れる餘地がない。從つて全宇宙の外に

締め出された絶對存在者を云々する事は用語上の矛盾である。又私はそれを、宗教信者の感情に對する餘計な侮辱であると思ふ。

(1) ランカシヤアは英國北西の州の名で、マンチエスターなどといふ大きな工業都市の發達している處だから、『ランカシヤアの言葉』とは、當時のブルジョアジーの慣用語を意味するのである。

不可知論者は又、我々の一切の智識が我々の感覺に依つて傳達された報導に基づく事を承認している。然し(彼はそれに付け加へて)我々が感覺に依つて對象物を認知する時、我々は如何にして其の感覺が其の對象物の正確な表象を我々に與へる事を知るかと云ふ。彼は猶それに續けて斯う云ふ。彼が對象物について語り、或は其の性質について語る時、それは眞實に其の對象物と其の性質との事を意味して居るのではない。彼は其の對象物について正確な事は少しも知り得ない。只だ其の對象物が彼れの感覺の上に作り出した印象を知り得るに過ぎないと。凡そ此の種の考へ方を單なる議論で打こはす事は、如何にも困難と思はれる。然し議論より前に行爲があつた。『太初(ハジメ)に行ひあり。』[1] 人間の才智が此の難問題を案出したよりズット以前に、人間の行爲は既にそれを解決てていた。ブヂンのためしはそれを食ふに在る。[2] 我々が對象物について認知する其の性質に從つて、其の對象物を我々の實用に向ける其の瞬間から、我々は自分の知覺の正否を絶

對無謬の試驗に付するのである。若し我々の知覺が間違つているとすれば、對象物の實用に對する我々の見積りも間違つて居なければならない。從つて我々の計畫は失敗しなければならない。然るに若し我々が其の目的を達する事に成功するならば、即ち對象物がそれに對する我々の考へと一致して、我々の立てた目論見に適合するならば、それは即ち對象物についての、及び其の(試驗されただけの)性質についての我々の知覺が、我々以外の實在と一致する事の確證である。若し又我々が失敗にブツつかるとすれば、大抵いつでも遠からずして、其の失敗の原因を發見する。即ちそれは、我々が基礎として用いた其の知覺が不完全であり、皮相であつたか、或は其の場合、許容され得ない方法、即ち謂ゆる不完全推理法に依つて、他の知覺の結果と結合されて居たか、どちらかである事を發見する。だから我々が我々の感覺を正當に訓練し使用する事に注意する限り、そして正當に作られ正當に使用された我々の知覺の指圖する範圍内に我々の行動を制限する限り、我々の行動の結果が、我々の知覺と、知覺された事物の客觀性との適合を、證明する事が認められる。かくて、今日までの所、まだ一回も、科學的に統制された我々の知覺が、外界に對する間違つた觀念——知覺の性質上、外界の眞實と相違する觀念——を、我々の心中に起させるといふ結論、或は外界と我々の知覺との間に先天的の不適合性があるといふ結論に、到着せ

ねばならぬような實例がない。

(1) 聖書のヨハネ傳の卷頭にある『太初(ハジメ)に道(コトバ)あり』といふ一句に對して、ゲエテが『太初に行ひあり』といふ逆語を作つた。エンゲルスはそれを皮肉に引用したのである。

(2) うまいか、まづいかは食へば分る、論より證據だの意。

三　新カント派の不可知論

然るに、今度は新カント派の不可知論者が出て來て斯う云ふ。我々は物の性質を正しく知覺する事は出來るだらうが、如何なる感覺過程、或は思惟過程に依つても、『物それ自身』を攫む事は出來ない。『物それ自身』は我々の認識の範圍外に在ると。之に對しては疾くの昔しヘーゲルが答へている。若し諸君が一物に關して其の總ての性質を知つたならば、それは即ち物それ自身を知つたのである。その跡に殘るものは只、該物が我々以外に存在するといふ事實だけである。故に諸君の感覺が其の事實を諸君に敎へた時に、諸君は即ち物それ自身、カントの有名な認識不能物『ヂンク、アン、ジヒ』の最後の殘物を攫んだのであると。それに、カントの時代には、自然物に對する我々の智識がまだ誠に斷片的であつたのだから、我々が其の自然物の個々について知つてい

る僅かな事實の背後に、何か神祕的な『物それ自身』があるだらうと、カントが考へたのに無理もない。然るに其後、科學の大進歩に依つて、攫み得べからざる物が續々として攫まれ、分析され、猶ほ其うへに再製される事になつた。既に我々がそれを造り得る以上、我々は何んとしてもそれを認識不能物と考へる事は出來ない。當世紀（十九世紀）の初半の化學に取つては、有機物質は誠に神祕な不可思議物であつた。然し今では、有機的過程の助けを借らずに、化學的要素から續々として有機物質を作りあげる事を知つている。近世の化學者は宣言している。如何なる物體であらうと、其の化學的構成が知られている以上、其の諸要素を集めて、其の物體を作りあげる事が出來ると。我々はまだ中々、最高の有機物質（即ち蛋白質）の構成を知る事は出來ない。然し、數世紀の後の事かも知れないが、我々が遂に其の智識に到達して、其の力に依つて人工的蛋白質を作りだす事があり得ないと信ずる理由はない。若し我々が遂に其の智識に到達するならば、我々はそれと同時に有機的生命を作り得るわけである。生命なる者は、其の最低の形式から最高の形式に至るまで、總て蛋白質の正常の存在樣式に過ぎないからである。

然るに我が不可知論者は、こういふ形式的な、精神上の保留（遠慮）をしておいてから、直ぐに地金を出して、荒つぽい唯物論者として言動している。彼は斯う云ふかも知れない。人間の知

る限りに於いては、物質と運動、即ち近ごろの言葉でいふエネルギーは、創造する事も出來なければ、絶滅させる事も出來ない。けれども我々は、それが、曾ていつの頃にも創造されなかつたといふ證據を持つて居ないと。然し、若し諸君が何等かの特殊の場合について、其の承認（エネルギーの曾て創造されなかつたといふ證據はないといふ承認）を以て彼に當るならば、彼は一言の下に諸君を排斥するだらう。彼は抽象的には、精神主義の可能を承認するけれども、具體的には、少しもそれを承認しない。人間の知る限り、知る得る限りに於いては、彼は宇宙に創造者もなく、支配者もないと云ふのである。人間の關知する限りに於いては、物質とエネルギイは創造もされず絶滅もされぬと云ふのである。人間に取つては、心は即ちエネルギーの一方式である。腦髓の一作用である。人間の知る所は只、この物質界が不變の法則に依つて支配される事のみ、云々と云ふのである。斯くて彼は一個の科學者である限りに於ては、即ち何事かを知る限りに於いては、唯物論者である。そして科學以外に於いて、即ち彼が少しも知る所のない領域に於いて、彼は其の無智をギリシャ語に反譯して、不可知論（アグノスチシズム）と云ふのである。

兎にかく此の一事だけは明かである。假りに私が不可知論者であるとしても、此の小冊子の中に略記されている歷史觀を『歷史的不可知論』と云ひ得ない事は分りきつている。若し私がそん

な名稱を用いるとしたら、宗教信者ば笑ふだらうし、不可知論者は人を馬鹿にするなと云つて憤慨するだらう。だから私は望む、私が英語を以て、並びに他の多くの國語を以て、『史的唯物論』といふ言葉を使つても、英國のお上品社會がそんなにビックリして下さらない事を望む。そして其の『史的唯物論』とは即ち、總ての重要な歴史的事件に對する究竟原因と決定的原動力とを、社會の經濟的發展の中に求め、生産および交換方法の變化の中に求め、又その變化から生じた所の、社會の諸階級への分裂の中に求め、及びそれら諸階級間の闘爭の中に求めるといふ、歴史的進展の見解である。

若し私が茲に、史的唯物論は、英國のお上品社會に取つても有利な場合があるといふ事を示すならば、私に對する寛大な取扱ひは、蓋し速かに與へられるであらう。私は前に云つて置いた。凡そ四五十年前、英國に居住した教養ある外國人は誰でも先づ、英國のお上品な中流階級の宗教的頑冥、と云はざるを得ないものを痛感したと。そこで私は今、當時のお上品な英國の中流階級が、智識ある外國人の目に見えたほど、それほど馬鹿でもなかつた事を證明しようと思ふ。彼等の宗教的傾向には説明の仕方がある。

四　封建制度とブルジョアジー

ヨーロッパが中世時代から脱出しかけた頃、新興の都市中流階級は、革命的要素を構成していた。彼等は中世の封建的組織の間に於いて、既に公認された地位を獲得して居たが、然し其の地位もまた、彼等の膨脹力に對して、餘りに狹隘になつて來た。中流階級、即ちブルジョアジーの發達が、封建制度の維持と兩立しない事になつて來た。從つて封建制度が仆れねばならなかつた。(1)

(1)　中世紀の封建時代に在つては、ヨーロッパの全土は、多數の大名や領主の爲に、個々獨立した小政治區域に分割されて居たので、その小區域内の人民は、迚も國民などと云はれる大團結では無かつた。國民とか、國家とか云ふのは、その後に於ける、比較的近代の産物である。そこで商工業が漸く繁榮して、資本制度が發達する爲には、從來の小政治區域よりもモツトモツト大きな地域を、一つの經濟單位とする必要があつた。ブルジョアジーの膨脹力が封建制度の維持と兩立しなくなつたと云ふのは、即ち右の意味である。

然るに封建制度の國際的大中心は、ローマン・カトリック教會であつた。(1) 西部歐洲の封建諸國は皆な互に戰爭を事としていたに係はらず、ローマ教會に依つて總てが一大政治組織に結合さ

れ、ギリシャの分權教派と對立し、又モハメット教の諸國と對立していた。ローマ教會は封建制度に神聖清淨の後光を付與した。ローマ教會は封建的標本に倣つて、自分の主從的階級制度を作つていた。そして又、自ら最大最强の封建的大名となり、優に舊教世界全土の三分の一を領していた。そこで俗界の封建制度を、各國各地に於いて、順次に擊破しようとするには、先づ此の、神聖なる中心組織を破壞する必要があつた。

(1) 當時、ヨーロッパの全土が多數の小政治區域に分割されて居た事は前註の通りであるが、然し其の小區域内の人民から離れて、大名、領主、及びそれに從屬する支配階級者から見た時には、ヨーロッパの全土は矢張り一大國家として共通の文化を作り、一宗教、一國語、一文學を有して居たわけである。即ち謂ゆるキリスト教國が、ローマ法皇を中心として結合して居たわけである。

それに、ブルジョアジーの勃興と相並んで、科學の大復興があつた。天文學、機械學、物理學、解剖學、生理學などが皆な再び開發された。そしてブルジョアジーは自分の工業的生產の發達の爲に、自然物の物理學的性質と、自然力の活動方式とを確認する科學を要求したのであつた。其の當時に至るまで、科學は只だ教會の婢僕であつて、信仰の定めた範圍を越える事を許されなかつたので、其の爲に丸で科學にはなつて居なかつたのである。今や科學が教會に叛逆した。ブル

ジアジーには科學が是非とも必要である。從つてブルジョアジーは科學の叛逆に加擔した。

右は、新興の中流階級が、既成宗教と衝突せねばならぬ其の理由の、二つの點にしか觸れて居ないけれども、それでも次の二事を示すには充分であらう。即ち第一には、ローマ教會の優越に對し、最も直接の利害を以て鬪爭した者がブルジョアジーである事。第二には、封建制度に對する有らゆる鬪爭が、當時に於いては、宗教的假裝を爲さねばならなかつた事、即ち何よりも先づローマ教會に對して鬪爭を向けねばならなかつた事。然し最初の叫びは、諸大學や都市の商人等に依つて擧げられたけれども、地方の民衆、即ち小百姓も、平生から自分等の存在の爲に、到る處に於いて僧俗二樣の領主等と鬪爭せねばならなかつたのであるから、右の叫びに對しては必ず强大な反響を擧ぐべき筈であり、又實際擧げたのである。

封建制度に對するブルジョアジーの永い戰ひは、遂に三大決戰に於いて其の頂上に達した。

五　ルーテル及カルヴインの宗教改革

三大決戰の第一は、獨逸に於いて、プロテスタントの宗教改革と稱されている者であつた。ルーテルに依つて擧げられたローマ教會反抗の鬪の聲は、政治的性質を有する二つの叛亂に依つて

呼應された。一つは一五二三年の、フランツ・フォン・ジッキンゲン[1]に率いられた下級貴族の叛亂。今一つは、一五二五年の大農民戰爭[2]。此の兩者は、主として、肝腎の味方なる商工市民の不決斷の結果として、敗北した。其の不決斷の原因については、今こゝに述べる暇がないが、何しろ其の時からして、此の鬪爭は地方の諸大名と中央の王權との爭ひに退化し、遂に獨逸をして、二百年の間、政治的に活動する歐洲諸國の列から除外せしめるに至つた。但しルーテルの改革は確かに新宗敎を作り出した。即ちそれは專制王國に適合する宗敎であつた。從つて獨逸北東部の農民は、ルーテル宗に化すると同時に、自由民から農奴の地位に引下げられた[3]。

(1) ジッキンゲンは宗敎改革の熱心な贊成者で、宗敎改革の强制と、僧俗二樣の領主連の廢絕とを目的とする同盟の首領となり、盛んにドイツ諸國と戰爭した。

(2) ドイツの農民は宗敎改革を機會として叛亂したが、ルーテル等はそれを否認した。再洗禮派と稱する新敎の一派は、ルーテルの不徹底に反抗し、トマス・ミュンチェルを首領として、共產主義的農民運動を起した。

(3) 前節の註の通り、封建制度の社會組織と政治組織が次第に變化しはじめ、資本制度發達の爲に、大地域を經濟單位とする事が必要になつたので、そこで、風俗、習慣、言語、宗敎、思想などの類似した

諸地域が互に結合して、經濟上および政治上の大團結を作りはじめた。斯くて漸くヨーロッパ全土に、イギリス、フランス、スペイン、ロシヤ、イタリー、ドイツ、スエーデン、ノールウエーなどの新國家、新國民を生じ、從つてそれぞれ特殊の國民的文化が發生した。ルーテルの宗敎改革なるものは、その實、右の樣な經濟的變化の結果から生じた、一つの政治運動であつて、ヨロッパの諸地方がローマ法皇の束縛を脫して、各々獨立の國民となつた事を、儀式的に登錄したものに過ぎない。各國の敎會が獨立して、從來一般に行はれて居たラテン語のバイブルが、各國語に反譯されたのは、即ち國民獨立、文化獨立の意義を示すものである。故に宗敎改革は飽くまでもブルジョア的であつて、農民戰爭などに反對し、又王權的、中央集權的であつて、地方的の諸大名にも反對した。諸大名の滅亡の上に生じた專制王國、即ち前記の新國家は、ブルジョアジーの要求なる大區域の政治經濟單位を結成する爲の方便であつた。然しルーテルは不徹底であつて、まだ中央集權の王國を作り得なかつた。

然し、ルーテルの失敗した所をカルヴインが成功した。カルヴインの信條は、當時のブルジョアジーの中の最も大膽な者に適していた。彼れの運命豫定說は、商業界の競爭場裡を在つては、成功失敗は人の活動や機敏に依るのでなく、人の支配し得ざる諸事情に依るといふ事實に對する、宗敎的の表現である。即ち『願ふ者にも走る者にも依らず』只だ不可知にして優秀なる經濟力の

惠みに依る。[1] 經濟革命の時代、即ち總ての古い商業上の通路と中心とが新らしい者に代り、インドとアメリカが世界に解放され、最も神聖なる經濟上の信仰品たる金銀の價値さへも動搖し、崩壞しはじめた時代に於いては、右に云ふ所は特に眞實である。カルヴインの教會組織は、徹底的に民主的であり共和的であつた。神の王國が既に共和化された以上、現世の王國がどうしていつまで帝王や、僧正や、領主に屈從して居られよう。獨逸のルーテル宗は、諸侯伯の意のまゝになる道具に使はれたが、カルヴイン宗はホランドに共和國を作り、イングランド及び殊にスコットランドに元氣な共和黨を作り出した。

(1) 新約聖書羅馬書に『されば願ふ者にも走る者にも依らず只だ惠む所の神に依れり』とある。

ブルジョアジーの二度目の叛亂はこのカルヴイン宗に於いて、丁度出來合の鬪爭理論を發見した。この叛亂は英國に起つた。都市の中產階級がそれを起して、農村の鄉士(ヨーマンリー)が其の戰ひを遣り遂げた。ブルジョアジーの三大反抗運動に於いて、いつも農民が其の戰鬪の任に當るべき軍隊を供給したのは如何にも不思議である。農民は正に其の戰鬪が勝利に歸した以上、其の勝利の經濟的結果として、最も確實に滅亡させらるべき其の階級なのである。現にクロムエルから百年の後、英國のヨーマンリーは殆んど全く消失した。それは兎にかく、ヨーマンリーの力と、都市の賤民

的要素の力とが無かつたら、ブルジョアジーばかりでは、迚もあそこまで遣り得なかつたであらうし、迚もチャールス一世を斷頭臺に登せ得なかつたであらう。當時既に落ちるばかりに熟しきつて居た所のブルジョアジーの勝利を攫むにすら、革命は可なり先の方まで進み過ぎる必要があつた。一七九三年のフランス、一八四八年のドイツは正に其の例である。これは實際、ブルジョア社會の進化法則の一つでもあるらしく見える。

然るに此の革命的活動の過度に對して、必然的に不可避の反動が起つて、それが又止まるべき所に止まる事が出來なかつた。左右振動の數回を繰返した後、新らしい重力の中心が漸く定まり、それが新らしい出發點になつた。斯くて『大叛亂』の名に依つてお上品社會に知られている、英國史の偉大な時代、及びそれに續いた諸鬪爭は、自由主義の歷史家に依つて『榮譽ある革命』と名づけられた所の、比較的貧弱な事件を以て其の終結に達した。

六　英國貴族とブルジョアジーとの妥協

新らしい出發點と云ふのは、新興中產階級と元の封建侯伯たる地主との妥協であつた。其の地主は今でも貴族と呼ばれて居るが、もう餘程永らくの間、丁度フランスのルイ・フイリツプが遙

か後の時代に成つたのと同じ者、即ち『王國最初のブルジョア』に成るべき途中にあつたのである。英國でも幸ひな事に、古い諸侯伯が薔薇戰爭でお互に殺されていた。それで其の後繼者は、大部分舊家の出身ではあつたけれども、遠く直系から離れて居たので、全く一つの新團體を形づくり、習慣も傾向も封建的と云ふよりは、遙かに多くブルジョア的であつた。彼等は充分に金の價を知つていた。そして直ぐに其の地代を增加させる爲に、幾百人の小百姓を追ひ出だして、其の代りに羊を飼つた。ヘンリー八世は寺領の土地を濫費しつゝ、大仕掛に新らしいブルジョア的地主を作り出だした。又その外に無數の領土沒收が行はれて、それが更に大小の成上り分限者に頒與され、而もそれが十七世紀の全部を通じて繼續したので、其の結果も同じく多數のブルジョア的地主を作り出だした。從つてヘンリー七世以後、英國の『貴族』は、工業的生產の發達を妨害するどころでなく、却つて間接に、それに依つて私益の獲得を求めていた。だから大地主の中には、經濟的及び政治的の理由からして、いつでも喜んで、金融的および工業的ブルジョアジーの領袖等と協力する一部分があつた。一六八九年の妥協は、此の故にわけもなく成就された。金融的、製造業的、及び商業的中產階級の經濟的利益が充分に保護される以上、『金と位』の政治的分捕は大地主貴族の勝手に任されていた。そして其の經濟的利益は、當時に於いて國民の一般政

策を決定するに足るほど有力な者であつた。局部的の事柄については、固より多少のゴタ〳〵もあつたらうが、大體上、彼等貴族の寡頭政治は、自分等の經濟的繁榮が、工業的及び商業的中產階級の繁榮と、ノッピキならず結合されている事を十分に心得ていた。(1)

(1) 當時、英國では紡績事業の盛んになりかけた時で、貴族の地主は皆な百姓を追ひ出して羊を飼つた。農作物よりは羊毛の方に利益が多かつたのである。それで農民は土地を離れて都會に漂浪し、紡績工場の勞働者に使はれた。ブルジョアジーの方では丁度その漂浪者を待受けていた。

其の時以後、ブルジョアジーは、英國支配階級の、卑賤ながら公認された構成分子であつた。彼等は他の構成分子と共に、國民の大勞働群を壓伏する事に於いて共同の利益を有していた。即ち商人なり製造業者なりが、其の事務員に對し、職人に對し、下女下男に對して、自ら主人の地位、—或は近ごろまでそう呼ばれて居た樣に、『自然の君長』(1)たる地位—に立つ事になつた。彼れの利益は、其の使用する人々から、出來るだけ多くの、出來るだけ善い仕事を得るに在つた。其の目的を達する爲には、其の人々を適當の服從に訓練する事が必要であつた。彼は本來宗教的であつた。彼は其の宗教の旗印の下で、王や領主と戰つて來たのである。然るに彼は間もなく、其の同じ宗教が自分の使つている『自然の下級者』の心に影響して、彼等をして神の與へ玉うた、

其の主人の命令に服從せしむべき機會を與へる事を發見した。之を要するに、英國のブルジョアジーは今や既に、下層階級たる國民の大生產群を鎭壓する事に干與せねばならなくなつた。そして其の目的の爲に使用した手段の一つが即ち宗敎の力であつた。

（1）『自然の君長』の原語はナチュラル、スピリオルで、法律上、政治上の君主長上ではないが、自然の實際上の君長だといふ意味。『自然の下級者』はナチュラル、インフイリオルで、同じく實際上の奴僕隷屬者といふ意味。

七　英國の唯物論とブルジョアジー

今一つ、ブルジョアジーの宗敎的傾向を强めるに力のあつた一事實があつた。英國に於ける唯物論の勃興がそれである。此の新らしい敎義は、中產階級の敬虔な感情を驚かしたばかりで無かつた。唯物論は、學者及び敎養のある人士ばかりに適する哲學として自ら宣言し、無敎育な民衆（ブルジョアジーをも含めた民衆）ばかりの用に立つ宗敎と對立する者であつた。ホッブスに在つては、唯物論は國王絕對權の擁護者として舞臺に現はれた。それは『强健にして奸惡なる兒童』即ち人民を鎭壓すべく專制王國を要求する者であつた。それと同じく、ホッブスの後繼者たるボ

リングブローク、シャフツベリー等に在つても、其の新らしい自然神敎的唯物論は、一つの貴族的、密敎的の敎義であつて、從つて其の宗敎的異說の爲め、及び其の反ブルジョア的政治關係の爲に、中產階級から嫌惡されていた。そこで此の貴族的の唯物論及び自然神敎に對して、プロテスタントの諸宗は、曾てスチユアート王朝に反抗する旗幟と戰鬪要素とを供給した如く、今度は又進步的中產階級の主力を供給した。そしてそれが今日に至るまで『大自由黨』の中堅を形ちづくつている。

同時に唯物論は英國から佛國に渡り、そこで他の哲學的唯物論の一派、即ちデカルト派の一分派と抱合した。佛國でも、唯物論は初め純然たる貴族的敎義であつた。然し間もなく、其の革命的性質が發揮された。唯物論者は批評の鋒先を信仰上の事柄に制限しなかつた。彼等は行當り次第、科學上の傳統にでも政治上の制度にでも、何にでも其の鋒先を向けた。そして彼等は、自分の學說の普遍的適應性を立證する爲に、大膽明快の態度を以て、一切の學問智識に自說を適用すべき、百科全書の大著述をやつた。それに依つて彼等は『百科全書派』と呼ばれている、斯くて純粹唯物論か又は自然神敎か、其の二形式のいづれかに於いて、唯物論は佛國に於ける總ての敎養ある青年の信條となつた。從つて、大革命の爆發した時には、英國王黨派に依つて孵化された

此の學說が、佛國の共和主義者及び威嚇主義者に理論的旗印を與へ、更に『人權宣言』に對する根據を供給した。佛國大革命は即ちブルジョアジーの三度目の勃發であつた。然し全然宗教的外衣を脫却した、むきだしの政治的戰鬪をやつた最初の者であつた。そして又、格鬪者の一方たる貴族を全滅させ、他の一方たるブルジョアジーに全勝を得させるまで、本統に戰ひぬいた最初の者であつた。英國に於いては、革命前の制度と革命後の制度との連續、及び地主貴族と資本家との妥協が、法律上に於ける先例舊慣の持續となり、又宗教的色彩を帶びた封建的法律形式の保存となつて現はれた。然るに佛國に於いては、革命が過去の傳統と完全な分離を遂行して、封建制度の最後の痕跡まで掃蕩し盡した。そして『民法』の發布に依つて、昔しの羅馬法を最も巧妙に近代の資本家的條件に順應させた。羅馬法は、マルクスが商品生產と名づけた經濟的階段に相應する法律的諸關係を、殆んど完全に表現したものである。そこで此の佛國革命法典は、他の總ての—英國をも除外せぬ—國々に於いて、今でも所有權法改善のモデルになつて居るほど、それほど立派な者である。然し忘れてはいけない、英國法律は今に至るまで、資本家社會の經濟關係を、封建時代の野蠻な封建的言語で表明している。從つて表現された事物と、其の言語との釣合は、丁度、英語の綴方と英語の發音との關係のような者である。『英國では、ロンドンと書いてコンス

タンチノーブルと發音する』と、或る佛國人は云つている。[1] そして其の同じ英國法律が、個人の自由、地方自治、裁判所以外の有らゆる干涉からの獨立などいふ、昔のゼルマン法の最善の部分を後代まで保存し、そしてそれをアメリカ其他の諸植民地に傳へた唯一の法律である。大陸諸國に於いては、それらの法律は專制王國の時代に悉く失はれて、今日まだどこでも充分に回收されて居ない。

(1) ロンドンと書いてコンスタンチノーブルと發音すると云ふのは、何か外交上の事件に關する諷刺の意味もあるか知れないが、英語の發音はそれほど綴方から飛び放れている場合がある。

八　ブルジョアジーと宗教的信條

扨こゝで又、英國のブルジョアジーの事に返る。英國のブルジョアジーは、フランス革命を絕好の機會として、他の大陸諸王國の助けに依り、佛國の海上商業を破壞し、佛國の植民地を併呑し、海上に於ける競爭者としての佛國の最後の立場を蹴つぶしてしまつた。斯樣に海上權力を占める事も、固より英國ブルジョアジーの目的であつたが、一つには又、フランス革命の遺口が氣に入らなかつたのである。あの暴力的な『唾棄すべき』テロリズムばかりでなく、ブルジョア支

配を極端まで行かせようとする、其の大體の遺口が氣に入らなかつたのである。英國の貴族は、ブルジョアジーに今日の如き行儀を敎へ、又ブルジョアジーの爲に作法習慣を作り、又國內の秩序を保つ陸軍と、植民地を獲得して海外の新市場を開く海軍とに將校を供給した者であるから、ブルジョアジーは貴族なしには到底やつて行かれないのであつた。尤も、ブルジョアジーの中に急進的な小數派もあつた。其の少數派は、右のような妥協の下に立つては、充分に其の利益を保護して貰ふ事が出來ないのであつた。それらは主として比較的富裕でない中產階級で、從つてフランス革命に對し同情を寄せていた。然し彼等は國會に於いて無力であつた。

斯くて唯物論がフランス革命の信條となつた時、敬虔なる英國のブルジョアジーは慌てまくつて其の宗敎にかぢりついた。若しあのパリの恐怖政治が鎭まらなかつたら、若しあの民衆の宗敎的本能が無くなつてしまつたら、どうであつたらう。そこで唯物論が佛國から段々に近隣諸國に廣まり、又その唯物論が他の似かよつた思潮、殊にドイツ哲學に依つて擁護されるに連れ、從つて又、實際上、大陸に於いては、段々に、唯物論と自由思想とが敎養ある人士の必要な資格となるに連れて、英國の中流階級はいよいよ頑固に自分等の種々なる宗敎的信條にすがりついた。其の種々なる信條は相互に違つては居るものゝ、兎にかくいづれも皆な明かに宗敎的信條であり、

基督的信條であつた。

大革命が佛國に於いて、ブルジョアジーの政治的勝利を確立した間に、英國ではワアツトや、アークライトや、カートライトなどの學者が產業的革命を起して、全く經濟力の中心點を移動させた。ブルジョアジーの富は、地持貴族の富に比べて、著るしく速かに增大した。又ブルジョアジーの內部でも、金融貴族、銀行家などの連中は、段々に製造業者から追ひまくられてしまつた。一六八九年の妥協は、其の後次第にブルジョアジーに取つて有利な變更を加へられたが、それでもモウ關係諸黨派現在の實力に相應する者ではなかつた。それら諸黨派の性質も亦た變化していた。一八三〇年のブルジョアジーは前世紀のブルジョアジーと大いに違つた者であつた。政權が依然として貴族の手に在り、貴族がそれを使つて新らしい工業的ブルジョアジーの要求を斥けるといふ形勢は、新らしい經濟的の利害關係に對して最早や不相應な者になつて來た。そこで貴族に對する鬪爭が更に必要となつて來た。そしてそれは勿論、新らしい經濟力の勝利に歸するより外はなかつた。そこで先づ選擧法改正案が、一八三〇年の佛國革命の刺激の下に、有らゆる反抗を排除して强要された。ブルジョアジーはそれに依つて、公認されたる有力な地位を國會に占めた。次に穀物條例の廢止に依つて、ブルジョアジー（殊に其の最も活動的な部分たる製造業者）

の優勢が、斷乎として地持貴族の上に確立された。之がブルジョアジーの最大の勝利であつた。然しそれは又、自分だけの利益の爲にした勝利としては、最後の者であつた。其後、彼等はどんな勝利を得たにしても、それは皆な別個の新らしい社會力に分配せねばならなかつた。そして其の新らしい社會力は、初めは彼等の聯合者であつたが、間もなく彼等の競爭者に變じて來た。

（1）穀物條例は穀物の輸入に課稅して、地主貴族の利益を保護するものであつた。そこでブルジョアジーは、勞働者の爲に安價な食物を供給せねばならぬといふ名義で、實は自分等の爲に、安價な勞働を供給せしむべく、該條例の廢止を主張したのである。

九　ブルジョアジーと無敎育と偏見

產業革命は製造業的大資本家の一階級を作り出した。然し同時に又、それよりも遙かに多數なる製造業的勞働者の一階級を作り出だした。この階級は、產業革命が製造業の一部門から一部門へと進行するに連れて、次第に其の數を增加し、又それに連れて勢力を增大した。その勢力は、夙に一八二四年に於いて、國家が厭々ながら勞働者の團結を禁ずる法律を撤去した事實に依つて證明されている。選擧法改正運動の間、彼等勞働者は其の改正黨の急進分子となつて居た。然る

に一八三一年の法律が彼等を選擧權から除外したので、彼等は『平民憲章』（ピープルズ・チャーター）の要求を發し、穀物條例反對の大ブルジョア政黨と對抗して、別に獨立のチャーチスト黨を作つた。これが近世に於ける勞働者の最初の政黨であつた。（第四三頁の註を見よ）

次に一八四八年二月及び三月の大陸革命が起つた、勞働者は其の革命に重大な役目を果し、少なくともバリだけに於いては、資本家社會の見地からしては到底許容しがたい要求を提出した。所が其の次には一般的の反動が來た。先づ一八四八年四月十日にチャーチスト黨が敗北し、次に同年六月のバリ勞働者の一揆が鎭壓され、次に又一八四九年の、イタリー、ハンガリー、南ドイツなどの災厄があり、最後に一八五一年十二月二日、ルイ・ボナパルトのバリ征服があつた。それで少なくとも當分の間、勞働者階級のお化けは押しつけられた。然し其の價は隨分高かつた。英國のブルジョアジーが以前から一般人民に宗敎氣分を持たせる事の必要を悟つて居たとするなら、右の如き苦い經驗をした後に、更に何層倍その必要を感じたか知れないわけである。そこで彼等は、大陸の同僚に嘲笑されるのにも構はず、年々數萬數十萬の金を費しつゞけて、下層階級に對する福音傳道に努力した。彼等は自國の宗敎機關だけに滿足せず、宗敎營業に於ける最大の成功者なる兄弟ジョナサン（即ち米國）の助を求め、宗敎覺醒運動や、ムーディー及サンキーの宗敎

運動のやうな者まで同國から輸入した。そして最後には又、救世軍の危險や援助まで受入れた。救世軍は原始キリスト敎のプロパガンダを復活させたもので、選民としての貧者に訴へ、宗敎的に資本主義と戰ひ、結局、原始キリスト敎の持つていた階級的反抗の要素を醸成し、いつかは、今それに保護金を與へている上流階級に對して、厄介な者になりかねない者であつた。(1)

(1) この點に於いては、エンゲルスの豫言が中つて居ない。救世軍は今日に於いて（巧妙は骨拔の結果）ブルジョアジーの爲に「厄介な者」にも危險な者にも成つて居ない。

思ふに歷史發展の法則上、ブルジョアジーは歐洲のどの國に於いても、封建貴族が中世時代に政權を持つて居たような、そんな獨占的の方法で、少くとも多少繼續した年月の間、政權を占める事は出來なかつたのであるらしい。封建制度の全く絕滅した佛國ですら、ブルジョアジー全體として、完全に政府を握つたのは、極短期の間のみであつた。ルイ・フイリツプの治世の間（一八三〇—四八年）に於いては、ブルジョアジーの一小部分だけが國內を支配し、其の大部分は選擧資格の高い制限に依つて政權から除外されていた。第二共和國の下（一八四八—五一年）に於いては、全ブルジョアジーが支配をしたが、それは僅かに三年間であつた。そして彼等の無能力が第二帝國を現出させた。そこで今第三共和國の下に於いて、初めてブルジョアジーが全體として

二十年以上、政權を取つているが、それも早や著るしい衰兆を示している。ブルジョアジーの長期の支配は、封建制度がなくて、社會が初からブルジョアジーの基礎の上に立てられた、アメリカのような國々にのみ可能である。而も其のフランスやアメリカでも、ブルジョアジーの後繼者たる勞働者が、既に入口の戸を叩いている。

英國では、ブルジョアジーは曾て獨占的の權勢を持たなかつた。一八三二年の勝利の時ですら、政府の主要な地位は殆んど悉く地持貴族の手に殘されていた。富裕な中流階級がどうして之ほどおとなしかつたかは、久しく私の理解し得ざる所であつた。然るに自由黨の大製造家フォルスター氏が或る公開の演說で、ブラットフォードの青年に對してフランス語を學ぶ事を懇請したのを聞いて、初めて右の疑問が解けた。彼は、フランス語が少くとも英語と同じほど必要な社交界の國務大臣として列席した時、自分がフランス語を知らない爲に、如何に見すぼらしかつたかといふ經驗談をして、今後の青年は立身出世の手段として是非ともフランス語を學べと云ふのであつた。要するに當時の英國中流階級は一般に無敎育者の成上りであつたので、偏狹なお國自慢と、商賣上から來た機敏の駈引との外、まだ色々な資格を必要とする政府の高い地位は、貴族に任せて置くより外に仕方が無かつたのである。(1) 今日ですら、中流階級の敎育といふ事が、絕えず新聞

紙上の論爭の種になつて居るのを見ると、英國の中流階級がまだ自分ながら最上の教育に適して居ると考へないで、何かもすこし遠慮した地位に身を置いている事が分る。斯くて穀物條例廢止の後ですら、その運動の功勞者たるコブデンや、ブライトや、フォルスターなどの人々でも、其後更に廿年も立つて、新らしい選擧改正法が內閣の戶を彼等に開くまで、國家の公職から除外されるのは當り前と考へられて居たらしく見える。故に英國のブルジョアジーの頭には、今日に至るまで、自分等が社交的に低劣であるといふ深い感じが浸み込んでいる。從つて彼等は一種裝飾的の遊惰階級を存在させ、それに國民を代表させて、傲然として國家の公職に就かせ、爲に自分等も損をし、國民にも損をさせている。そしてたまたま彼等の中の一人が、—兎にかく自分等仲間で製造した人物が、—その精選された特權團體に入る事を許される場合には、彼等はそれを非常な名譽だと心得ている。

（1）英國人は商賣上の事柄に於いてすら、排外的自惚に依つて大なる禍ひを受けている。極近來まで、普通の英國製造業者は、自國語以外の言葉を話すのは、英國人として不見識だと考へ、英國に在住する外國の奴等に、英國の生產物を海外に運びだすの勞を取らせるのが、寧ろ英國人の誇りだと考へていた。そして、其の外國人（大部分はドイツ人）が、其の爲に英國の海外貿易、輸入および輸出の、甚だ大なる部

分を支配するに至つた事に氣がつかなかつた。又それが爲、英國人の直接の海外貿易が殆んど全く、植民地と、支那と、北米合衆國と、南米とに限られた事に氣がつかなかつた。猶又彼等は、それらのドイツ人が海外に在る他のドイツ人と取引をして、其の在外ドイツ人が全世界に亘つて商業的植民地の完全な網細工を結成した事に氣がつかなかつた。然るに約四十年前、ドイツが初めて本氣に輸出向の製造業をやりだした時、其の網細工が大變な役に立つて、今まで穀類の輸出國であつたドイツが、僅かの間に第一流の製造業國になりおほせた。そこで約十年前、英國の製造業者が驚きだして、在外の大公使や領事に對し、何ゆえ以前のように顧客がないかと尋れた時、其の答は皆な一樣に斯うであつた。（一）諸君は顧客の言葉を學ばず、顧客をして諸君の言葉を話させようとする。（二）諸君は顧客の慾望や、習慣や、趣味に適合するように試みる事すらもしないで、只だ顧客をして英國の慾望や習慣や趣味に合致させようとする。（原註）

十　道德的手段に依つて人民を馭すべき時

故に英國の工業的および商業的中流階級が、まだ充分に地持貴族を政權から追ひだす事に成功して居ない中に、早くも他の競爭者、即ち勞働階級が舞臺上に出現した。然しチャーチスト運動と大陸の諸革命との後に生じた反動、並びに一八四八年から一八六六年にかけての、英國貿易の

未曾有の膨脹、―それは俗説に依れば、自由貿易のみの効果とされて居るけれども、實はそれよりも遙かに多く、鐵道、汽船、其他一般交通機關の大發達の結果であるが、―此の二つの事情に依つて、勞働階級は再び自由黨の附屬となり、チャーチスト運動以前と同じく、自由黨の左翼を形づくつて居たけれども、彼等の選擧權の要求は次第に不可抗の勢となり、自由黨の首領等が躊躇逡巡している間に、ヂスレリーが保守黨をして好機會を攫ませ、選擧區の改正と共に、市區に於ける戸別選擧權の制度を實施した。次に無記名投票が行はれ、次に又（一八八四年）戸別選擧權が郡部に擴張され、同時に再び選擧區の改正があつて、選擧區の分割が或る程度まで平等になつた。總てこれ等の施設は著るしく勞働階級の選擧力を增大し、今では少なくとも百五十から二百の選擧區に於いて、勞働階級が投票者の多數を供給している。然し議會政治は傳統に對する尊敬を敎へる一等の學校である。ジョン・マナアス卿が戯れに『我が古き貴族』と呼んだ者に對して、中流階級が畏敬の目を以て見上げると同じように、勞働者の群は又、從來『目上』と呼ばれていた中流階級に對して、矢張り恭順の目を以て見上げる。實際、今から十五年ばかり以前の英國勞働者は模範的勞働者であつて、其の主人の地位に對して敬意を拂ふ事と、自分の權利の要求に遠慮する事は大したもので、ドイツの講壇社會主義派に屬する經濟學者等は、自國の勞働者の手も

つけられぬ、共産主義的および革命的の傾向をそれに比べて、せめてそこに慰めを得て居るのであつた。

然し英國の中流階級は、さすがに立派な商賈人であるので、ドイツの敎授連よりはヨリ遠くを見る力があつた。彼等は自分の權力を、厭々ながらではあるが、勞働階級に分つていた。彼等はチャーチスト運動の間に、かの『强健にして奸惡なる兒童』（即ち人民）が何をやりだすかを善く知つていた。そして其時以後『平民憲章』の大部分を英國律令の中に包含させる事を餘儀なくされて居た。そこで今こそ實に道德的手段に依つて人民を馴すべき時である。そして民衆に効果を及ぼすべき、有らゆる道德的手段の隨一は、即ち宗敎である。それ故に政府の學務局には僧侶が多數を占め、それ故にブルジョアジーは自己課稅を增大して、敎義固執派から救世軍に至るまで各種の宗敎運動を保護して居るのである。

十一　大陸ブルジョアジーの自由思想放棄

然るに今や、大陸ブルジョアジーの自由思想と、宗敎的怠慢とに對する、英國お上品主義の勝利の時が來た。佛獨の勞働者は叛逆的になつて來た。彼等は深く社會主義に感染した。そして自分

の優勝を獲得する爲には、手段の合法など全く頓着しない當然の理由を持つていた。『强健なる兒童』は今や日に日に『奸惡』を增長しつゝあつた。佛獨のブルジョアジーに取つては、最後の賴みの網が無かつた。彼等は只だ默つてその自由思想を棄てるだけの事であつた。それは丁度、大氣取でシガアをくわえて船に乘つて來た若者が、次第に船暈を感じた時、靜かにそのシガアを棄てるのと同じであつた。そこで先きに宗敎を嘲笑した自由思想家等が、追々と外面的に敬虔な行狀を示し、敎會なり其の敎義なり儀式なりを馬鹿にせぬやうになり、止むを得ざる限りはドグマや儀式を守る事にさへなつた來た。即ちフランスのブルジョアジーは金曜日毎に精進料理を食ひ、ドイツのブルジョアジーは日曜毎に敎會に行つて、長々しいプロテスタントの說敎を聞いていた。彼等は唯物論を非難しだした。『宗敎は人民の爲に維持されねばならぬ。』それが社會を滅亡から救ふ唯一最後の手段だと云ふのである。然し彼等は不幸にも、宗敎を破壞し盡す事に全力を注いだ後になつて、初めて右の事を發見したのである。そこで、今度は英國のブルジョアジーが、皮肉な嘲笑を浴せる順番になつて來た。『諸君は何といふ馬鹿だ。俺達は二百年以前にちやんとそれを知つて居たのだ。』

十二　勞働階級の勝利の希望

然し私は恐れる、英國ブルジョアジーの宗敎的鈍感も、大陸ブルジョアジーの時候おくれの改宗も、共にプロレタリヤの勃興を堰きとめるに足りないであらう。傳統は固より大いなる防止力である。歷史の抵抗である。然しそれは單なる消極的勢力であるので、いづれは亡びるに極まつている。從つて、宗敎は決して資本家社會に對する永久の護衞ではない。若し我々の法律的、哲學的、及び宗敎的の諸思想が、其の社會に行はれている經濟的諸關係からの、大なり小なりの距離を持つた、派生物であるとすれば、其の諸思想はいつか遂に、經濟關係の全く變化した其の結果に對して、維持しきれなくなる筈である。從つて、我々が超自然の天啓を信じない限り、如何なる宗派の敎義と雖も、滅亡し行く所の社會を支持する力のない事を、許容せねばならぬわけである。

實際、英國でも、勞働者が再び動きはじめている。彼等は種々なる傳統の爲に拘束されて居るには相違ない。例へば、保守黨と自由黨との二黨派より外に政黨はない、從つて勞働階級は其の强大な自由黨に依つてのみ、自分の救濟を計らねばならぬと一般に信仰されて居るような、ブル

ジョア傳統思想もそれである。又あれほど多くの古い勞働組合が、其の獨立運動の最初に於ける、試驗的努力からの遺習として、正規の徒弟奉公をやつて來ない入會希望者を排斥するような、勞働者の傳統思想も矢張りそれである。これなどは正に、銘々の組合が、自分の罷工破りを態々養成して居るやうなものである。然しそれにも係はらず、英國の勞働者は今動きだしている。ブレンタノ教授すら、悲しげに其の事を講壇社會主義のお仲間に報告している。彼等は固より他の英國の事物と同じやうに、遲々たる刻み足を以つて動いている。或る所では躊躇逡巡し、或る所では隨分と無効果の、試驗的の企てをもやつている。折々は又、社會主義の名に對して餘りの遠慮と不信用を以つて動いて居るが、それでも段々に其の實質は取入れている。そして運動は漸次に擴大して、追々に勞働者の各層を攫みつゝある。今日では最早や、ロンドンのイースト・エンド（貧民區域）に於ける不熟練勞働者をも、其の蟄伏から搖り動かしている。そして今度は逆樣に、其の新勢力が如何に見事な刺激を其の運動に與へて居るかは、人の善く知る所である。斯くして此の運動の進みが、性急な或る人々の注文には副はないとしても、英國氣質の最も立派な所の殘つて居るのは、即ち勞働階級に於いてである事、そして又、前進の一歩が一度英國に於いて獲得された以上、それは先例上、決して再び失はれない者である事を忘れてはならない。よし

昔しのチャーチストの子等は、前に說明した理由に依つて、充分の健全を示さなかつたとしても、其の孫等には必ず祖先を辱かしめぬだけの望みがある。

然し歐洲勞働階級の勝利は、英國のみに依つて決せられるものではない。それは只だ少なくとも英佛獨の協力に依つてのみ確保され得る。佛獨二國に於いては、勞働階級の運動は確かに英國以上である。獨逸に於いては、殆んど成功の域に近づかうとさへしている。最近二十五年間に於ける獨逸勞働運動の進步は實に無比である。その進步の速度は洵に猛烈である。獨逸の中流階級は、政治上の才能、訓練、勇氣、精力、及び忍耐に於いて、歎かはしい劣弱を示したとしても、獨逸勞働階級はそれらの有らゆる資格に於いて充分の證明を與へている。四百年前、獨逸は歐洲中流階級の最初の勃發の出發點であつた。然らば今日の事實として、獨逸が又、歐洲勞働階級最初の大勝利の舞臺となる事が、果して可能の範圍外に出でるであらうか。

——『唯物史觀について』終——

マルク

（附錄二）

マルク（附錄二）

譯者云。「發展」の本文第六二頁第一三行、「農村にはマルク、都市にはツンフト」とあり、そして註に「本譯書附錄」云々とある。その附錄が即ちこれで、マルクについての、エンゲルスの研究論文である。

この譯文は、鳥海篤介君の譯文（同人社發行、クノウ著「婚姻及び家族の發展過程」の附錄、及び西雅雄氏譯、エンゲルス著「ドイツに於ける農民戰爭」の附錄、所載）と、莊原達君の譯文（改造社マルクス全集第十二卷、所載）とに負ふ所が甚だ多い。

「發展」に對する、カウツキーの「原書第五版の序」（本譯書第一八二頁以下）は、この附錄「マルク」に關する、一篇の長論文である。

猶、本篇中の章わけと小見だしとは、譯者のした事です。

一　ドイツの大昔の土地制度

人口の半分ばかりもがまだ農業で生活している、ドイツのような國では、社會主義の勞働者、

及び彼等を通じて農民が、今日に於ける大小の土地所有者が元來如何にして發生したかを知る必要がある。又、今日に於ける日傭取の窮狀と、小農の借金奴隷の狀態とを、その昔の、總ての自由民の共有財産制—當時、彼等に取つて本當の『祖國』であり、祖先傳來の自由共有物であつた所のもの(即ち土地)に對する共有制—と對照して見ることが必要である。だから私はこゝに、あのドイツの大昔の土地制度に對し、簡單な歴史的説明を與へる。その土地制度は、今や見る影もない遺物として、僅かに現代に殘存して居るのである。然し中世にあつては、その全期を通じて、あらゆる公制度の基礎となり、模範となり、そして又、ドイツばかりでなく、北部フランス、イギリス、スカンヂナヴイヤなどに於ける、一切の公生活に浸みこんで居たものである。所が、それにも拘はらず、この制度は全く忘却されて、ヤツト最近に至り、ゲー・エル・マウレル (G. L. Mauler) が、新たにそれの眞意義を發見しなければならなかつたといふ始末である。

二　民族の血緣的編成と土地の共有

二個の自然的に發生した事實が、總ての、或は殆んど總ての、民族の起原史を支配している。血緣に依る民族の編成と、土地の共有制が、即ちそれ。この事は、ドイツ人に在つても亦然り。

彼等は種族、血族、親族[1]に依る編成法をアジヤから持つて來たのであるが、—又ローマ時代に於いても、彼等はその戰鬪部隊を拵へるのに、いつでも近親者が肩を並べて立つ樣にしたのであるが、—その編成法が矢張り、ラインの東、ドナウの北の、新領土の領有法(即ち分配法)にも行はれていた。各種族がそれ〴〵新領地に定住したのは、決して氣まぐれや偶然からでなく、ケーザル(Cäsar シイザア)が明示している通り、實に種族構成員の血族關係に依つたのである。即ち先づ、一定の地域が近親の一大群の所有に歸し、そして又その地域内に、若干の家族を包含する所の、個々の親族群が、村を成して定住した。次にこの數多の親族村が一個の百組(ハンデルトシャフト)[2](古代高地ドイツ語では huntari フンタリ、古代スカンヂナビヤ語では heradh ヘラード)を作り、次に又數多の百組が一個の州(或は郡。原語はガウ Gau —英譯はシヤア shire)を作り、その諸州の總體が即ち種族(或は民族)その者であつた。そこで村に徵收されて居ない土地は百組の處分に任され、百組に分配されない處は、州の爲に殘され、それでもまだ跡の使へる土地—多くは非常に廣い地域—は、全民族の直接所有であつた。斯くて我々は、スエーデンに於いては、この共有制の總ての、種々なる段階が、相並んで存在して居るのを見る。即ち各村が村共有地(bys almänningar)を持ち、そしてその外に又、百組共有地、州共有地、及び最後に又、全民族の代表としての王の名

義に屬する、從つてこゝでは王有地（Konungs almänningar）と稱せられる、民族共有地がある。然しこれらは皆、王有をも含めて、無差別に共有地（almänningar, Allmenden, Gemeinländereien）と呼ばれていた。

（1）この「種族、血族、民族に依る」の原論は、'nach Stämmen, Sippschaften, Gescichhtern である。Stamm は明かに種族だが、Sippschaft と Geschlecht は、只だ漠然と血族を意味する使用法だと考へられる。後段に Geschlecht だけが出て、Sipp が出て來ないのも、その爲だらうかと思はれる。英譯書では、Stamm を Tribe とし、跡の二語を合せて gens とし、句の全體を by tribes and gentes としてある。この gens といふ言葉は、エンゲルスの後の著書「家族、私有財産、及び國家の起原」の中に、特殊の意義で使はれているラテン語で、我々はそれを「氏」と譯している。そこで右の本文の場合は、英譯の通り「種族と氏族に依る」とするが、適切だらうかと考へられる。日本語の氏（ウヂ）は「生み筋」だといふ説もあつて、母系時代に於ける、血族社會の根本單位である。この「氏」の意味からして、「氏族」及び「氏族制度」といふ用語の意味を解して貰ひたい。

（2）これは「百人組」とすべきか「百戸組」とすべきか、ハツキリ分らないので、原語のまゝ「百組」としておく。日本の中世の「五人組」も、戸主の五人組であつて、矢張り五戸組と考へる事も出來る。只

こゝの本文の「百」が、戸（或は戸主）の大數を意味するか、それとも、人口の大數、或は壯丁の大數を意味するか、その邊に疑ひを存しておく。

三　マルク組合、割地、抽籤地

この古代スエーデンの、—それを精密に細別すれば、どうしても餘ほど後代の發展段階に屬する所の—この形體の共有地制度が、よし曾てドイツにも存在したとしても、それは間もなく消滅したのである。人口の急激な增加は、總ての村々に割當てられた所の、非常に廣い地域、即ちマルクの上に、若干の娘村（子村）を作り、その娘村は母村に對し、同權利の、或は少權利の村として、それと共に一個のマルク組合（マルク・ゲノッセンシャフト Markgenossenschaft）を作つた。そこで我々は、ドイツに於いて、資料が遡登り得る限りでは、到る處に、多數の、或は少數の村々が、一つのマルク組合に結合されて居るのを見る。所が、この聯合體の上に、少くとも最初の間は、百組もしくはガウ（州）のモット大きなマルク聯合體があつて、そして最後に全民族が、直接民族有として殘つて居る土地の行政と、その領内に屬する下級マルクに對する總監督との爲、一個の大マルク組合を作つたのである。

フランク王國がドイツの東ライン地方を征服した頃までは、まだマルク組合の重點が、州に在つた樣に、—即ち州が本來のマルク組合を包括して居た樣に—見える。と云ふのは、只これに依つてこそ、あの多數の、昔の大マルクが、王國の公務上の區分に於いて、裁判管轄權のガウ(地域)として再現した事が、初めて說明されるからである。然し、その後、間もなく、昔の大マルクの崩壞が始まつた。但し、それでも猶、十三・四世紀の『皇帝法(カイゼルレヒト)』では、原則として、一マルクが六村・乃至・十二村を包括する事になつている。

ケーザルの時代には、少なくともドイツの大部分、即ちまだ定住するに至らなかつたスウエーヴィ(Suevi)民族が、土地を共同で耕作していた。これは、他の民族からの類推でも分る筈である通り、若干の近親家族を包含する所の個々の氏族が、彼等に割當てられて、年々交替させられる所の土地を、共同で耕作し、そしてその生產物を各家族に分配するといふ遣方であつた。然しスウエーヴィ人が、我々の紀元の初ごろ、あの新住所に落ちついた時、間もなくこの事はやんでしまつた。少くともタキツス(Tacitus)(ケーザル以後百五十年)には、個々の家族に依る土地の耕作といふ事だけが知られていた。但しそれも矢張り、耕地を一年間だけ割當てられるので、毎年の終りには、更に區分され、交替させられるのであつた。

それがどんな風に行はれたかは、我々が今日猶、モーゼル河のほとり、及び謂ゆるゲヘーフエルシャフト Cehöferschaften(莊園地)の山林中に於いて、見る事が出來る。そこでは、實際もう、毎年ではないが、それでもまだ、三年、六年、九年、或は十二年毎に、その全耕地—畑と牧場—が一まとめにされて、そしてそれが位置と地質とに從つて、若干の『割地』(Gewanne(ゲヴァンネ))に分たれる。各割地は又、組合の中に存在する權利數に應じて、その數だけの細長片に等分され、そしてそれが抽籤に依つて有權者の間に分たれ、その結果、各組合員が各割地に於いて、從つて又、その位置から云つても、地質から云つても、本來平等な大地片を持つ事になる。現在では、この配分が相續、賣買等に依つて不平等になつて居るけれども、昔の完全配分が今も猶ほ單位になつて、それの半分、四分一、八分一などといふ風に、その配分が定められる。そして未墾の土地—森と牧場—は、共有地として共同の利用に任される。

四　交替所有から私有財產

これと同一な大昔の制度が、現世紀(十九世紀)の初まで、バイエルン國の、ライン沿岸の王領地に於ける謂ゆる抽籤地に殘つていたが、その耕地は、その後、個々の組合員の私有財產に移さ

れてしまつた。莊園地（ゲヘーフエルシヤフト）の方でも、同じく分配をやめて、交替所有を私有財産に變ずる事が、段々に自分達の利益だと氣がついた。かくて、全部とは云はれないまでも大部分のものは、最近四十年間に消滅してしまつて、森と牧場の共同使用のある、極小農の普通村に變じて行つた。

個人の私有財産に移された最初の土地は宅地であつた。住所の不可侵權、このあらゆる、個人的自由の基礎は、移住者の天幕荷車から、定住農夫の丸太小屋に移り、そして次第に、家と屋敷に對する完全な所有權に變じた。これだけの事は、既に、タキツス時代に起つていた。ドイツ自由民の住宅は、當時既にマルクから除外され、從つてマルクの役人の手も届かず、逃亡者の爲に安全な避難所であつたに相違ない。その事は、後世のマルク規則の中に、又部分的には既に、五世紀乃至八世紀の民族法[1]の中にも書かれてある。蓋し住居の神聖は、それが私有財産に變ずる事の結果ではなくて、原因であつた。

（1）『民族法』の原語は Volksrecht フォルクス・レヒトで、民族的習慣法を意味する。タキツスから四五百年の後、我々はこの國民法の中に於いても、耕地が個々の農夫の、無條件的ではないにしても、兎にかく相續的の自由所有であつて、賣渡し又は他の讓渡方法に依る所の

處分權を持つていた事を知る。この變遷の原因については、二つの手掛りがある。

五　地形に强制された私有制

第一、最初からドイツ自身の中に、前述の、完全な農地共有の行はれている密集村と並んで、宅地ばかりでなく、耕地までもが、共有から、即ちマルクから除外されて、個々の農家に、世襲的に分配されて居る所の、村々があつた。然しそれは、云はゞ地形に强制された樣なもので、例へばベルギーの狹隘な溪谷の樣な、又ウエストファーレンの沼澤地の間の、細長い、平坦な高地の樣なのが、それである。猶ほ降つては、オーデンワルドと、殆んど總てのアルプスの溪谷も、それである。こゝでは、今日でも、矢張りそうであるが、村が散在する個々の屋敷から成立つて居て、その各屋敷が所屬の畑地に取圍まれている。こゝでは、交替がうまく行はれないので、マルクには只だ周圍の不耕地のみが殘されていた。そこで後に、その家と屋敷を—第三者に對する讓渡として—處分する權利が重要になつて來た時、その屋敷の所有者が利益を得た。この利益を誰もが攫まうとする願望からして、畑地共有の多くの村々で慣例の割地替（使用地割當の交替制度）が消滅に歸し、從つて組合員の個々の持分が、一樣に相續され、讓渡される事になつたらしく思は

れる。

六　ローマ征服、無制限私有

第二、然るにドイツ人はローマ領に侵入して、そこを征服した。そこでは數世紀前から、土地が私有であり、而もローマ式の無制限私有であつた。從つて又そこでは、少數の征服者が、その根深い所有方式を全廢することが不可能であつた。畑地や牧場の世襲的私有制と、ローマ法との間に關連のある事は、—少くとも以前のローマ領に於いて、その關連のある事は、—今日まで保存されている可墾地共有制の遺跡が、正にライン河の左岸に、—從つて又、同じく被征服の、然しながら、全然ドイツ化された所の地域に—存在するといふ狀況が、善くそれを示して居る。フランク人が第五世紀に、あそこに定住した時、耕地共有制がまだ彼等の間に存して居たに相違ない。さもなければ、今日あそこに、莊園地（グヘーフエルシャト）や抽籤地が少しでも存在する筈がない。けれども、ここでも矢張り、私有制度が直ぐに優勢を以て押寄せて來た。その證據には、事の可墾地に關する限り、第六世紀のリプラリヤ（フランク人の一種族）の民族法には只だ私有の事のみが記されてある。そして中部ドイツでは、前述の通り、既墾地がそれと同樣、間もなく

私有になつてしまつた。

然しドイツの征服者は、畑地や牧場の私有を認めたけれども、—即ち彼等は、最初の土地分配の時に、或はその後すぐに、割地替（使用地割當の交替制度）の繰返しを、もう何の役にも立たないので、斷念して了つたけれども、—然し、その代りに彼等は、到る處に、ドイツ式の—森と牧場の共有を伴なふ所の、そして又分配地に對するマルクの支配權を持つ所の—マルク組織を導き入れた。この事は北部フランスのフランク人や、イギリスのアングロ・サクソン人の間ばかりでなく、また東フランスのブルゴンヂヤ人、南フランスとスペインの西ゴート人、イタリヤの東ゴート人、及びロンゴバルド人の間にも行はれた。但し右の中、最後に擧げた諸國に於いては、マルク組織の痕跡が、今まで知られて居る限りでは、只だ高山地方にのみ、今日まで存續して居るに過ぎない。

七　共有制度の種々なる殘存

かくてマルク組織が、耕地割當の繰返しを斷念する事に依つて、新たに採用した所の形態は、第五—八世紀の古代國民法の中ばかりでなく、又中世紀のイギリスやスカンヂナヴイヤの法律書

の中にも、十三—乃至—十七世紀の、無數なるドイツのマルク規則（謂ゆる慣例 Weistümer）の中にも、猶ほ北フランスの習慣法(Coûtumes)の中にも、屢々出くわす所の、あの姿である。

マルク組合は、個々の組合員に對して、時々、畑地と牧場の新分配を行ふ事は斷念したけれども、それらの土地に對する他の諸權利は、一つも棄てはしなかつた。そしてその諸權利こそが甚だ重要であつた。組合は組合員に對し、その土地を、只だ耕地及び牧場として利用する目的の爲に讓り渡したのであつて、決して他の目的の爲ではない。だから、その範圍を越えた事については、個々の所有者は何等の權利をも持つて居なかつた。例へば、地中で發見された寶ら物の如きも、若しそれが鋤の刄よりも深い處に在つたのならば、それは土地の所有者に屬しないで、初から組合の物である。鑛石を掘る權利なども同樣であつた。總てこれらの權利は、後に、領主と地主の利益の爲に横領された。

然し、その耕地と牧場の利用も、矢張り組合の監督と規則との下に束縛されていた。而もそれが、次のような形に於いてである。三圃農法の行はれている所では、—殆んど到る處、そうであつたのだが、—村の全耕地が、三個の等大の畑に分けられ、その各部が、代る〴〵、第一年は冬作、第二年は夏作、第三年は休作と定められていた。だから村は年々、冬畑と夏畑と休み畑を持

つていた。そして割地の際には、各組合員の持分が、この三種の畑に對して、それぞれ平等の分配になる樣に、從つて又各員が、—自分の冬作は自分の冬畑だけでやれなどといふ、—組合の耕作取締法に對して、自分の不利益なく服從する事の出來る樣に、心がけられていた。

所で、この時々の休作地は、休作中、再び共有となり、組合全體の牧場として使用される。次に他の二種の畑地は、收獲されるや否や、次の播種期まで、矢張り再び共有となり、牧場として使用された。二番刈後の牧場も同樣。又、牧場に使用された總ての畑地に於いては、持主はその柵を取去らせられた。この謂ゆる牧場取締法(Hutzwang)は、勿論、播種と收穫の時期をも個人に放任せず、總人に對して共通に、—組合の手に依るか、或は慣例に依るかして、—それを決定する事が必要であつた。

八　共有マルクの遺物遺法

その他の一切の土地、即ち家屋敷でもなく、割當の村有地でもない一切の土地は、大昔と同じく、共同使用の共有財産であつた。即ち森、牧場、荒地、濕地、川、沼、海、道、坂、狩獵地、漁場等。そして、分配された畑地マルクに對する、各組員の持分が、元來等大であつたのと同じ

く、『共有マルク』の利用に對する、各組合員の權利も平等であつた。そしてその利用方法は組合員全體に依つて決定されたのだが、それと同じく、—從來耕作された土地が最早や不足となり、共有マルクの一部が新に開墾される場合の、その分配法も、矢張り全體で決定された。共有マルクの主なる利用法は、牧畜と、飼料の樫の實を作る事で、その外、森は建築木材、薪木、敷葉、苺、茵、等を產し、沼は（若しあれば）泥炭を供給した。牧場の事、材木の事などに關する規定が、—昔の諸世紀から保存されて居る所の、そして昔の不文律の習慣法が賴りなくなりはじめた頃に書かれた所の、—多數のマルク慣例の主要な內容を成して居る。かの、今日猶ほ殘存する共同林は、即ちこの昔の、まだ分割されないマルクの、貧弱な遺物である。今一つの—少くとも、西部のドイツに存在して居る—遺物は、民族意識の中に深く根をおろして居る所の、森は共有財產だといふ觀念である。即ち森の中では、誰もが、花や、苺や、茸や、ブナの實などを採集して、森を損ぜぬ限り、大體、勝手に振舞ふ事が出來るのであつた。然るにこゝでも又、ビスマルクが策を講じて、あの有名な苺立法を以て、西部諸州を舊プロシヤの封建的地主政治の標準に引きおろした。

組合員は平等な地割と、平等な使用權を持つて居たと同じく、彼等は又元來、マルクの內部に

於いて、立法權、行政權、及び司法權について、平等の分前を持つて居た。一定の時々に、そして必要な場合にはモツト頻繁に、彼等は自由な靑空の下に集會して、マルクの事務を評決し、又マルク間の違法と爭論を裁定した。これは大昔のドイツ民族會議の縮圖に過ぎないものであり、その民族會議は又、元來、一個の大マルク會議に過ぎないものであつた。かくて法律が、—稀な緊急な場合だけではあつたが、—そこで制定され、官吏が選擧され、その職務執行が監督され、中んづく裁判が下された。議長は只、議題を整理するだけで、決議は出席の組合員全體に依つて爲された。

九　マルク制度、都市制度、同業組合制度

マルク組織[1]は、大昔の、まだ王といふ者のなかつたドイツ諸種族の間に於ける、殆んど唯一の組織であつた。昔の種族的貴族[2]は、—かの民族移動の時、或はその後、間もなく消滅したのであるが、—それは、此の組織と共に自然に發生した一切の物と同じく、容易にマルク組織に順應した。それは丁度、ケルト人種の閥族的貴族[3]が、十七世紀になつても、猶ほアイルランドの土地共有制に順應したのと同樣である。そしてこのマルク組織は、非常に深くドイツ人の全生活の中に

根を張つて居たので、我々は我が民族の發達史の中に於いて、一歩毎に其の痕跡を發見するのである。大昔にあつては、平時の公權力の全體は、全く只だ裁判權であつて、そしてそれが、百組や、州(郡)や、全民族の會議に委ねられていた。けれども、この民族裁判は、その實、マルクの事務ばかりでなく、公權力の範圍に屬する事件にも適用された所の、民族的マルク裁判に過ぎなかつた。そこで(ローマの)州組織が完成して、國家的の州裁判所が普通のマルク裁判所から分離した時でも、その兩者に於ける司法權は矢張り人民の手に存していた。だから、昔の民族的自由が既に甚だしく衰頽して、裁判義務が兵役義務と共に、貧乏した自由民に取つて堪へ難き重荷となつた時、その時はじめてカルル大王(シャーレマン)が、大多數の地方の州裁判所に於いて、民族裁判を陪審裁判[4]に變へる事が出來た。但しこの事はマルク裁判所には全く無關係であつた。マルク裁判所はそれと反對に、中世の封建的裁判所に對しても、矢張り裁判の模範であつた。そしてこの封建的裁判所に在つても、領主は只だ議題の提出者であつて、判決者は實に領民自身であつた。又、(中世の)村組織は、只一個の、獨立した村マルクのマルク組織に過ぎず、そして村が濠と壁に圍まれて町になるや否や、それが即ち町制度に變るのである。この原始的の都市マルク制度からして、あらゆる後世の都市制度は發達したのである。そして最後に、この制度を模倣し

て、中世の無數なる、—土地共有を基礎とはして居ない、—自由組合、殊に自由同業組合(ツンフト Zunft, guild)の制度が作られた。この同業組合に附與された所の、特殊の職業の專業權は、全く共有マルクの權利と同樣に取扱はれた。即ち同業組合に於いても、マルクの場合と同樣な嫉妬心を以て、又しばゞそれと全然同樣な手段を以て、共同の利源に對する各組合員の分前を、全く、或は出來るだけ、平等にする事に苦心した。

(1)「組織」の原語はフェルフアッスング Verfassung で、「制度」とした方が善い場合もある。英譯には「この不文憲法」といふ説明的譯語を用いた個所もある。フエルフアツングスは、云ふまでもなく、後の「憲法」である。

(2)「種族的貴族」は Stammesadel, tribal nobility で、國家組織のまだ生じない、種族制度、氏族制度時代の、族内貴族である。

(3)「閥族的貴族」或は「藩閥的貴族」は Clanadel, clan nobility で、種族制度、氏族制度が亡びて以後の、征服者的貴族である。

(4) この陪審裁判を、現在のビスマルク、レオンハルト式の陪審裁判と混同してはならない。この後者の場合では、陪審員と裁判官とが一緒になつて判決を下すのであるが、昔の陪審裁判所には、法律家と

いふ者が全く無く、裁判長もしくは判事は、一票の評決權も持たず、只だ陪審員だけが獨立で判決を下すのであつた。（以上原註）。但しその陪審員は、裁判官が人民中から指名するであつた。

十　マルク組織の順應力、農奴の發生

この殆んど驚嘆に値する順應の能力、―それはマルク組織が、公生活の種々の方面に對し、樣々の要求に對して、發展させた所のものであるが、―それは又、農業進歩の道程の中、及び土地大所有の勃興に對する（農民の）闘爭の中にも現はれている。この組織はドイツ人がグルニヤに定住した時から、―從つて牧畜が主要な源泉であり、そしてアジヤから輸入された所の、既に半ば忘れられた農業が、ヤツト復活しかけた時に、―發生したものであつた。だからそれは、全中世紀を通じて、地主貴族との、激烈な絶間なき闘爭に依つて、僅かに持ちこたへられていた。然るにそれが、（農民の爲）いよ〳〵ます〳〵必要であつたので、貴族が農民の土地を併呑した處では、何處でも必ず、その隷屬村の組織が、―もちろん領主の干渉の爲、甚だしく制限されたものではあつたけれども、―兎にかくマルク組織として殘存していた。その一例は後に述べる事にする。何しろこのマルク組織は（未開墾の）共有マルクがまだ殘存して居る限り、その耕地の、變轉

きわまりなき、あらゆる所有關係（所有方式）に順應したが、共同マルクが自由でなくなるや否や（即ち、それが社會の自由財産で無くなると同時に）、今度は又その種々樣々なる所有權（私有權）に順應した。そしてそれは（このマルク組織は）、農地の殆んど全部が、分割地も不分割地も（私有地も公有地も）、國王の好意的援助の下に於ける、貴族と僧侶との盜奪に依つて、全く滅亡に歸した。然しそれがいよ〳〵實際上に於いて、經濟的には時代後れとなり、農業の經營方式としては最早や生存不能に歸したのは、前世紀に於ける耕作法の大進歩が、農業を一の科學と爲し、全く新らしい經營法を導き入れてから以後の事である。

このマルク組織の滅亡は、民族移動の後（ローマ帝國建設の後）、間もなく始まつた。フランクの國王等は、國民の代表として、全國民に屬する所の巨大な土地、殊に森林を取りあげて、それを自分の寵臣や、將軍や、高僧などに對し、贈り物としてバラまいた。後世に於ける、貴族と教會との、土地の大所有の根源は、ここに存して居る。教會は當時、カルル大帝以前、永く既に、フランス國全土の、優に三分一を所有していた。そしてこの關係（この割合）が確かに、中世紀を通じて、カトリツク教の西部ヨーロツパ全體に亘つて、頗る善く當てはまつて居た。

絶え間なき內外の戰爭は、必ず常に土地の沒收を來し、その結果、農民の大多數が滅亡した。

従つて既に、メロヴインゲル(メロヴインジヤン)王朝時代、土地を所有しない自由民が甚だ多數であつた。カルル大帝の間斷なき戰爭は、自由農民の根本能力を粉碎した。元來、土地を所有する總ての自由民には、軍役の義務があり、そして自分で武裝を整へねばならぬばかりでなく、又六個月の軍務期間、自分で給養せねばならぬのであつた。だから、カルル時代に於いて、既に、五人の中、一人しか、實際上、兵籍に入る事が出來なかつたと云ふのは、怪むに足りない。カルル以後の紊亂した經濟の下に在つては、農民の自由が一層急激に疲弊した。一面には、ノルマン人の來襲、諸王間の不斷の戰爭、貴族間の確執などが、次から次へと自由農民を驅り立てて、自分の保護を托すべき、それ〴〵の主君を求めしめた。又一面にはこれらの君侯達と教會[1]との貪慾が、この過程を促進した。即ち彼等は、詐欺と、約束と、威嚇と、暴力を以て、ます〳〵多くの農民と農地とを自己の權力の下に持ち來した。そして右二つ共の場合に於いて、農民の土地は主君の土地に變ぜられ、そして高々の所、年貢と人役とに對する償ひとして、農民に還附されるに過ぎなかつた。斯くて農民は、自由なる土地所有者から一變して、年貢を出させられる、そして人役を務めさせられる、一個の隷屬民、即ち全くの農奴になつた。西部フランク王國、殊にライン河以西は、これが通例であつた。之に反し、ライン河以東に於いては、まだ多數の自由農民が存在して

大部分は散在し、稀には自由民ばかりの村に集合していた。但し、こゝでも、十世紀乃至十二世紀には貴族[1]と教會の大權力が、矢張り段々と、多數の農民を隷屬狀態に落し入れた。

(1) 當時の教會(若しくは、その僧職)は、實際上、他の封建君主と同じく、一個の大地主であり、領主であり、貴族であり、大名と同じ樣なものであつた。日本でも昔の神社佛寺にば、社領、寺領の土地があり、それに附屬する農民があつた。

十一　マルクの存續、農奴制の確立まで

所で、當時若し領主が、—僧職的のでも、世間的のでも—一の農地を得たならば、彼は同時に又、その土地に屬する所の、マルク內の權利をも得た。斯くて新領主はマルクの組合員となり、マルク內に在つては、他の組合員—即ち自由民でも、隷屬民でも、自分自身の農奴ですらも、—に對し、元來は只だ同一の權利を與へられていた。然るに間もなく彼等は、農民の頑强な反抗にも係はらず、多くの地方に於いて、マルク內に特權を占め、遂には屢々、マルクその者をすら、領主としての自分の支配下に屈服させた。然し、それでも矢張り、昔のマルク組合は、領主の監督の下にではあるが、兎にかく存續した。

又當時、このマルク組織が、農業の爲に、土地の大所有の爲にすらも、如何に絶對に必要であつたかは、—ブランデンブルクやシレジヤに於ける、フリジヤ人、ネデルランド人、ザクゼン人、ライン・フランク人などの移住者に依つて、—最も顯著に證明されている。これらの人々は、十二世紀以後、領主の地内に村を成して移住し來り、而もそれがドイツ法に依り、即ち昔のマルク法に依り、—その法がまだ領主の地内に行はれて居る限り、—その法に依つて居るのであつた。即ち各人は家と屋敷を村有地の内で割當てられ、そしてそれが皆な同一の大いさであり、昔風に籤で分けられるのであり、又森と牧場の使用權を—大抵は領主の森の中で、稀には別のマルク内で—與へられて居るのであつた。總てこれらの權利は世襲的で、土地所有權は固より領主に在り、住民はそれに對して一定の年貢と人役を世襲的に負擔するのであつた。但しその負擔は輕微で、從つてこゝの農民は、ドツト中の何處の農民よりも、樂に暮していた。だから彼等は、あの農民戰爭が勃發した時にも、ジツトしていた。そして彼等は、この自分の事（農民戰爭）に對する脫退者として、嚴罰を受けたりした。

十三世紀の中ごろ、農民に好都合な、決定的の方向轉換が各所に行はれた。十字軍がその先例であつた。出征する領主等の中には、斷然、その農民を解放した者が多かつた。死んだ者、滅亡した者も多かつた。數百家の貴族が消滅して、その農民は大抵やはり自由を得た。それに、領主等の窮乏が增大するにつれて、農民から年貢を取立てる事の方が、彼等の身體を使用する事よりも遙かに重要となつて來た。そこで中世の初頃の、まだ多分に大昔の農奴制を存して居た所の農奴制が、領主等に取つては、段々と、價値のない權利になつてしつた。領主權は次第に亡びて、農奴の地位は單なる地付農夫（世襲小作人）のようなものになつて來た。然るに農業の經營は全く昔のまゝであつたのだから、領主の收入の增加は、只だ新地の開墾と新村の設立に依るより外はなかつた。所が、それは常に、移住民との間に、—その移住民が地付であるにせよ、外來であるにせよ、—好意の協調を保つ事に依つてのみ可能であつた。だから當時は到る處に、大抵は重くない年貢のハツキリした約定と、農民に對する、殊に僧職地主の、好遇とが、行はれて居たのである。そして又最後に、新來の移住民の良好な地位が、近隣の他付民の上に影響を及ぼし、その結果、彼等も亦、北部ドイツの全體に於いて、引續き領主に年貢は納めながらも、自分の身體の自由だけは獲得した。只、スラヴと、リトニヤ・ブロシヤだけの農民は解放されなかつた。但し、それらも總て永續すべきものではなかつた。

十四世紀および十五世紀に於いて、都市は急激に勃興して富裕になつた。彼等の美術工藝と贅

澤生活が、殊に南ドイツとライン諸州に繁榮した。都市貴族の豪奢が、粗食と、粗衣と、不恰好な家具との田舍貴族を、靜かに眠らせては置かなかつた。然し、そうした立派な品々は何處から得られるのか。追剝は段々に危險となり、割が悪くなつた。と云つて、買ふには金がいる。金は只だ農夫のみが作りだし得るのであつた。だから農夫に對する壓迫のやりなほし、即ち年貢と賦役の增大が發生した。要するにそれは、自由農民を地付農民に下し、地付農民を農奴に下し、そして結局、共有のマルク地を私有の領主地に變じさせようとする、領主等の熱望の、絶間なき促進の現はれであつた。況んや領主等と貴族等はこの事について、ローマの法律家達から擁護された。即ち法律家達はローマ法の條文を、ドイツの事情—大部分、自分達に分りもしない事情—に適用して、そこに無限の混雜を發生させる事、而もその混雜の中に於いて、領主がいつでも其の爲に利益を得、農民がいつでも損をする事を、善く心得ていた。僧職的領主はモット簡單にやつてのけた。彼等は文書を僞造して、それに依つて農民の權利を縮少させ、その義務を增大させた。かくの如き、領主共の—貴族および僧侶の—掠奪に反抗して、十五世紀末以來、農民等は屢々思ひ〳〵の一揆を起したが、遂に一五二五年、あの大農民戰爭の勃發となり、シュウエーベン、バイエルン、フランケンから、エルザッス、ファルツ、ラインガウ、チューリンゲンまでも氾濫した。農民等は苦戰力鬪の後、降伏した。それから以後、ドイツ農民の間に於ける、農奴制の一般的優勝が再開された。この戰ひの烈しかつた諸地方では、農民に殘されていた一切の權利は、全く無遠慮に蹂躙され、彼等の共有地は領主の私有地となり、彼等自身は農奴となつてしまつた。そして北部ドイツの農民等は、この時、稍や良好な境遇にあつたので、騷ぎには加はらなかつたが、そのお蔭は只、他よりも徐々に、同一の壓迫を受けたと云ふに過ぎなかつた。斯くてドイツの農奴制は、東プロイセン、ポンメルン、ブランデンブルク、シレジヤ等に於いては、十六世紀の半から、又シュレスウイヒ、ホルスタインに於いては、同世紀の末から採用され、そしてそれから以後、いよ〳〵一般的に農民を壓迫した。

十二　資本時代、大農時代、農民の墮落

この新らしい暴力行爲には、別に又、一つの經濟的理由があつた。宗教改革時代の鬪爭に依つて權力を增大したものは、ドイツの大諸侯ばかりであつた、小貴族[1]の高等掠奪業[2]はモウ駄目になつた。彼等が滅亡を免れる爲には、その所有地からヨリ多くの收入を搾りだすより外はなかつた。然しその爲の唯一の方法は、大領主(大諸侯)と、殊には修道院の例に倣つて、少なくとも其の領

地の一部を自已の計算に於いて耕作する事であつた。從來、例外に過ぎなかつた事が、今は必須になつて來た。然るに、この新經營法に取つては、土地が殆んど到る處に於いて、小作農の手に渡されて居る事が、その邪魔になつた。小作農は、自由民でも地付民でも、全くの農奴にされてしまつたので、有難い御領主様は何でも勝手に出來る事になつた。そこで一部の農民は、專門語の謂ゆる『立退』を食はされた。即ち彼等は、そこから追拂はれるか、或は只その小屋と少しばかりの庭地とを持つ所の土百姓[3]に落され、そして彼等の作地は領主の大作地に併合されて、新たな土百姓と、まだ殘つている他の農民とに依つて、賦役制[4]で耕作された。斯くて多くの農民が只だ驅逐されたと云ふばかりでなく、まだ殘つている者の賦役が著るしく、而もいよ〳〵ます〳〵、增大された。資本主義時代は、地方農村に在つては、農奴的の賦役制を基礎とする、農業大規模經營の時代として出現したのであつた。

(1) 原語は Adel (nobility) で、『小貴族』の『小』の字は、譯者が必要と考へて補足した。日本で云へば、丁度『武士』に相當する。

(2) 前項と同じく、『高等掠奪業』も、丁度、日本の中世に於ける、『切取强盜、武士の習ひ』に相當する。

(3) 原語は Kotsassen (cotter)、土百姓、或は水呑百姓に當る。直譯すれば、小屋住み。

(4) 原語は Frondienst (corvée)、領主から領民に對し、强制的に賦課する勞役。即ち賦役、或は人役。

この變化は然し、初の中はまだ頗る緩漫に行はれていた。そこに三十年戰爭がやつて來た。この三十年の間、ドイツは史上に類例のない、無紀律の暴兵から、縱横無盡に蹂躙された。到る處が徵發され、掠奪され、燒拂はれ、强姦され、殺戮された。中んづく、農民が最も多く苦しんだのは、大部隊から離れた小いさな獨立隊、或はむしろ自由掠奪者の連中が、銘々の腕力に依り、銘々の計算を以て、勝手に行動した處であつた。土地の荒廢と人口の減少には際限がなかつた。平和が來た時、ドイツは只、踏みにじられ、切りきざまれ、血みどろになり、弱りきつて地上に仆れていた。所が、こゝでも矢張り、農民が一等みじめであつた。

土地を所有する小貴族が、今では農村に於ける唯一の主君であつた。丁度その頃、大諸侯達は、國會に於ける小貴族等の政權を拒否した時であつたので、その代り、農民に對する點に於いては、彼等に勝手を許していた。然るに農民の最後の抵抗力は、既に戰爭の爲に破壞されていた。從つて貴族等は、あらゆる農村の事物を、自分等の疲弊した財政の復興に對し、最も善く適合するように施設する事が出來た。荒廢した農地が直ちに領主の莊園に併合されたばかりでなく、農民の追立てが今はじめて、大仕掛に、そして組織的に行はれた。領主の莊園が大きくなればなるほど、

農民の賦役も勿論增大した。『際限なき勞役』の時代が又やつて來た。有難い御領主樣は、その農民と、その家族と、その家畜とを、幾度でも多く、幾らでも永く、氣の向いただけ、追ひ使ふ事が出來た。農奴制が今では既に一般的となり、自由農民は白い烏ほど珍らしくなつた。從つて又、御領主樣は、農民のあらゆる、極小でもの抵抗を、二葉の中に摘みきる事の出來る樣、大諸侯から領主裁判權を得ていた。即ち彼は、農民間の、あらゆる小事件と爭論とに對する、只つた一人の裁判官に任命されていた。殊に農民の訴へが彼に對するもの、即ち領主に對するものである場合すらも同樣で、その場合、領主は自分自身に對する裁判官になるわけであつた!。この時以來、杖と鞭とが農村を支配した。ドイツの農民は、全ドイツ國と同じく、墮落のドン底に落入つた。斯くて農民は又、全ドイツ國と同じく、全く無力となり、一切の自助策が斷念され、救濟は只だ外部から來るより外は無い事になつた。

十三　自由農民の再建、社會的農業、農民と勞働者

救濟は遂に來た。フランス革命と共に、ドイツの國とドイツの農民とに對しても、ヨリ善き時代のあけぼのが現はれた。革命軍がラインの左岸を征服するや否や、そこでは直ぐに、古くさい

屑物の全部、—賦役だの、年貢だの、御領主樣への樣々の捧げ物だの—が、御領主樣自身をも引つくるめて、魔法の如くに消え去つた。ライン左岸の農民達は、今や自分の耕作地の主人となり、おまけに、革命時代に起草されて、そしてナポレオンから下手につゞくられたに過きない、コード・シヴィルの法典（民法）を得た。この法典は彼等の新らしい境遇に善く適合したものであり、そして彼等はそれを理解したばかりでなく、又それをポケットに入れて持ち運ぶの便利を得たのであつた。

然しライン右岸の農民はまだズット永く待たねばならなかつた。尤も、プロイセン（プロシヤ）に於いては、イエナの當然の敗北[1]の後、最醜最惡なる貴族特權の若干が廢止され、殘餘の農民負擔[2]に對する、謂ゆる償却[2]が法律上に可能となつた。但しその事は大部分、且つ永らく、只だ紙上のみに止まつて居た。他の國々では、それがモット駄目だつた。少なくとも、バーデンと、他の若干の、フランス境の諸小邦とに在つては、この償却を宣傳させる爲には、一八三〇年の第二フランス革命を必要としたのであつた。そして一八四八年の第三フランス革命が、遂にドイツをも引きずつた時にも、プロイセンの償却はまだ中々完了せず、バイエルンではまだ始まりもしなかつた!。勿論、今日では、それがモット急速に進みつゝある。今度はもう自分から叛逆的になつて

いる所の、農民の賦役勞働なるものは、全くその價値を失つてしまつたのである。

（1）一八〇六年十月十四日、プロシヤ軍がイエナに於いて、ナポレオンのフランス軍と戰つて大敗した。死傷一萬二千、捕虜一萬五千。

（2）「負擔」の原語は Lasten (burden) で、年貢、賦役、其他、農民が負擔する所の、諸種の義務を意味する。「償却」の原語は ablösung (redemption) で、負債の償却、實物の受出し、又は奴隷、娼婦などの身受を意味する。次の節で、その事が明瞭になつている。

所で、この償却とは一體、何であるか。御領主様は、何程かの金子、或は何程かの土地を農民から受取る代りに、彼等の殘餘の土地に對しては、今後彼等の自由なる、何等それが爲の負擔なき財產として、それを承認する事になるのである。但し、以前から既に御領主様の所有に屬して居る、全體の土地と雖も、總てそれは、農民から盜んだ物に外ならなかつた！。まだそればかりではない。右の清算について、その執行を委任された官吏が、當然、殆んど極まりきつた様に、御領主様の味方となり、それと共に起臥し、共に宴飲して、結局、農民は、法律の正文に反してすらも、こゝで又大詐欺に引つかゝるのであつた。

扨、我々は斯くて、三回のフランス革命と、一回のドイツ革命とのお蔭で、遂に今、再び自由

農民を有するといふ所まで漕ぎつけて居る。然しながら、この我々の、今日の自由農民が、昔の自由なマルク組合員に比べて、如何に甚だしく劣つて居ることよ！。彼等の屋敷は大抵、昔のに比べて遙かに小いさなものであり、その不分割のマルクは、僅かの、甚だしく縮少された、そして零落した共有林に成りさがつている。然るに、小農に取つては、マルクの使用が出來なければ、家畜は飼へないし、家畜がなければ肥料がなく、肥料がなければ合理的な耕作は全く出來ない。收稅吏と、その背後で人を威嚇する執達吏とは、—今日の農民こそ知り過ぎるほど知つて居るが、—昔のマルク組合員に取つては、見も知らぬ人々であつた。あの抵當高利貸—あれの爪にかゝつて、農地が今、次から次へと亡びて行くのだが、—あれも矢張り右同樣であつた。只だ有難い事には、この新らしい自由農民が、土地も翼も散々に切り割かれて、—何事でも、もう間に合はない頃になつてヤツト起つて來る所の、このドイツに於いて、—而も科學的農業と、まだその上に新發明の農業機械とが、小規模經營を段々に時代後れと爲し、もはや到底、生存力のない經營法にしてしまつた今日の時代に於いて、—漸くそうした自由農民が發生したのである。機械紡績と機械織布が、糸挽車と手織機に對するのと同じく、この新らしい農業的生產方法は、必ずあの極小農の經營法を徹底的に否定し、土地大所有法を以て之に代らしめるに相違ない。但しそ

れは、その爲に必要なだけの時間が許されるならばである。

何となれば、今日既に、全ヨーロッパの、現に行はれて居る所の農業に對し、アメリカに於ける穀物の大量生産が、優勢なる競爭者として、脅威を加へている。この、自然その者から可耕的にされ、そして長い年月の間、施肥された所の、そして又、僅かなハシタ金で手に入る所の土地に對しては、我がヨーロッパの借金だらけの小農も、同じく大負債で首も廻らない大地主も、どちらも到底、競爭は出來ない。全ヨーロッパの農業經營法は、アメリカの競爭の前に敗北している。ヨーロッパの農業は、只それが社會的に經營され、社會の計算に於いて經營される場合にのみ、猶ほ可能である。

これが我が農民の、前途の展望である。そして如何に萎微して居るとは云へ、兎にかく自由農民階級の再建といふ事は、これだけの善を持つている。即ちそれは、農民を移して、—その自然の同盟員たる勞働者の支持を受けつゝ—進んで自ら助け得るの地位に置いた事である。そして彼等が自ら助け得るに至るのは、只その如何にしてを理解しさへすれば、直ぐである。

——「マルク」終——

序文四種

（附錄三）

原書第一版の序（エンゲルス）

本書は私の著作『オイゲン・デユウリング氏の科學の革命』[1] (Herrn Eugen Dühlings Umwälzung der Wissenschaft)（ライプチヒ、一八七八年）の中の三章から成つている。私はその三章を、友人ポール・ラフアルグ[2] (Paul Lafargue) の爲に、フランス語に反譯すべく編纂して、更に若干の敷衍を施した。その、私の校閲したフランス譯は、先づ『社會主義評論』(Revue socialiste) に掲載され、次に『空想的社會主義と科學的社會主義』(Socialisme utopique et socialisme scientifique) といふ表題の單行本（パリ、一八八〇年）で發行された。そのフランス譯から作られたポーランド譯がツイこの頃、ゲンフで發行された。[3]

（1）『デユウリング氏の科學の革命』の事については、後の『英譯の序』にくわしく書いてある。

（2）ラフアルグはフランス人で、マルクスの次女ローラと結婚し、後に有名な社會主義者になつた人。

（3）原書には、語學通のエンゲルスの事だから、こゝにポーランド語で『空想的および科學的社會主義』といふ表題が記してあり、猶フランス語で『ジユネーヴ、オーロラ印刷所、一八二八年』と書きそへてある。ゲンフとジユネーヴとは、スキス國に於ける同一の都會の名で、前者はドイツ語、後者はフラン

ス語である。スキス國には、ドイツ語とフランス語とが並んで行はれている。

このラファルグ譯の、フランス語諸國に於ける、殊にフランス國自身に於ける、驚くべき成功からして、この三章のドイツ語の別冊が矢張り入用ではないかといふ問題が、私の頭に起つて來た。その時、丁度、チユウリヒの新聞『社會民主々義者』の編輯部から話があつて、ドイツの社會民主黨の內部一般に亘つて、新らしい宣傳用の小冊子に對する要求が高まつて居ると云ふ事で、あの三章をそれに向ける氣はないかと私に尋ねて來た。私はもちろんそれに同意して、その仕事に掛つた。

然るに、あの三章は元來、決して、直接宣傳用の通俗本として書かれたものでなかつた。あの殆んど純粹の科學的著述が、そんな事に適する筈がない。然らば形式および內容に於ける、如何なる變更が必要であつたか。

形式に就いては、只だ多くの外國語が考慮に上るだけであつた。然しラツサアル (Lassalle) が既に、彼の演說と宣傳本とに於いて、少しも外國語を遠慮しなかつた。そして私の知る限りでは、誰もそれに苦情を云つて居ない。その時から以後、我が勞働者達は、遙かに多くの、又遙かに正式の新聞紙を讀み、そしてそれが爲、外國語に對しても、同じ程度に多く親しんで居るだらう。

だから私は、總ての不必要な外國語を除くだけにとどめた。避くべからざる外國語に對しては、私は、かの謂ゆる說明的反譯の附け加へを斷念した。不可避の外國語、即ち大抵一般に使用されて居る科學的の專門語は、若しそれが反譯され得るものなら、初から不可避では無いのである。だからその反譯は意味を變改するものである。意味を說明するのでなく、混亂させるものである。口頭の傳授の方が、その場合、遙かに多く役に立つ。

內容の方は之に反し、ドイツの讀者に取つて、大して六かしい事はないと言ひ得ると思ふ。只、六かしいのは、大體、第三章だけだが、然し勞働者に取つては、自分達一般の生活條件がそこに概說されて居るのだから、『敎育ある』ブルジョアに取つてよりも、遙かにやさしい筈である。私がそこに書き入れた、多數の說明的な補足については、私は實際、勞働者に對してよりも、『敎育ある』讀者に對して餘計に考慮した。彼等の中には、代議士フオン・アイネルン氏、樞密顧問官ハインリヒ・フオン・ジーベル氏、及び其他のトライチユケ一派[1]の如く、防ぎきれない衝動に驅られて、その恐ろしい無智と、それから當然生ずる所の社會主義の大誤解とを、繰返し繰返し印刷物にして御馳走する人達もあるだらう。然しドンキホーテ[5]が風車に向つて槍を構へるのは、それは彼の職分であり、役目である。けれども、サンチヨ・パンザに對しては、我々ば斷じてそんな眞

似を許す事は出來ない。

（4）トライチュケはドイツの有名な國家主義者で、新聞記者であり、著述家であり、議員であり、政治家であつた。

（5）こゝは、トライチュケ一派の者をドンキホーテに喩へ、それに追隨する所の「教育ある」讀者を、サンチョに喩へて愚弄したのである。サンチョはドンキホーテの從僕で、その主人と共に有名である。

この種の讀者は又、略述された社會主義發展史の中に於いて、カント・ラプラースの宇宙發生論や、近代科學とダアヰンや、ドイツ古典哲學とヘーゲルなどにブツつかる事を、不思議に思ふだらう。[6] 然し科學的社會主義は、何と云つても、根本がドイツの產物であつて、古典哲學が意識された辯證法（ヂヤレクチーク）[7]の傳統を生々と保存した國民—即ちドイツ國[8]—の中にのみ發生し得たのである。唯物的歷史觀[9]と、それの、プロレタリアートとブルジョアジーとの間に於ける近世的階級鬪爭に對する特殊の適用とは、只だ辯證法の仲介に依つてのみ可能である。然るに若し、ドイツのブルジョアジーの學校教師達が、ドイツの大哲學者達に對する記憶と、その人々から傳へられた辯證法とを、一個の不毛なる折衷主義の沼に溺れしめたので、それが爲、我々が、現實界に於ける辯證法確認の證人として、近代科學に訴へることを餘儀なくされて居るのだとするならば、それなら

ば我々ドイツの社會主義は、サンシモシとフーリエとオーエンからばかりでなく、實に又カントとフイヒテとヘーゲルから系統を引いて居ることを誇りとする者である。

ロンドン、一八八二年九月廿一日

Friedrich Engels（フリードリヒ エンゲルス）

（6）本書の第二章に、カントやダアヰンやヘーゲルが引合に出されて居る。然し、それが少しも不思議でないといふ理由を、エンゲルスがこゝで說明して居るのである。

（7）辯證法、唯物的歷史觀、その他、この邊の事については、第二章の本文と、其の註とを見よ。

（8）（原註）「ドイツ國」（"In Deutschland"）は書きそこないだ。ここは「ドイツ人」（"Bei Deutschen"）とあるべきところ。何となれば、科學的社會主義の創生記の爲には、一方には、ドイツの辯證法が爾く必須であり、それに又、イギリスとフランスの、發達した經濟的および政治的の諸關係が、同樣に必須であつた。あのドイツの、四十年代の初には今日よりも猶ほ遙かにおくれて居た、經濟的および政治的の發達段階は高々のところ、社會主義的ポンチ畫を作りだし得るのであつた（共產黨宣言、第三章一のC「ドイツ社會主義、或は眞正社會主義」參照）。（だから）イギリスやフランスに作りだされた、經濟的および政治的の狀態が、ドイツの辯證法的批判に附せられた時、その時はじめて本當の結論が得られたのであつた。

斯くて、この方面に於いては、科學的社會主義は決して獨占的なるドイツの産物でなく、矢張り國際的の産物であつた。（だから、前記の場合、ドイツ國と云はないで、ドイツ人と云ふべきである――譯者。）

（9）共産黨宣言第三章一のC『ドイツ社會主義云々』の處には、次の如く書いてある。「「フランスの社會主義的及び共産主義的文書は、支配階級たるブルジョアジーの壓迫の下に起り、其の支配權に對する戰鬪の文學的表現を爲して居たのであるが、その文書がドイツに輸入されたのは、丁度ドイツのブルジョアジーが、封建的專制政治に對して戰鬪を開始した時であつた。」「ドイツの哲學者、半哲學者、及び文藝家は熱心にこの文書を耽讀したが、只だ彼等は、その文書がフランスからドイツに移植された時、フランスの生活關係がそれと共に移植されなかつたといふ事を忘れていた。そこでこのフランスの文書は、ドイツの社會關係に對して、全くその直接實際的の意義を失ひ、『革命的フランス・ブルジョアの意志表現も、彼等の眼中には只だ純粹の意志、正當の意志、眞の人間の意志の法則としてのみ映じたのである。」「フランスの社會主義及び共産主義文書は、斯樣にして明かに去勢された。そしてそれらの文書がドイツ人の手の中で、一階級の他階級に對する鬪爭の意義を失つた時、ドイツ人はそれで「フランス的偏見」を去つたと思ひ、現實の要求でなく、眞理の要求を代表したと思ひ、プロレタリヤの利益でなく、人間性（即ち一般人間）の利益を代表したと思つた。」

原書第四版の序

（エンゲルス）

この書の內容が、我がドイツの勞働者に取つて、大して六かしくないであらうといふ、私の推測が裏書された。第一版の發行された一八八三年の三月以後、少なくとも三版を通じて總計一萬部が印刷された。而もそれが故社會主義法[1]の支配下に於いてであつて、―それが同時に又、近世プロレタリアートの運動の如き者に對しては、警察の禁止が如何に無力であるかといふ事の一新例である。

第一版以後、更に種々なる外國語譯が發行された。バスカル・マルチネイのイタリー譯、ベネヴエント、一八八三年。ロシヤ譯、ゲンフ一八八四年。デンマーク譯、社會主義文庫第一卷、コペンハーゲン一八八五年。スペイン譯、マドリッド一八八六年。及びオランダ譯、ハーグ一八八六年。[1]

（1）こゝには、それぞれの國語で表題が記してあるが、それは一々譯出しない。（譯者）

この（第四）版には種々なる小變更が加へられた。稍や重要な補足が二つの場合だけにある。即ち第一章サンシモンについて、そこはフーリエとオーエンとに對して、餘り短きに失して居た。

次に第三章の終に近い處、今や正に重要を示して來た所の、新生産形態『トラスト』について。

ロンドン、一八九一年五月十二日

フリードリヒ・エンゲルス

（1）「社會主義法」は即ち有名なビスマークの「社會主義鎮壓法」の事で、この序文の書かれた時には、既に廢止されて居つたのだから、それでエンゲルスが皮肉に「故」の字を冠らせたのである。

英譯の序（エンゲルス）

一　此の書の由來

此の小冊子は元來、モット大きな著述の一部である。一八七五年頃、ベルリン大學の講師エー・ヂューリング博士が突然に、そしてずいぶん仰々しく、社會主義に歸依した事を發表した。そして一つの巧妙な社會主義學說ばかりでなく、更に社會の改造に對する綿密な實行案を作つて、それをドイツの公衆に提供した。勿論、彼は先行者と衝突した。中んづくマルクスに對しては、猛烈な憤怒の氣を注ぎかける事に依つて敬意を表した。

此の事のあつた時、ドイツの社會黨の二派—アイゼナハ派とラッサール派—は今丁度合同を成遂げたところで、勢力の激增を示したばかりでなく、更に其の勢力の全部を擧げて共通の敵に當るべき機能を獲得していた。ドイツ社會黨は急速に一個の力となりつゝあつた。然しそれを力とする爲には、新たに得た其の一致團結を危ふくせぬ事が第一の要件であつた。然るにヂューリング博士は、將來に於ける別個の社會黨の核心たるべき一派を、公然と自分の周圍に作りはじめた。